布哇日本人銘鑑

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak
C Y M
Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Inches
cm

VE2
238

國立圖書館
62. 2. 16
國立圖書館

YOUNG MEN'S BUDDHIST ASSOCIATION
哇布
布哇佛教青年會
ホノルル
HONOLULU, T. H.

86W64472

四海春風

幣原喜重郎

四海春風生

幣原喜重郎

序

布哇の總人口三十二万三千餘中約十三万は日本人及び日系市民にして總人口の約四割弱を占む、實に大和民族の刮目すべき發展と謂はざる可らず。曩には森田榮氏布哇日本人發展史及布哇五十年史、又青木柳崖氏布哇日本人評論等を刊行して布哇の制度、文物、風土、産業其他萬般に亘りて關係事情を紹介し裨益する所あり、斯くして此種布哇研究は常時等閑視せられざるに拘はらず布哇全体の解剖乃至分拆して之を概括し一目瞭然たらしむるが如きは難事中の至難たり。

大和民族海外發展の急先鋒者たる布哇移住日本人同胞は殆んど決死の覺悟を以て三千餘哩の波濤を越へ布哇を開發したる活歴史を有す、併かも今や此等の先驅者は漸く老齢に達し次代同胞は日系市民として所有方

面に活躍勇飛せんとしつゝあり、此時に當つて偶ま元布哇新報社長たりし曾川政男君來訪話次示すに布哇日本人銘鑑の稿本を以てし且言はく這は二十年間布哇に在住し新聞記者生活の其傍ら研究を積み蒐集したる材料に依り脱稿したる著作なりと、曾川君は實に二十年間此地に在りて屢々各島を踏査し其實際に就き探査見聞し之を基礎として布哇人銘鑑を著述せらる、同君は予に取りては舊知の間柄と云ふに非らざるも蒞任以來會談の機會を得、布哇事情に就ては造詣甚だ深く其所見は普通車窓の瞥見に出でざる論斷とは自ら其撰を異にせり、今回君が心血を濺ぎて其蘊蓄を盡されたる本書の目次一讀するに分類の極めて該博周到なるを認めたり、惟ふに著者其人を得、發刊其時を得たるものと謂ふ可きなり、本書の如きは汎く識者の參考資料となり心ずや世を裨益する所尠少ならざるべく其出版を歡ぶもの決して君の相識知友のみにあらざることを信ず、

予も亦他日刊行を俟て啓發さる所あらむことを樂む、因つて一言を題し序と爲す。

一千九百二十六年十二月

在ホノルル

總領事　桑島主計

序

近時布哇在留初代同胞の急激に凋落しつゝあるは洵に寂寞の感に堪えないものがあるが、次代同胞たる日系市民をしてよく父母兄姉が苦心努力の跡を回顧するに足るべき史實を獲せしむる必要あるを痛感せざるを得ない。今回前布哇新報主筆曾川政男君が布哇日本人銘鑑の刊行を企圖されたる事は吾人の雙手を擧げてその時に當れるを賛すると共に又一面その人を得たるを喜ぶものである。

今や布哇日本人社會は次代同胞の活動舞臺に移り、進んで三代同胞の教育及び將來を如何にすべきか父子共に孫兒の方針を議すべき時機となり來つた。予は今にして三十年間苦鬪の跡を偲び我が子孫等の將來を想ふて轉た感慨の深きものあるを覺える。

初代同胞口を開けば布哇出生青年男女の非を嗚らし次代青年はまたかへつて徒らに父兄のことを議する傾向あるはこれ共に各の地位境遇を理解同情するの乏しきに職由するもの誠に遺憾の極みと言はざるを得ない。

吾人は日本人排斥や壓迫に悲觀し動搖するほど卑屈ではなく又なかつた筈である。唯憂ふるところは我等が唯一の遺産とし記念として全力を盡して教育せる次代子弟が果してよく父兄四十餘年の辛苦を以て固めたる生活の根抵を更に鞏固にして其上に雄飛活躍し得るや否や。日本移民史の上に、海外發展史の上に布哇産業發達史の上に偉大なる業蹟と貢献とを遂けたる父兄の地位を果してよく眞に評價し得るや否や。また彼等をして兎も角も今日獨立自營し得べき彼等たらしめたる父兄の苦心經營に對し果して一片の感謝報恩の念ありや否やにあると言はねばならぬ。

吾人は曾川君の筆を借りて活きたる歴史を彼等に永久に記念せしむる

ことを得ば望外の喜びとするものである。

吾人は獨立獨歩、母國人士の侮蔑と無視との間に起ちて不屈不撓周圍の排斥と壓迫との中に進み事實上母國の殖民問題解決の卒先實行者として默々としてこの布哇の天地に生活の根據を移し植えたのである。

我等の次代同胞また獨立獨歩不屈不撓の精神を持しよく父祖の業を大成せんことこそこれ我が切なる念願である。

些か所懷の一端を披瀝して序に代ふる所以である。

一千九百二十六年十二月

今村惠猛

序

我同胞が布哇に來始めたのは明治十八年で、我開國後漸く四十年のことである。當時要路の人々に移民政策などのあらう筈なく、三年契約の出稼人として人々を送出し、渡米した人々も亦た出來るだけ短い年月に出來るだけ多く金を溜めて歸ろうと考へたものである。是れ實に在留同胞の歴史已に四十年に達して、而かも尚未だ地盤堅固ならず實力缺乏せる所以である。

然るに最近十四五年時勢の變遷と共に在留同胞の思想著しく變化し、又種々の事情のため永住の臍を固むる者も漸く殖へて來た。余輩は思ふ、たとへ好んでも好まないでも玆に腰を落付けて、年々增加する子供等のため肥料にでもなつてやる覺悟の者は、小金を溜めて故郷に錦を飾る者

よりは、民族發達の上から云へば遙かに尊敬すべき者と云はねばならぬ。この意味から考へて、本書收むる所の同胞諸士は、正に我民族海外發展の先驅者、移民としての成功者といふべきであらう。

彼のアングロサクソンの人々が海外移住の跡を見るに、家族を纏め家財を仕末し、初から到る處に墳墓の地と定めて事に當て居る。即ち彼等は後ろの橋を燒き、すべての障碍を破て進路を開いて居る。蓋し彼等は天地の主なる神を父と信じ、此世界は父の家、世界何處にも父偕に在すと云ふ信念があつた故に、其事業を成し得たのである。我同胞も玆に考へたならば、大に得る所があるであらう。

平生の所感を記して序となす。

一千九百二十六年十一月　感謝日に於て

奥村多喜衛

緒言

日本の國策の一ともいふべき『海外發展』議論を後にしてその海外發展を文字通り實踐躬行したのは布哇の日本人である、日本内地の人達が海外移民を出稼人として蔑視した頃、布哇の日本人は既に甘蔗畑に粒々辛苦の汗を流してゐた、日本内地の人達が漸く目が醒めて鹿爪らしく海外發展を大呼せる時には、椰子茂る布哇の山隅、アロガロヴア林の蔭には幾百千日本文字の墓標が熱帶地の黄い陽光を受けながら寂しく立並んでゐた。

蒼黑い顔した日本人らしくない日本人がトロンコを擁して横濱や神戸に上陸すると布哇歸りだと卑んだ眼で迎へられる、布哇歸りとは何事だそれが海外發展を不言實行した勇士に對する禮であらうか、布哇の日本

人が愛する母國に送つた金は幾億圓に上る、一枚の弗貨でも貴き汗と血の結晶である、その一弗が積り積つて幾億圓となり如何に日本の國家經濟を益したことか、海外發展の功業は別として物質的貢献だけ見ても大したものではないか。

ジャツプ嫌ひを叫ぶ米人がある、しかし文化と産業に榮ゆる布哇、太平洋の樂園、その布哇をして今日あらしめたのは一体誰の力だ、誰の力でもない日本人の賜ではないか、排日者流が如何に鼓を鳴らしても此の事實は抹殺すべくもない、日本人ほど勤勉で温順で生産的であり文化的である移民が世界に又とあらうか、布哇が大切な過渡期に日本人を迎へたのは大なる幸福であつた。

日本から觀れば布哇の日本人は植民史の第一頁に特記さるべき海外發展の先驅者である、布哇から見れば日本人はダイヤモンド　ヘツド大の表彰碑に價する貢献者である。

だがしかしその日本人も寄る年波には敵はない、多年の奮鬪勞苦で大に疲れ、甚だ衰へた、或は死し或は老い、時代は將に特殊の環境と文化を有つ第二世日本人に替らうとしてをる。

此の時、此の際、何等かの形式でそれら日本人の片影を個人的に留めて記念的文献となすは無意義の業でない、何故ならば第一世日本人の一人一人は悉く貴き歷史の所有者であり、その人々の總和は日本海外發展史の重要なる部分を占むるからである、本書著述の動機はこゝに存する、唯だ菲才淺學、意餘つて力足らず珠玉を望んで瓦礫を摑んだ憾はあるが、兎も角大方諸彥の後援と庇護により上梓の運びに至りたるは無上の喜悅とし且つ感謝する處である、若しそれ此の一書が布哇及び布哇の日本人を紹介する資料ともならば著者の本願これに如くなしである。

昭和元年諒闇中

ホノルルに於て

曾川政男

贊助會員芳名錄

布哇日本人銘鑑刊行會の贊助會員として定額會費を納めて日本人銘鑑刊行事業を經濟的に支持し且つ直接間接多大の助力を致されたる諸氏の芳名を掲げて感謝の意を表する、極少數を除く幾んど全部諸氏の略歴は本文在留人物略傳中に輯錄しあり、物質的や社會的にいへば所謂成功者もあれば失敗者もあり一樣ならずと雖も、何れも初代日本人中社會の第一線に立ちて種々の方面に活動せしことあり、又た現に活動しつゝある人物に外ならぬ、諸氏の經歴は即ち一般布哇在留日本人の歴史なり生活なりを如實に語るものであると信ずる。

布哇日本人銘鑑刊行會

曾川政男

人名（備考　便宜上縣別となし在住島地を記せり）

人名	住地
北海道	
堀定正	ホノルル
寺崎貞助	ホノルル
東京府	
伊藤平次郎	マウイ
池野正男	オアフ
岩永知一	ホノルル
井田平	ホノルル
二木良衛	東京
小野寺德治	ホノルル
小澤健三郎	死亡
大塚長雄	マウイ
鎌野爽治	ホノルル
内田金二	ホノルル
内田重吉	東京
相賀安太郎	ホノルル
内海賢登	ホノルル
前田龜太郎	オアフ
松澤四方吉	ホノルル
小杉鐵之輔	東京
遠藤捨松	ホノルル
宮本純	ホノルル
菅村芳弘	ハワイ
京都府	
原田助	ホノルル
林吉松	ホノルル
堀貞一	ホノルル
桐村義英	カワイ
宮崎匪石	カワイ
大阪府	
植田龜次郎	ホノルル
柳原吉太郎	カワイ
飯田鴻一	ホノルル
酒井秀司	ホノルル
神奈川縣	
絹谷顯保	横濱
牧野金三郎	ホノルル
土屋精一	ホノルル
兵庫縣	
岩崎關三	オアフ
井上直二郎	ホノルル
藤岡文八	ハワイ
長崎縣	
中尾弐良	ホノルル
山口隆戒	オアフ
佐藤味法	ハワイ
木村齊次	死亡
新潟縣	
石栗半九郎	オアフ
今井己三郎	ハワイ
植田昌平	マウイ
西村行藏	ホノルル
遠山市太郎	マウイ
戸田文平	オアフ
大久保長吉	ホノルル
渡邊幸太郎	カワイ
加藤文八	カワイ
金井貞吉	ホノルル
横野民三郎	ホノルル
吉岡熊太郎	マウイ
中山準藏	ホノルル
丸山金一郎	ホノルル
藤野培造	ハワイ
菊池萬吉	ホノルル
木津爲太郎	ホノルル
見田政造	ホノルル
駒形善敎	ホノルル
後藤清次郎	ホノルル
群馬縣	
星野傳三郎	加州
北村健司	マウイ
北村松五郎	マウイ
千葉縣	
岩佐新藏	ホノルル
西ケ谷政吉	ホノルル
藤本潮溫	マウイ
茨城縣	

本川源之助	死亡
栃木縣	
吉澤次郎	ホノルル
眞下龍平	ホノルル
奈良縣	
寺田安太郎	ホノルル
三重縣	
新谷峰五郎	ホノルル
黑田峻英	マウイ
山本鐵造	ハワイ
岸田英一	ホノルル
愛知縣	
沖鐵次郎	東京
中澤蕃昌	ホノルル
廣田寛敬	オアフ
靜岡縣	
堀内壽平	マウイ
大畑誠一	マウイ
尾崎三七	ホノルル
尾崎澤次郎	ホノルル
村田勝平	オアフ
黑田重三郎	ホノルル
八代作吉	マウイ
朝比奈梅吉	ホノルル
鈴木多次郎	ホノルル
石橋雅吉	マウイ
山梨縣	
飯島由太郎	オアフ
馬場巳作	ホノルル
堀内德政	ホノルル
堀内勝雄	ホノルル
堀内良平	ホノルル
米倉國三郎	死亡
高野爲寛	マウイ
龍澤小六	マウイ
古屋理一郎	オアフ
清水濟	ホノルル
古明地利輔	ホノルル
古屋熊次	ホノルル
滋賀縣	
松井登太良	ホノルル
岐阜縣	
小栗高太郎	ホノルル
長野縣	
岩下貞亮	ホノルル
東福寺子四郎	マウイ
東福寺香	マウイ
茨木小彌太	ホノルル
宮城縣	
伊藤庸次	オアフ
永澤雄之進	ハワイ
富川勇三	ハワイ
村上杏助	日本
藤門周吉	マウイ
今野一郎	ホノルル
阿部金五郎	ホノルル
白田喜造	オアフ
福島縣	
今泉秀	ハワイ
半澤徹治	マウイ
折笠寅三郎	マウイ
岡崎音治	ホノルル
渡部七郎	ホノルル
渡邊彌吉	マウイ
高橋德衛	ホノルル
菅野鐵次	オアフ
國分鐵吉	マウイ
芳賀七郎	ホノルル
東海林甚七	ホノルル
大森政衛	ラナイ
渡邊酋藏	ホノルル
渡邊潔	ハワイ
高橋政一	マウイ
菅野角治	ホノルル
安田明治	ハワイ
尖戸福治	マウイ
嚴手縣	
一戸信太郎	オアフ
宇野雅雄	ホノルル
後藤鎭平	マウイ
紺野留吉	死亡
山形縣	
上島泰岳	オアフ
福井縣	
今村惠猛	ホノルル
大江法爾	カワイ

谷間欽誠　ハワイ
永岡有信　オアフ
出目常宣　カワイ
本好祐章　マウイ
德山省吾　ホノルル
柏龍天　オアフ
龍溪玄深　ホノルル
松井勇哲　マウイ
宮川智補　ハワイ

石川縣

毛利伊賀　ホノルル
毛利元一　ホノルル
勝木市太郎　ホノルル

富山縣

橋本松次郎　ホノルル
奥野作次郎　ホノルル
吉澤龜次郎　マウイ
大井賢成　オアフ
大崎梅次郎　ホノルル
安森勝太郎　ホノルル

島根縣

口羽義教　日本

藤谷晃道　ホノルル
藤野要太郎　カワイ
仙田壽之吉

岡山縣

岡本惣三郎　カワイ
大西龍二　日本
雛波次男　ホノルル
三宅直吉　ホノルル
小野壽吉　ホノルル
河内文雄　ホノルル
笠井太馬喜　オアフ

廣島縣

石井新一　カワイ
伊藤理一郎　オアフ
井口宇右衛門　ホノルル
石井勇吉　ホノルル
糸賀淺吉　ホノルル
石井喜太郎　ハワイ
原直之　ホノルル
林繁次郎　カワイ
濱野國松　マウイ
長谷川三郎　カワイ
早川治郎　ホノルル

西村要　ホノルル
錦田萬吉　マウイ
仁井見德一　オアフ
堂野文司　ホノルル
友清盛一　マウイ
太田傳次郎　カワイ
岡崎求一　カワイ
一場勳　オアフ
泉原寛海　廣島
一本杉隆一　ホノルル
石原新松　ホノルル
岩本福次郎　ホノルル
橋本敏三　ホノルル
濱田臺五郎　カワイ
濱田勘吾　ホノルル
橋本清市　マウイ
原田春市　マウイ
二井勘次郎　オアフ
本田菊一　マウイ
土井來助　カワイ
百百增太郎　オアフ
尾上卯一　カワイ
濱田初太郎　ホノルル
西原春吉　ホノルル

大谷孫一　マウイ
岡本兼松　マウイ
太田達一　オアフ
王堂辰次郎　廣島
岡迫要爾　ホノルル
岡砂藤一　ホノルル
河野新太郎　カワイ
兼田孫三郎　マウイ
河原哲夫　カワイ
川口力一　マウイ
加屋清一　オアフ
念一　ホノルル
龜山弘應　ホノルル
河本觀次郎　ハワイ
河内辰次郎　ハワイ
横川與市　ハワイ
横田一人　カワイ
佛田近之一　マウイ
岡本德一　ラナイ
大竹辰次郎　オアフ
太田登一　ハワイ
大濱太　ホノルル
和田一郎　マウイ
梶谷甚九郎　カワイ

河野市太郎　マウイ
勝谷克己　マウイ
川原田牧三　マウイ
加藤利八　オアフ
影佐熊太郎　ホノルル
川原順一　ホノルル
勘道今次郎　ハワイ
吉野佐太郎　ホノルル
横竹松四郎　カワイ
吉增新次郎　マウイ
立石雛次郎　カワイ
田邊三之亟　マウイ
高山甚吉　ハワイ
田中政之助　ハワイ
田中彌六　ハワイ
田村繁一　ハワイ
武田一登　カワイ
伊達直太郎　ホノルル
田原治久馬　ホノルル
田中小太郎　ホノルル
空山總二　マウイ
筒井眞次郎　ホノルル
猫本俊一　ホノルル
森杉延吉　廣島

中尾茂造　カワイ
長道尖藏　マウイ
中島犀一郎　ホノルル
名田勇次郎　ホノルル
中村勘一郎　ホノルル
竹下健市　ラナイ
竹中新太郎　オアフ
谷口稔　ハワイ
田中良次　ハワイ
大師德三　ハワイ
田阪聞政　ホノルル
高橋直一　ホノルル
田中仙學院　ホノルル
田頭嘉男　ホノルル
空中光太郎　ホノルル
曾根田健二　ホノルル
辻德市　ホノルル
永井秀雄　ハワイ
中辻貞次　カワイ
中原百一　マウイ
永木平三郎　オアフ
中村一郎　ホノルル
長守又二　ホノルル
村田壽吉　マウイ

上岡達之助　オアフ
上杉健之助　ホノルル
濃人鍬一　カワイ
國宗小佐次郎　ホノルル
桑原群一　ハワイ
草岡信次郎　ハワイ
久保田記三　カワイ
香内光　マウイ
香内直記　マウイ
山肩貞三　ハワイ
山肩禮夫　ハワイ
山岡佐太郎　マウイ
山本嘉市　マウイ
山崎森太郎　オアフ
山口正八　オアフ
山田新太郎　ホノルル
山本吾三郎　ホノルル
松井格助　マウイ
植田政一　ホノルル
登倉松　ホノルル
桑原達吉　ホノルル
倉本信次郎　ホノルル
黑川淳三　ハワイ
久保田佐一郎　カワイ

桑田彦太郎　マウイ
國近菊平　マウイ
草尾雄五郎　オアフ
山村勝次郎　ハワイ
山崎勝太郎　カワイ
安井里助　マウイ
山本初一　マウイ
山本一行　オアフ
山本昌作　ホノルル
安井柳太郎　ホノルル
山城松太郎　ホノルル
前原禎一郎　マウイ
增田留藏　マウイ
松尾精一　ホノルル
增田正史　ホノルル
益田增太郎　カワイ
藤木正夫　ホノルル
藤井順一　廣島
藤井吉次　ハワイ
藤本龜太郎　ハワイ
福錄彌八　マウイ
藤井清市　オアフ
福永秀一　オアフ
小出祐一　ホノルル

小林榮之助　ホノルル
小林宥仁　日本
小林元一　マウイ
河面格助　ハワイ
胡子信一　ホノルル
松井嘉市　マウイ
增原與市　ハワイ
丸本玉次郎　ハワイ
松村正穗　マウイ
福田善一　ホノルル
藤川壽郎　ホノルル
福城諸久　ハワイ
藤井作助　死亡
福永是一　マウイ
藤島壽平　オアフ
古川七郎　オアフ
小林幸次郎　ホノルル
小林金次郎　ホノルル
兒玉群二　カワイ
小林善三郎　マウイ
兒玉令一　ホノルル
惠下藤吉　ハワイ
寺田太次郎　ホノルル
寺本梅吉　ハワイ

青山正法　オアフ
佐久間房吉　ホノルル
澤村作市　ホノルル
更科眞里　マウイ
佐伯圖一　カワイ
迫田德次郎　マウイ
木下白夫　ホノルル
木谷法觀　ハワイ
吉川多三郎　マウイ
宮本淳　ホノルル
三輪仙吉　廣島
宮田喬一　ホノルル
三坂德松　ハワイ
宮增鶴松　オアフ
新宅賢一　ハワイ
正田喜一　マウイ
傳明地襄一　ホノルル
寺本甚松　マウイ
佐伯末吉　ホノルル
佐伯政太郎　ホノルル
坂井德一　日本
迫田常二　カワイ
貞宗德助　マウイ
坂井嘉作　オアフ

木下作一　日本
北口熊吉　マウイ
水野甚太郎　ホノルル
三輪省吾　ホノルル
宮玉勝良　ホノルル
水田謹一　ホノルル
滿田豊藏　マウイ
清水小市　ハワイ
新原保太郎　ハワイ
生田貞一　マウイ
下甲義人　ホノルル
廣川專吾　ホノルル
日野義雄　ラナイ
森分篤一　カワイ
森川虎一　ハワイ
隅田睦治　ホノルル
住田多治郎　日本
須磨仙吉　マウイ
出羽五十人　ホノルル
廣畑市郎　ホノルル
平本清治郎　カワイ
檜垣久一　ハワイ
毛利佐一　マウイ
森五郎　ハワイ

切東秀一　ハワイ
住田代藏　ホノルル
末田代次郎　ホノルル
福木理忠太　ホノルル
畑貞之助　日本
今井友三　ホノルル
沖寛一　ホノルル
立原兵馬　ハワイ
三保勝一　マウイ
廣田齊　死亡
堀田喜代治　マウイ
田中玉一　オアフ
黑川哲爾　ホノルル

山口縣

井小路一男　ハワイ
生長榮助　オアフ
磯村高助　ホノルル
濱崎好松　ハワイ
橋本伊三吉　ハワイ
濱崎甚助　マウイ
濱名初槌　オアフ
島中善吉　ホノルル
林辨藏　ホノルル

西川忠三郎　ホノルル
西山勘助　ホノルル
堀田治助　死亡
星出保太郎　マウイ
苦井伴助　ホノルル
近森作藏　マウイ
大城戸健一　ハワイ
大木幸一　カワイ
岡村虎助　カワイ
岡田德太郎　マウイ
一木彦太郎　マウイ
井上協平　ホノルル
濱元貞助　ホノルル
橋本秋代　ハワイ
林龜之助　ハワイ
伴敬三　マウイ
濱田九一　オアフ
橋本萬槌　ホノルル
原田耕藏　ホノルル
西村秀市　ハワイ
堀本忠一　ホノルル
本城繁藏　カワイ
富川安七　ホノルル
十時竹次郎　カワイ

尾中九市　ハワイ
沖本藏次郎　カワイ
大田重太郎　カワイ
大岡寛　マウイ
織田博愛　ハワイ
尾川仙之助　ホノルル
小田泰助　ホノルル
脇本勝一　ホノルル
鍛冶寅雄　カワイ
河崎久太郎　マウイ
高無萬之助　オアフ
河村大藏　ホノルル
河谷道太郎　ホノルル
河本勝一　ホノルル
横山國五郎　ハワイ
吉本種一　カワイ
米元勝　ハワイ
田村槇太郎　オアフ
田村忠義　ハワイ
田中滿治　ハワイ
田中治三郎　カワイ
峠市藏　カワイ
谷村松右衛門　ホノルル
岡田多一　ホノルル

大空與作　ホノルル
河崎京一　カワイ
垣内庄作　マウイ
河口利三郎　オアフ
河村弘嚴　オアフ
茅原長助　ホノルル
嘉屋嘉一　ホノルル
河村義一　ホノルル
芳本義人　カワイ
吉原久吉　マウイ
谷岡松次郎　マウイ
田中林藏　オアフ
高田龜之助　ハワイ
高木秀道　ハワイ
竹本勇太郎　カワイ
田島政吉　カワイ
高村鐵藏　死亡
田村峯吉　ホノルル
築山長松　ホノルル
津田默龍　オアフ
中塚一郎　カワイ
中島金子　マウイ
中川市之進　マウイ
中村好太郎　ホノルル

中市勇一　ホノルル
中村持照　ハワイ
中津柳太郎　日本
村上惣四郎　ホノルル
村田安太郎　カワイ
内山一郎　オアフ
内田近治　ホノルル
野坂孫一　ホノルル
國行幾造　カワイ
倉崎重一　マウイ
山本清三　ホノルル
矢野友一　ハワイ
竹本久平　ハワイ
坪井與三郎　マウイ
中重彌一郎　カワイ
梨羽峯太郎　マウイ
中橋鶴松　マウイ
中山猷次郎　オアフ
中山五郎　日本
中村惣七　ハワイ
奈良元道助　ハワイ
村田龍一　ホノルル
村川逸郎　ホノルル
村岡祝司　マウイ

上田新吉 ウヒルル
植田百次 ハワイ
國清太吉 ホノルル
國光嘉市 マウイ
國廣寅一 ハワイ
山本照之助 ホノルル
山代屋兼七 カワイ
山中哲一 カワイ
山近峯三郎 ホノルル
安井美然 オアフ
山本美代吉 ホノルル
山根宇一 マウイ
松岡榮藏 オアフ
松尾梅助 ホノルル
松田常三 死亡
町田友三 ハワイ
松村正人 ホノルル
藤江茂一 ホノルル
古林七兵衛 ホノルル
藤岡久吉 ハワイ
藤田傳次郎 ハワイ
藤本亦藏 カワイ
藤元龍一 マウイ
藤村貞雄

驛藤一 ホノルル
山崎達軀 カワイ
山本清吉 マウイ
山本勝三郎 ホノルル
山重乙二 ホノルル
町田龜三郎 マウイ
松本和助 マウイ
松田猪七 ホノルル
町田龍助 ホノルル
松並一雄 ハワイ
藤上敏夫 ホノルル
藤浴常次郎 ホノルル
藤川平吉 ホノルル
藤木正亮 ハワイ
藤本虎藏 ハワイ
鰐永金槌 カワイ
藤本清 カワイ
米屋三代槌 ホノルル
寺河内宇作 ホノルル
寺岡仁輔 カワイ
淺海庄一 ホノルル
阿川太助 マウイ
佐藤好助 日本
佐藤太一 ホノルル

眞安春美 ホノルル
岸井彦七 ホノルル
木村吾一 ホノルル
清弘正一 マウイ
三浦信一 オアフ
三浦萬吉 カワイ
清水兵作 ホノルル
椎木市之亟 ホノルル
靜間五郎 ハワイ
島田新吉 カワイ
弘津益次郎 マウイ
森藤定人 ホノルル
森重峯之助 カワイ
淺海吾一 カワイ
秋田京一 ハワイ
明本重藏 マウイ
佐貫十七一 日本
佐伯彌樂 ホノルル
坂本德弍 マウイ
岸八郎 ホノルル
木村三右衛門 マウイ
湯尻法眼 日本
宮城武夫 オアフ
光井柳介 カワイ

繁田幸一 ホノルル
島本清一 ホノルル
島本運平 ハワイ
白木菊槌 カワイ
弘重重一 オアフ
本重和助 日本
桃山義男 カワイ
森原宇作 ハワイ
杉田定吉 ホノルル
末岡章 マウイ
門出馬之亟 カワイ
須内一信 ホノルル
石田久壽郎 ホノルル
米重清槌 ホノルル
青木秀作 ホノルル
岡本幸次郎 ホノルル
梅本圭祐 マウイ

和歌山縣

瀧本修次郎 ホノルル
長井慶太郎 ホノルル
中筋五郎吉 ホノルル
山本荒太郎 ホノルル
籔井由松 マウイ

木下梅市 マウイ
中畑忠雄 カワイ
中山市太郎 ホノルル
內田榮太郎 マウイ
山塚禎次 ハワイ
貴多鶴松 ホノルル
冷水幸太郎 ハワイ

香川縣

尾上久二 ホノルル
薦田竹造 マウイ
松田隆彥 マウイ

愛媛縣

岡本英吉 カワイ
楠本鶴吉 ハワイ
森田樂 オアフ
關屋長次郎 ホノルル
岡浪之助 ホノルル
城瀧大六 ホノルル
清家武雄 カワイ
芳我日下 ホノルル
大久保良太郎 ホノルル

高知縣

細井勇 ホノルル
奥村多喜衛 ホノルル
岡本楠榮 ホノルル
有光正孝 ホノルル
川崎正鄕 ホノルル

福岡縣

岩佐末次 オアフ
羽野島吉 オアフ
堀忠三 オアフ
豐福初太郎 カワイ
小川道二 ホノルル
河野喜好 ホノルル
田中彥一 マウイ
曾我部四郎 ハワイ
央旭 ホノルル
中尾新太郎 ハワイ
宇野友吉 マウイ
大和光次郎 ハワイ
的野又雄 オアフ
古野保 ホノルル
近藤省三 死亡
佐藤嘉太郎 マウイ
北島音次郎

粂井安太郎 ホノルル
關屋芳太郎 オアフ
原田義海 ホノルル
西島榮次郎 カワイ
堀川伊助 オアフ
豐福鹿藏 カワイ
河田政昭 ホノルル
吉田留次郎 マウイ
田川英次郎 ホノルル
堤千吾 ホノルル
央參次郎 マウイ
宇野誠 カワイ
藏岡靜 ホノルル
山口七藏 ハワイ
眞子金藏 ホノルル
深田晋一郎 ホノルル
穴見半吾 ハワイ
行德榮太郎 ホノルル
秀德源次郎 オアフ
關屋吉太郎

大分縣

後藤官平 ハワイ
宮本文哲 オアフ

佐賀縣

原田常太郎 ホノルル
早木森太郎 カワイ
內田鐵心 ハワイ

熊本縣

岩本又喜 ハワイ
岩永秀記 マウイ
伊藤光行 マウイ
井芹辰藏 死亡
原田剛 マウイ
林茂喜 ホノルル
西岡三澄 ハワイ
本田忠太郎 マウイ
德丸熊喜 マウイ
岡田才平 マウイ
奥村寅次 マウイ
緒方數彥 ホノルル
緒方熊市 ハワイ
渡邊峰雄 オアフ
桂政藏 カワイ
吉岡文藏 マウイ
竹森達二 オアフ
高野市平

谷山勝次　ハワイ
伊田市作　カワイ
伊藤尚　マウイ
伊津野忠三　ホノルル
春永萬喜　ハワイ
長谷川圓藏　ホノルル
西本竹平　ハワイ
本田榮作　ホノルル
友枝生藏　マウイ
岡本敬春　ハワイ
太田龜喜　マウイ
小田切源策　ホノルル
緒方清四郎　ホノルル
渡邊純造　ホノルル
河野一幸　オアフ
吉川吉太郎　ホノルル
田添龍壽　マウイ
谷川三藏　ラナイ
竹内國太郎　オアフ
高橋秀夫　ホノルル
谷川富藏　ホノルル
田中久次郎　ホノルル
角田初平　ホノルル
中島勇喜　ホノルル

村上勝平　ハワイ
有働貞三　ホノルル
上森七藏　オアフ
野田政次郎　マウイ
楠本丑之助　ハワイ
矢野唯雄　ホノルル
山本滿平　マウイ
山本重子　ハワイ
松坂丈吉　オアフ
松永安平　ホノルル
松本民平　ホノルル
松坂茂　ホノルル
松本慶次　ハワイ
間下法雹　カワイ
高木末熊　ホノルル
高畑寅次　ハワイ
永田清　ホノルル
中原仙太郎　ハワイ
村岡廣喜　カワイ
上村二男　日本
野田儀角　ホノルル
野口次郎喜　ホノルル
山下忠　ホノルル
山下義之　ホノルル

山田恒藏　マウイ
八岡市次郎　カワイ
前田鶴喜　オアフ
前田勝喜　ホノルル
松村保　ホノルル
增永壽三郎　ハワイ
前田仁平　カワイ
藤本時正　ホノルル
藤本實平　ラナイ
福島睦夫　オアフ
有田仙藏　ハワイ
佐伯群司　ホノルル
佐藤勝藏　ホノルル
坂田利三郎　ハワイ
坂口勝平　カワイ
佐藤又平　マウイ
喜佐田善藏　カワイ
水本重喜　ホノルル
宮原義明　ハワイ
品川末繼　マウイ
平井勝利　オアフ
森永千次郎　ホノルル
福田弟一郎　オアフ
小久保久彦　カワイ

有田專次　ハワイ
榮木鎭次郎　ホノルル
坂本九市　ハワイ
坂田運次郎　ハワイ
佐渡武茂　マウイ
佐々木喜代次　オアフ
木村寅喜　マウイ
宮本才八　ホノルル
三原政喜　ハワイ
下田半次郎　マウイ
平山福平　オアフ
江崎彌一　ハワイ
佐藤祐之　ホノルル
齋田利右衛門　マウイ

鹿兒島縣

永山常太郎　ハワイ
山本晋　オアフ
松崎清志　ホノルル
萬壽榮二　マウイ
堀內儀雄　マウイ
橋口盛左衛門　ホノルル

沖繩縣

金城善助　ホノルル
平良與常　マウイ
平良牛助　ホノルル
玉榮仁牛　ハワイ
津嘉山朝保　オアフ
上江淵智綸　死亡
上里良溫　オアフ
屋宜盛蒲　ハワイ
又吉全興　ハワイ
新田建繁　ハワイ
宮城源水　ホノルル
比嘉靜觀　ホノルル
當山哲夫　ホノルル
金城直造　ハワイ
高嶺正金　ハワイ
田島朝明　ホノルル
津波章孝　ラナイ
中村準平藏　ハワイ
上原加邦　ハワイ
上原與吉　オアフ
屋嘉宗常　カワイ
小波津喜朝　マウイ
喜多朝猷　カワイ
宮城高光　オアフ

小波津幸秀　ホノルル

布哇

竹廣稔　ハワイ

例言

一、本書は布哇に於ける第一代日本人の個人的履歴を輯錄するを主眼とする、個人の經歴を綜合對比するに於て布哇日本人の歴史と業績と狀態を内面的に知ることが出來るからである。

一、個人の經歴を叙するに當りてなるべく批判、評論の筆を避けてありの儘を正直に平面的に記述することにした、資料蒐集を數人で分擔したので人物傳の記述法に統一を欠いだ憾なしとしない、此點諒恕を請ふ。

一、本書は成功者傳でも立志傳でもない、成敗利鈍に論なく社會の第一線に活動した人物を出來るだけ網羅するに努めた、しかし歸國、死亡、本人の意志等の事由により資料を得ること能はざる人物の少からざる

を遺憾とする。

一、本書は布哇及び布哇日本人に關する一般智識を得せしめんがため布哇事情梗概を掲げた、成るべく數字を少なくし批評的な叙述法を用ゐたのは立體的に布哇の事情を知らしめんとする老婆心に出づ。

一、本書編纂に當りて『布哇五十年史』の著者森田榮氏より有益なる參老資料を提供されたること、増田貞太郎、河原哲夫、藤中正輔、南部水生の諸氏が資料蒐集の任を分ち松坂茂氏が刋行配本に盡力されたるを感謝する、増田氏が上梓の日を待たずして長逝されたるは殘念である。

一、本書は布哇に於ける最初の試みとて編纂に非常の苦心をなし望蜀の欲よりいへば杜撰の譏りなきを免れない、更に機會を見て増補改訂、完全なものを出版したい。

一、年代を記すに當り人物略傳には日本歴を用ゐた、日本人に取つては日本歴の方が聯想に容易だからである、しかし布哇事情梗概には西歴を使つた、卷中挿入の日本歴、西洋歴對照表を參考せられたい。

一、人物略傳の配列を『イロハ』順となした、縣別しある賛助會員芳名錄と對比するならば姓名或は縣別により自由に索引することが出來る。賛助會員の幾んど全部は人物略傳に輯錄してある。

昭和元年十二月三十日

ホノルルにて

著者　曾川政男

布哇の玄關たるホノルル港を印象的ならしむる名峰ダイヤモンドヘッドの遠望

るらせ稱とーチシ、ンーリーグはルルノホむ富に樹綠

ポリネシア人唯一の英雄布哇王朝の開祖、カメハメハ第一世の銅像、
ホノルル縣地方裁判所構内にあり

世界一の活火山キラウエア、布哇島にあり華盛頓政府直轄國立公立と指定さる

ホノルル市の北背、分水嶺にあるヌアヌパリの絶勝、カメハ第一世が敵軍を鏖殺せる古戰場

布哇の主要産業、甘蔗耕地の伐採作業

世界的優良を誇る鳳梨畑

布哇日本人銘鑑目次

布哇事情梗概　其一

第一編　總論

第一章　布哇の國土……一
第一節　布哇の名稱……一
第二節　布哇の面積……二
第三節　布哇の地質……三
第四節　布哇の氣候……三
第五節　布哇の生物……四
第六節　各地との距離……七
第七節　布哇の高地……九
第二章　各島誌……一三
第一節　ホノルル……一三
第二節　オアフ島……一三
第三節　マウイ島……一三
第四節　カワイ島……一四
第五節　ハワイ島……一五
第六節　其他島嶼……一六
第三章　布哇の社會……一七
第一節　布哇の人種……一七
第二節　布哇の人口……一八
第三節　出生、死亡……二三
第四節　市哇の政體……二四
第五節　布哇の教育……二五
第六節　布哇の宗教……二七
第七節　布哇の軍備……二八
第四章　布哇の產業……二九

第一節　糖　業……二九
第二節　鳳　梨　業……三六
第三節　珈　琲　業……三八
第四節　米作業其他……三九
第五節　漁　業……四一
葉六節　商　業……四一

第二編　歷　史

第一章　布哇王朝史……四四
第一節　布哇の發見……四四
第二節　カメハメハ出現……四六
第三節　外國勢力侵入……四七
第四節　王朝歷代治世……四九
第二章　米布合併……五〇
第一節　革命獨立經過……五〇
第二節　革命當時狀態……五二
第三節　米布合併成立……五三

第三編　日本人

第一章　歷史的交涉……五五
第一節　日本人漂着者……五五
第二節　日布修交第一步……五六
第二章　日本移民沿革……五七
第一節　布哇移民由來……五七
第二節　最初の移民……五八
第三節　官約第一回船……五八
第四節　日本移民禁止……五九
第三章　社會的變遷……六〇
第一節　移民時代……六〇
第二節　定住時代……六二
第三節　第二世時代……六三
第四章　日本人と教育……六五
第一節　日英兩語教育……六五
第二節　日本語學校……六五

第三節　教育界變遷……六七
第四節　學校試訴問題……六八
第五節　子女教育方針……六八
第五章　日本人と宗教……七〇
第一節　基　督　教……七〇
第二節　佛　教……七一
第三節　神　道……七四
第四節　宗教概觀……七五
第六章　日本人と產業……七六
第一節　日本人の立場……七六
第二節　農　業……七七
第三節　商　業……七八
第四節　漁　業……八〇
第五節　職業種別表……八一

特別附錄

駐米帝國外交官表……八六
邦歷西歷對照表……九一

布哇日本人銘鑑

曾川政男著

布哇事情梗概

第一編　總論

第一章　布哇の國土

第一節　布哇の名稱

太平洋の中央、北緯十八度五十四分より北緯二十二度十四分に亘り西經百五十四度四十八分より西經百六十度十三分に至る海面に分布する大小十二個の島嶼をハワイ群島となす、地理學上サンドウヰッチ群島と呼ばるるは西曆一千七百七十八年英國探險航海家ゼームス、クックが此群島を發見して時の英國海軍卿サンドウヰッチ伯の名を冠せしによる、しかも英人の勢力がハワイと沒交渉となりて此の命名は漸く權威を失ひ、北米合衆國が群島にミッドウエー島を加へて準自治州の一行政區域ハワイ縣となすに及んでハワイ群島は世界的公稱となりて世界地圖に明記せらるることになつた。傳說によ

ればハワイ、ロアなる者最初に此の群島に移住せるよりハワイの名稱起れりといふも、ハワイは土語にて水の鄕、又は江の島を意義し更に群島最大の島がハワイであり此島より群島を政治的に統一せる英雄カメハメハの出現せるためにハワイと呼ぶに至れるものならんか、日本人はハワイを記すに『布哇』の字を以てし支那人は『檀山』の字を以てする、『檀山』とは曾て布哇が白檀、紫檀、鐵刀木等の名木を產し歐米人、支那人等がこれらの木材を盛んに本國に輸出せるに基く。布哇はこのほか太平洋の眞珠、太平洋の樂園と綽名さる、蓋し熱帶圏にありながら貿易風に惠まれて氣候は和順、寒暑の差甚しからず空は澄みて碧く海は深ふして紺色を湛え、綠蔭濃くして四時百花妍を競ふ常春の天地なるが故である、群島中オアフ島に眞珠灣軍港あり米國海軍の對東洋策源地なるを以て太平洋のマルタとも別稱せらる。

第二節　布哇の面積

ハワイ群島はハワイ、アウイ、モロカイ、ラナイ、オアフ、カワイ、ニイハウ、カホオラウエ、ミツドウエーの九島とモロキニ、レフア、カウラ、ニホアの四無人島より成る、總面積は六千四百五十四平方哩にして日本の四國の七千平方哩よりやや小さく千島群島三十一島の六千平方哩よりやや大である、ミツドウエー島は遙かに遠く西方に隔離しをるも他の十二島は比隣をなして東南より斜めて北西に延びて散布す、各島とも中央に山脈を控へ北東部は急勾配を以て海に接して斷崖絶壁に富み西南部は傾斜緩かに海に連りて沃野を展開するを特色とする、各島とも狹小なる割合に火山脈縱横に走るが故に谿谷多くして平野と雖も悉く傾斜地ならぬはない、各島の面積を示せば左の如し。

島名	平方哩	英町面積	海岸線哩
ハワイ	四、〇一五・〇	二、五七〇、〇〇〇	二九七
オアフ	五九八・〇	三八二、七二〇	一七七
マウイ	七二八・一	四六六、〇〇〇	一四六
カワイ	五四六・九	三五〇、〇〇〇	一〇六
モロカイ	二六〇・九	一六七、〇〇〇	一〇〇
ラナイ	一三九・五	八九、三〇五	五三
ニイハウ	七二・八	四六、五七五	四八
カホオラウエ	四四・二	二八、二六〇	三〇
計	六、四〇六・〇	四、〇九九、八六〇	九五七

第三節　布哇の地質

布哇群島はもと太平洋に横はれる大陸なりしが噴火其他の作用により大部分は陷沒して僅かに片影を留めて此の群島をなせるものと主張する者あるも、學者の多くは太平洋を横斷する火山脈の噴火作用により海底より突起成立せるものなりとの說を肯定し科學的に有力な根據を提示してをる、各島の山嶽は悉く噴火口を有し地層は火山岩よりなりて岩石や土砂玄武溶岩の變形したるもの、此の火山岩が雨水風の腐蝕作用によりて崩壞、土壤化して沃土となり植物の生茂を促したのである、しかも群島が幾百萬年前に現出したかは學者間にも定說がない、唯だ群島中カワイ島が最も古くオアフ、マウイこれに亞ぎハワイ島が最も新らしとの說は火山岩に水分を吸集されて各島とも河川らしきものなきに拘はらずカワイ島に數流の河川あること、同島の風化作用が最も能く行はれて山岳の山骨秀でて露はなる代り平地は土壤深く樹木欝蒼たること、及び新しきハワイ島が生生しき溶岩を以て地層の大部分を蔽はれキラウエア、マウナロアの二大活火山を有する事實に徵するも成程と肯かれる。

第四節　布哇の氣候

布哇群島は熱帶圏にありて炎暑燬くが如くに思惟さるるも事實は然らず洋島として穩和なる貿易風の裡にあるが故に氣候溫暖にして冷熱の差甚しからず普通平地にありては最高溫度も九十度を越えず最低溫度は五十八度を下らず一年の大部分は七十度乃至八十度の間にありて平均溫度は七十二三度七十四五度内外、まさに寒さ暑さなしの樂土である、群島は五風十雨均齊して別に雨季なきも強て晴雨季を區別すれば十月より三月までを雨季とし四月より九月までを晴天季となすべきであらう、雨季六ヶ月間の降雨量は一ヶ年雨量の七割に相當する、しかも布哇の降雨は驟雨一過式で數時間と降續くことを稀れで日本の如く連日霖雨に惱まさるる如きことはない、一年三百六十五日の大半は晴朗拭ふが如き天氣で、加ふるに風穩かにして颶風、暴風は減多になく風害は殆んどなしといふも過言でない。

第五節　布哇の生物

布哇群島は熱帶地とはいへ地質の關係から他の熱帶地に比して動植物の種屬は割合に少なく繁茂せる植物、棲息する動物の幾んど全部は他から輸入移植されたものである、一千七百七十八年キャプテン、クックが布哇を訪問せる當時既に犬鼠、蝙蝠、白鳥、豚等の生息し椰子、バナナ、オヒア、甘蔗の茂生せるを見たりといへば是等は大古先住人種たるポリネシア人が太平洋を漂遊して布哇に移住せる際、及びクックの布哇發見以前布哇に漂着せる者、又は布哇に寄港せる西班牙航海家等によりて移入されたものであらう、布哇に棲息する動物は鼠、犬、豚、牛、馬、羊、野羊、鹿、猫、モングース等、鳥類にありては鷄、家鴨、鴨、鳩、雉子、雀、七面鳥、孔雀、雲雀、鷹、燕鷸、千鳥、信天翁、蒼鷺、鴟鴞、山鶉、鷗、其他九官鳥、鶯屬の愛玩用禽類で、爬蟲類では石龍子、守宮、龜、蛙、昆蟲類では蜘蛛、蠅、蟻、蚤、蚊、蝶、蟲蠹南京蟲、蜂、蜈蚣、蝎、毛蟲、蝸牛、黄蟲等で人住地に有する種類の一通を揃へてをるが其大部分は他から輸入されたものである、蚊は偶然ながら移入の機會なかりしと見へ官憲の嚴重なる防止其効を奏して布哇の山野に一匹の長蟲を見ざるは愉快である、布哇が熱帶地に拘はらず比較的毒蟲害獸の少きは如上の理由による、但し近年地中害蠅等傳播せるを以てこれが撲滅のため種々の益蟲が人爲的に輸入されてをる、動物の輸入年代にして判明せる分を下に掲げる。

西暦一七八六　英國人土人酋長に牛馬を獻じた。
同　一七九二　米大陸より飼養增殖の目的の下に牛、羊、豚の輸入を見る。
同　一八〇三　米大陸より馬匹を輸入す。
同　一八一五　七面鳥輸入さる。
同　一八二六　汽船ウエリントン號墨國より蚊を傳播す。
同　一八三五　支那人養蠶の目的を以て支那本國より蠶を齎らせるも失敗に終る。
同　一八五六　瓜哇より雀を輸入す。
同　一八五七　日本より鹿を輸入して野に放つ、現にモロカイ島に最も繁殖す。
同　一八六〇　米大陸より見世物として象を輸入す、土人驚く。
同　一八六二　米大陸より駱駝を觀賞用として輸入す。
同　一八六五　支那より雲雀を輸入す。
同　一八六九　日本より雉子八羽四番を輸入す。
同　一八八三　野鼠退治のためモングース十六對を輸入す。

布哇群島の植物は羊齒科、蔓科、荳科が多く羊齒の如きは原生と覺しく山野に密生してをる、樹木では針葉屬より濶葉屬が多い、昔は檀木に富みたるも貿易品として濫伐せるため今では殆んど一木を止めない、喬木としてコア、ククイ、オヒア等は可なり古くからあり、コアは裝飾的器具の材料として重用されククイは其果實より土人が燈火用の燃油を製出した、荳科植物は近代の移植に係るもとりどりの花を咲せてハイビスカスと共に布哇の自然を飾るに有力の作用をなす、ボンシアナ、ピンクシャワーなど其尤なるものである、アロガロヴア（キャベ）は磽角なる沙地、岩地を好み布哇到る處に繁

茂する、岩砂の腐蝕作用を進め豆は牛馬の飼料となり材は薪炭として用ゐらる、實用的樹木の第一に推すべきである、グアバは灌木ながら能く荒蕪地に茂りて果實はジャリーを製すべく材は薪炭に供すべく有用の植物である。ユーカリ樹、オレゴン松は防風林用として近代の移植にかかるが風土に適して到る處に繁茂してをる、果樹としてはオヒア、ヴイ、ブレードフルーツ、マンゴ、アリゲートペアありココナツト、バナナ鳳梨、パパイア等と共に熱帶地特有の珍味とする、甘蔗、珈琲は鳳梨と並んで布哇の主要産物である、仙人掌は厄介物なれど外來者の眼には珍らしく映る、布哇は地味肥沃の處女地なるが故に各種の蔬菜、草花の栽培に適し青々たる野菜畑、彩とりどりの花園を隨所に見る、喬木空を蔽ひ灌木地を埋め花卉其間を彩り四時翠綠滴らんばかりの布哇の植物界は厚き天惠のもとに哺まれてをる、マウイ島ハレアカラ山の舊噴火口に生ずる銀劍草（シルヴア、ソールド、グラス）はアルプス山の雪草（スノー、グラス）と並稱さるる世界的珍草である、左に植物の輸入年譜を掲げる。

西暦一八一七　西班牙人珈琲樹をカワイ島に移植す、其後オアフ、マウイ兩島に珈琲園起されたるも失敗に終りハワイ島コナ地方に栽培されて有望の産業となる。

同　一八二四　比律賓よりマンゴ樹を移植す、各島に繁殖して今は布哇の代表的果物の一に數へらる。

同　一八三七　南米よりアロガロヴア（キャベ）を移植す、防風、日遮、水源用、薪炭用として栽培、七十年間に布哇各島、各地の海岸に繁茂して人類の生活に多大の貢献をなす、アロガロヴアは海岸岩砂地によく生育す。

同　一八三九　米大陸より露國種桑樹を移植す。

同　一八五〇　布哇に初めて煙草の栽培試みらる。

同　一八五一　濠洲よりグワヴアを移植す、各島に普及して火山岩地に繁りて果を結ぶ。

同　一八五六　棉苗を布哇に植ゆ。

同　一八五七　米大陸南カロライナ州より米種子輸入播種す、其後支那種、日本種の輸入を見る。

同　一八八四　鳳梨苗輸入栽培、短年月の間に數種の改良種を作られ布哇主要産物の一となる。

同　一八九三　サイザル苗移殖、フロリダ州より、布哇の地に適すれども栽培盛んならず。

同　一八九五　護謨樹輸入栽培、マウイ島カヘレクに護謨園經營されたるも失敗に終る。

近年柑橘類の栽培さるゝあり日本の枇杷、九年母等の果樹も十數年前より移植された。布哇群島は河沼に乏しく從つて淡水魚は貧弱にして纔かに鯉、鮒、鰌、鱒、ゴリ等を擧げ得るのみである、鰻、鮎の移殖も試みられたが失敗に終りたるも、四面環海の洋島なるが故に鹽水魚類は頗る豐富で種屬も多い、鰹、鮪、鰤、鰈、鰺、鯛、海鰻、ウルア、蝦、章魚等を首め有甲魚屬に富み漁業も盛んである、近海沿岸には千態萬樣の色彩珍に形狀奇なる小魚を産しワイキキ水族は布哇名物の一となつてをる、昔は鯨群の來往盛んに捕鯨地として知られたるも今は然らず、オアフ、マウイ近海に時に游弋するを瞥見するのみ、鱶鰭は多く布哇土人は神として崇拜した傳説あるほどである、捕鱶業は産業的價値あり、曾て日米人共同にて試みたるも失敗した、これは資本、設備に缺點あり加ふるに經營宜しきを得ざりしによる、布哇沿岸は岩礁多く泥沙地少きを以て貝殼類の生息多からず唯だ固有の鮑と十數年前日本より移植せるアサリ貝あるのみである、これに反し蟹、鰕は多く殊に伊勢蝦の産地としては世界有數である。

第六節　各地との距離

布哇群島は太平洋の中央に位し東西交通の中心交叉點に當るよりホノルルは太平洋十字街の要港として知らる、オアフ島にあるホノルル港より各國港灣への距離は左の通りである、巴奈馬運河の開通はホノルルの通商的價値を倍加した。

（備考　×印は航海距離を指す）

ホノルルより　　米大陸桑港へ　　× 二、一〇〇哩

同	同大陸サンディゴへ	×二、二八〇
同	同ポートランドへ	×二、三七〇
同	中米ニカラガ、ブリトへ	×四、二〇〇
同	同　巴奈馬へ	四、六六五
同	新西蘭ウエリントンへ	×四、一四八
同	同　オークランドへ	三、八一〇
同	アラスカ、シトカへ	×二、三九五
同	同　ノームへ	×二、七五二
同	加奈陀ヴイクトリアへ	二、四六〇
同	マゼラン海峡へ	六、三七九
同	濠洲シドニーへ	四、五九四
同	支那香港へ	×四、九六二
同	秘露カールヤーオーへ	×五、一四七
同	智利ヴアルバライソへ	×五、九一六
同	日本横濱へ	×三、四四五
同	グアム島へ	×三、三三七
同	馬尼拉へ	×四、八四二
同	サモア島へ	×二、二四〇
同	タヒチへ	二、四四〇

同	フイジーへ	二、七〇〇
同	ミツドウエーへ	一、二〇〇

布哇は西經百五十七度三十分の地點に於ける時間を以て全島の標準時とする、故にグリンイツチの世界標準時より十時間三十分遲る。即ち布哇の午後一時三十分はグリンイツチの午前零時零分に當る。

第七節　布哇の高地

布哇群島は各島何れも面積狹く山脈縱横に馳驅するが故に坦々たる平野と稱すべきものなきも緩傾斜の高原に富み山岳丘陵が多い、ハワイ島には富士山を凌ぐ高山二座ありマウイにも一萬呎の高峰かある、各島の主なる山岳高原の標高を示せば左の通りである。

オアフ島	海拔呎
テレグラフ、ヒル（別名カイムキ一帶）	二九一
ボンチボール、ヒル（別名ブオワイナ）	四九八
ココヘツド（下の噴火口まで）	六四四
モカブウ噴火口	六八五
マカブウポイント	六六五
ダイヤモンド、ヘツド（別名レアヒ）	七六一
ラウンド、トツプ（別名ウオラカア）	一、〇四九
オロマナ（カイルア附近）	一、六四五
ココヘツド（上の噴火口まで）	一、二〇五

布哇日本人銘鑑

ヌアヌパリ頂上	一、二一四
ワヒアワ高原	二、〇〇〇
タンタラス（別名ブウ、オヒア）	二、〇一三
オフレフレ（マカブウ附近）	二、二六三
コーラウ山脈（ワヒアワの頂上）	二、三八七
オリンパス（別名アワワロア）	二、四四七
ラニフリ（ヌアヌパリの北峰）	二、七八一
コナフアヌイ（ヌアヌパリの南峰）	三、一〇五
カアラ（ワイアナエ山脈中）	四、〇三〇
ハワイ島	
マウナ、ケア	一三、八二五
マウナ、ロア	一三、六二五
フアアララライ	八、二七五
コハラ山彙（頂上）	五、五〇五
キラウエア（ヴアルケノ、ハウス）	三、九七一
ワイメア、コートハウス	二、六六九
ワイピオ、パリー（頂上）	三、〇〇〇
ワイアウ、レーク（マウナケア）	一三、〇四一
マウイ島	
ハレアカラ（レッド、ヒル）	一〇、〇三二
ピイホロ（マカワオ）	二、二五六
エケ噴火口	五、七八八
ブウ、ククイ	四、五〇〇
ウル、パラクア	一、八〇〇
オリンダ	四、〇四三
カウイキ、ヘッド（ハナ）	三九二
サニイサイド（マカワオ）	九三〇
カワイ島	
ワイアレアレ	五、二五〇
ハナペペ、フオールス	二五〇
ブウカペハ（キヤンノン、ヴウ）	三、六〇〇
ハウブ（ソフエ）	二、〇三〇
ナモロカマ（ハナレイ）	四、一〇〇
マカナ（一名花火岩ハエナ）	一、五〇〇

第二章　各島誌

第一節　ホノルル市

ホノルルはオアフ島南方海岸の一江灣に臨める都市にして布哇縣の首府である、縣廳、裁判所、合衆國官廳、オアフ市郡役所、警察署、各國領事館等の官衙と布哇大學、師範學校、ハイスクール等の學校の所在地で市街は分水嶺を背後に控へ細く長く東南より西北に延び地勢神戸に似る、人口十二萬、各國人種を網羅してコスモポリタン鄕を實現し市街清潔にして建物の典雅なると綠樹の茂れると相俟ちて特色ある太平洋中唯一の英語都市として知らる、太平洋航路の交叉焦點に當るが故に米大陸、東洋、濠洲、南米より寄港船舶絶えず船客の往來盛んにして布哇の物資集散地たるのみならず、政治的、經濟的、文化的中心地なるが故に糖業、鳳梨業等の關係會社、各種工場のあるありて繁華を極む、道路整頓、交通機關として市街電車あり、オアフ島を半周するオアフ鐵道の起點あり一萬五千を算する自動車の縱橫に馳驅するありて遺憾なく東端ダイヤモンドヘツド山麓にカピオラニ公園あり水族館と動物園、ボログラウンド、競馬場、海水浴場、音樂堂を擁して市民や觀光旅客の曳杖を促し、西端カリヒにビショツプ博物館あり、市街中央に圖書館とクック美術館あり、十の大小劇場は市民の娛樂機關に供せられ、基督敎、佛敎の寺院は獨特と樣式と色彩を以て對立して敎化の盛んなるを示し郊外モアナルア、海濱ワイキキには陸軍兵營と要塞あり、勝地としてヌアヌバリの古戰場、ワイキキ海濱の白砂長汀あり、數ヶ所の公園、ゴルフリンク、ベースボールグラウンドありて上水下水道の設備も完全して文明都市として一切の機關と內容を具備してをる、日本人にしてホノルルに在住する者三萬、兩日本語新聞ありて兩英字新聞と共に布哇言論界を左右してをる。

第二節　オアフ島

オアフ島はカワイ島とモロカイ島の中間に位する島にして面積五百九十八平方哩あり、首府ホノルルを有す、人口はホノルルを別にして六萬四千あり、江灣と天產に富むこと布哇群島中の尤である、コーラウ山脈脊梁となりて東北に長く延びワヒアワ高原を隔ててワイアナエ山彙西方に割據してをる、コーラウ山脈を境とし北海岸は平地少く且つ狹きも南西海岸は沃野多く鳳梨、甘蔗の栽培盛んである、西南海に沿ふてアイエア、ワイパフ、エワ、ワイアナエの甘蔗耕地あり、西北海岸にワイアルア、カフクの製糖會社があり、中央部高原ワヒアワは鳳梨產地を以て知られ一望數萬頃見渡す限り鳳梨畑である、北海岸には甘蔗耕地として唯だワイマナロあるのみ、しかもカイルア、ヘイア、カネオヘ、カハナ等は小農家多く盛んに蔬菜を耕作してをる、オアフ鐵道は眞珠灣を迂回してエワに出でワイアナエを經てワイアルアに出でカフクに達す、眞珠灣には巨資を投じて建設されたる軍港あり米國海軍太平洋の策源地として國防上重要の地位を占む、ワイアルアにハレイワ海濱あり海水浴場として名あり、ハレイワホテルは田舍に珍らしき設備整へる旅館である、カフクには布哇最初のマルコニー無線電信局あり、附近のライエにはモルモン宗の開拓地と伽藍が異彩を放ちてオアフの一名物となる、ワヒアワ高源の一隅に米國陸軍軍營スコツフイルドあり、布哇駐屯陸軍の本營である。

第三節　マウイ島

マウイ島はオアフ島の東南モロカイ、ラナイを挾みて橫はり東隣にハワイ島を控ふ、面積七百二十八平方哩にして地形は瓢箪を橫にしたるに似て狹き地峽を堺とし地方的に東西を區劃す、人口四萬五千ある、東半部の中央に海拔一萬呎の死火山ハレアカラあり、裾は緩かに西北に伸びて馬哇の中部大平原をなしワイルク、ブウネネ、パイアの製糖會社甘蔗耕地となり、北に降りてはマカワオ、ハイク、パウエラの高原となり鳳梨產地となる、地味膏腴馬哇太平原の如きは布哇群島

中他に西倚を求め難い、東端ハナは地域小なれど山水の美を以て誇り一小甘蔗耕地を有す、ハレアカラの南山腹にクラあり蔬菜栽培地として又たクラ療養院の所在地として知らる、ワイルクは馬哇の首都にして官衙學校あり市街として大ならざれども美しき谷の町である、四哩東に下りてカフルイ港あり馬哇一の良港で物貨の集散地、商業も盛んである、馬哇鐵道はワイルクを起點としてカフルイを經てプウネネ、パイア、ハマクアポコの甘蔗耕地を貫きてハイクの鳳梨産地に通ずる、ワイルクより地峽を南に横斷しマラウエア灣を迂回すればラハイナに出づ、ラハイナは西部マウイの中心地にしてホノルルに近接せる良港で旅客の大部分を呑吐する、ラハイナとカアナバリに甘蔗耕地あり、西端ホノルアは鳳梨を産出する、ラハイナはラナイに直面し左右にモロカイとカホオラウエ兩島を望み風光觀るべきものあり、王朝時代は馬哇の首都として歴史と傳説に富む、ラハイナロルナ、ハイスクールありて苦學生の樂園たり、附近にエケ舊噴火口ありハレアカラと共に世界的珍草銀劍草を産す、ハレアカラは死火山なれども噴火口の廣大なる世界一の稱あり、頂上の展望雄大絶佳にして山岳家憧憬の的となる。

第四節　カワイ島

カワイ島は布哇群島の左端にありて最も日本に近し、日本より來る者船上最初に望見するは此の島である、面積五百四十七平方哩、人口三萬五千あり、面積小なれども山水の美に富むを以て花園島の別稱がある、地形は圓にして中央に峻嶺ワイアレアレあり、嶺は數分して南方に展いてケカハ、マカウエリ、コロアの平原をなし饒土はよく甘蔗と鳳梨を産す、東方海に接してリフエ、カパア、ケアリアとなり、地は勾配やや急なれどもキラウエア、ハナレイとなりて甘蔗耕地、鳳梨耕地を生ず、ハナレイは米の産地として布哇第一の稱がある、地層は火山岩ながら風化作用行はれて土壌深く平地は農耕に適し高地は森林ありて水源をなし河川を作る、島内アフキニ、ナウエリウエリ、エレエレ、ワイメア、カリヒワイの諸港あれど中央玄關といふべきはアフキニ港である、アフキニより上陸すればリフエあり、カワイの首府にして官衙學校あり、海岸を北上すればハナマウル、ワイルア河を渡つてカパア、ケアリアあり、アナホラ、キラウエアを經てハナレイに達す、附近ワイニハにハエナの洞窟あり名所の一に數へらる、リフエより南してコロアに至ればククイウラの海岸に潮吹の奇觀あり、ラワイに布哇第一の私設公園マクブライド公園を一見して西すればハナペペ、マカウエリ、ワイメア、ケカハを通過して左端マナに至れば名所鳴砂丘あり、ケカハより十數哩北方山懷に入ればコーキー大谿谷ありて豪宕雄大の結構は米大陸グランド、キヤンノンに亞ぐ絶勝として有名である、マカウエリの北方山中オロケロの谿谷は懸崖幾千仞、數哩に亘りて對峙しコーキーに劣らざる勝地として知らる、マナよりワイニハに至る西方海岸は絶壁相連りて人馬の交通を許さない、しかも東方坦に砥の如き道路を自動車を驅ればマナよりワイニハまで八十哩の距離を沿道各地を歴訪しながら數時間で一周することが出來る。

第五節　ハワイ島

ハワイ島は群島中最南端に位し面積四千十五平方哩あり、ヒロを除いて人口六萬四千、群島總面の六割强を占む、島内一萬三千呎の高峰マウナケアとマウナロアの二坐あり、マウナロア山は活火山にして近年數回の大噴口をなし同系山彙に世界屈指の活火山キラウエアを有す、二峰の裾野は四方に延びて海に連り緩傾斜の平野展開し自ら地域を六分する、即ちマウナケアの北にコハラ地方ありハマクア地方あり東にヒロ地方あり、マウナロアの西にコナ地方あり、南してカウ地方となり東してプナ地方となる。ヒロ、ハマクア地方は概して雨多く風化作用よく行はれて土壌深くハワイ島二十五甘蔗耕地の大部分は此の地方にある、しかも同島は地層新しく火山溶岩に蔽はれをるを以て面積に比して農耕地は非常に少なく殊にオアフ、マウイ、カワイの諸島が鳳梨を産出するに拘はらずハワイにありては僅かにコハラに小規模の鳳梨栽培地を有するに過ぎず、天産裕かなりといふことが出來ない、しかしコナ地方は珈琲産地としてコハラ地方は牧場地として他島に類のない物産を提供してをる、東海岸にあるヒロは全島の中心地にして人口一萬二千ホノルルに次ぐ都會で米大陸、東

洋よりの汽船往來盛んなる良港でハワイ島の重なる官衙學校は皆な此地にある、ヒロより海岸に沿ふて北上すればパパイコウ、ホノムホノヒナ、パパアロア、オーカラ、ハマクア、パウイロ、ホノカア等二十餘の村邑あり到る處製糖會社を見る、ホノカアより北西に方りワイメア高原を隔ててコハラあり、此邊一帶茫々たる大廣原にして牧畜盛んに且つ蔬菜栽培の農家が多い、ワイメアのカムエラより數十哩西南に向つて下ればコナの海岸に出づ、コハラ、コナ地方は强健なるカナカ種族の住地にして布哇王朝建設の英雄カメハメハ一世はコハラの出である、コナは歴史、傳說に富みキャプテン、クックの記念碑はコナ、ケアラケクアの海岸にある、珈琲の花薫る南北コナ十餘の村邑を縱貫して南下一路マウナロア山新噴火溶岩流出の跡を突破すればカウに出でナアレフ、パハラの諸邑あり、パハラより東北に向ひキラウエア火山を越え、プナの村邑を遙かに東に望んで進めばマウンテンビュウ、カーチスタウン、オーラーを經てヒロに還る、ハワイ島には前記の道程を辿る一周道路あれど貨客は多く海上路によるを便とする、鐵道はヒロを起點とし北パアウイロまでを本線とし西オーラー九哩まで、南パホアまでの二支線あり、キラウエア火山はヒロより三十哩の距離にあり國立公園として合衆國政府の直轄に屬す、近年鎭靜狀態にあり活動をマウナロアに讓りたるかの觀あれど其雄大美は觀光客を吸引して飽かすことなし、ハワイ島は農耕地に乏きもキラウエア、マウナロアの兩火山を首めとしコナ山腹の眺望、オノメアの洞門、ヒロの虹の瀧其他自然の勝景に富み曳杖の場所が多い。

第六節　其他の島嶼

モロカイ島はオアフとマウイの中間に介在し地形海鼠を横へたるが如く面積二百六十一平方哩あれど島の西半部は人煙なき不毛地で人口は到つて少ない、東南半部は肥沃の原野であるが農耕地として未だ充分に開拓されない、曾て甘蔗耕地ありしも今は蔬菜栽培を主とし最近大規模の鳳梨畑が開墾されんとしてをる、モロカイ島の東海岸にハラワ、ブーコー、カウナカカイの村邑あり、ブーコーに裁判所學校あり、カウナカカイは同島唯一の良港である、カウナカカイを距る十五哩反對の北海岸にカラウパパあり、療癩院あるを以て知らる。ラナイ島はモロカイ、マウイ、カホオラウエの三島に圍まれた百三十九平方哩の小島ながら沃野多く近年布哇鳳梨會社が全島を鳳梨栽培地化しつつありラナイシチーは會社經營の唯一の市街にして道路其他の設備完全して理想的文化農園地たらんとしてをる。ニイハウ島は面積九十七平方哩、カワイ島の西方十五哩の處にあり少許の農耕地あるも大部分は牧場に利用せらる。カホオラウエ島はマウイの南方にありて面積四十四平方哩、全島礁角不毛の地にして一隅に小牧場あり數人の牧丁が住むに過ぎない。

第三章　布哇の社會

第一節　布哇の人種

世界に於て恐らく布哇ほど雜多の人種を陝隘の天地に包含してをる土地はあるまい、原住人はポリネシアンのカナカ族である、柔順で樂天的なカナカは過去幾百千年、水入らずの簡素で呑氣な原始的生活を營み武陵桃源の夢を結んでゐたが泰西人勢力の西漸は遂に此の樂園を烈しい生存競爭の渦中に投入んだ、歐米探險航海家の來訪、捕鯨船の寄港、米國傳道師の來住は驚て泰西文明の萠芽となり産業の開發は經濟生活の一變となり體格尨大なれど精力弱く懶惰の風に狎れて時間制度の勤勞を厭ふカナカは近代的産業の勞働者たるに適しない、加ふるに人口の減少は結局外國より勞働者を求めて需要を充すの已むなきに至つた、一千八百五十一年に百八十人の支那人勞働者が輸入され、一千八百六十八年カナカと同種族なる少數のポリネシア人が南洋諸島から輸入された、一千八百六十八年（明治元年）百五十三人の日本人が試驗的に迎へられ、一千八百七十年米大陸から少數白人の來住するあり、一千八百七十八年アゾールス、マディラ兩島より數百の葡萄牙人が輸入された、一千八百八十年少許の諸威人を其後ポートリコ人、西班牙人、露西亞人が相踵いで輸入された、勞働者輸入に當りて政府は社會的同化政策と産業利益の板狹みとなり幾度か喜劇的矛盾撞着を演じたが産業の力は壓倒的であ

る、産業を開發するためにはポリネシアン、白人系移民を斥けて能率優秀なる支那人、日本人等東洋移民に依頼せざるべからざるに至つた、支那人の次には日本人を輸入して明治四十一年（一千九百八年）日本移民入國の途塞がるや比島人を輸入して布哇の經濟的生命たる糖業、鳳梨業を支持することになつた。布哇が雜多な人種を網羅せるは以上の事情に基く、アングロサクソン、チユトン、スラヴ、ラテン各人種、日本人、支那人、朝鮮人等の東洋人、馬來人、印度人、に原住のポリネシア人、及びそれら人種の混血人、猫額大の布哇に居住する人種を細別すれば數十種に分つべく人類學者に取りては無比の研究資料室である、布哇を國民の溶鑛爐（メルチング、ポット、オブ、ゼ、ネーション）となし世界的社會（コスモポリタン、コムミユニテイ）と呼ぶは寔に所以ありとする、各人種を一括して作られた布哇の社會は複雜な色彩に富み興味ある多くの謎を有つ。

第二節　布哇の人口

信憑するに足る調査によれば一千八百三十二年より一千九百二十六年に至る歷年人口の消長は左の通りである。

年度	人口	年度	人口
一八三二	一三〇、三一三	一八七八	五七、九八五
一八三六	一〇八、五七九	一八八四	八〇、五七五
一八五〇	八四、一六五	一八九〇	八九、九九〇
一八五三	七三、一三八	一八九六	一〇九、〇二〇
一八六〇	六九、八〇〇	一九〇〇	一五四、〇〇一
一八六六	六二、九五九	一九一〇	一九一、九〇九
一八七二	五六、八九七	一九二〇	二五五、九一二
一九二四	三一五、三七二	一九二六	三二八、四四四
一九二五	三二三、六四五		

である、布哇人口は一世紀前カメハメハ王朝初期にはカナカのみにて二十萬と數へられたが歐米人の入國と共にカナカ人口は急激に減少し一千八百三十二年には十三萬となり一千八百七十八年には五萬七千に落ちた、カナカは雜婚衰亡により逐年數を減じ一千九百二十六年には二萬一千となりたるも各國移民の入國により總人口は一千八百八十年以來增加一方にて一千九百二十六年には三十二萬八千を算するに至つた、一千九百十年、一千九百二十年の合衆國政府の正確なる調査による布哇人口人種別を左に示す。

人種	一九一〇年度	一九二〇年度
布哇人（カナカ）	二六、〇四一	二三、七二三
亞細亞系布哇人	三、七三四	六、九五五
白人系布哇人	八、七七二	一一、〇七二
葡萄牙人	二二、三〇一	二七、〇〇二
ポートリコ人	四、八九〇	五、六〇二
西班牙人	一、九九〇	二、四三〇
英米獨露人	一四、八六七	一九、七〇八
支那人	二一、六七四	二三、五〇七
日本人	七九、六七五	一〇九、二七四
比律賓人	二、三六一	二一、〇三一
朝鮮人	四、五三三	四、九五〇

黑人	六九五	三四八	
雜	三七六	三一〇	
合計	一九一、九〇九	二五五、九一二	

又た布哇縣知事の精密なる推定による最近三年間の人口種別を掲ぐれば、

人種	一九二四年度	一九二五年度	一九二六年度
英米獨露人	三五、〇七六	三五、八八〇	三六、一三三
支那人	二四、六八八	二四、八五一	二五、一一一
比律賓人	四四、四七二	四九、三三五	五〇、一四五
布哇人	二一、二〇八	二一、一四五	二一、〇五四
日本人	一二六、七一八	一二八、〇六八	一二九、九〇一
朝鮮人	五、八八六	五、九五六	六、〇七八
亞系布哇人	八、〇八〇	八、三四五	八、八八一
白人系布哇人	一三、四八六	一三、八三七	一四、五五五
葡萄牙人	二七、一三〇	二七、四七〇	二七、八七〇
ポートリコ人	六、三六五	六、三八二	六、五〇四
西班牙人	一、九四二	一、九四六	一、七九一
雜	三二三	四三〇	四二一
合計	三一五、三七二	三二三、六四五	三二八、四四四

布哇人は漸減、混血人は漸增、各國人を通じて增加率の大なるは比律賓人を最とし日本人これに次ぐ、尤も比律賓人の增加は主として移民の入國に基き日本人は出入國者數は却つて出國超過を呈しながら出生によつて其差を埋め年々數千の增殖をなしつゝある、以上の統計により日本人が常に布哇總人口の四割を占めをることを知るべく更に一千九百二十五年度の調査による布哇人口の米國市民外國人別は下の如し。

人種	總人口	外國人	米國市民有權者
英米獨露人	三五、八八〇	三六〇	三五、五二〇
葡萄牙人	二七、四七〇	三、五五二	二三、九一八
ポートリコ人	六、三八二	—	六、三八二
西班牙人	一、九四六	七九九	一、一四七
支那人	二四、八五一	一一、七七六	一三、〇七五
比律賓人	四九、三三五	四四、五三五	四、八〇〇
布哇人	二一、一四五	—	二一、一四五
日本人	一二八、〇六八	七〇、八六〇	五七、二〇八
朝鮮人	五、九五六	三、〇四〇	二、九一六
白人系布哇人	一三、八三七	—	一三、八三七
亞系布哇人	八、三四五	—	八、三四五
雜	四三〇	二一〇	二二〇
合計	三二三、六四五	一二一、四八〇	二〇二、一六五

即ち總人口三十二萬三千六百四十五人の內譯は外國人二十二萬千四百八十人、米國市民有權者二十萬二千百六十五人となる、布哇人混血は土着人なるが故に必然的に米國市民であり、白人は出生歸化によつて市民となり日本人、支那人、朝

鮮人等の東洋人は布哇出生によつてのみ市民權を與へらる、比律賓人は米國領土の人民ながら東洋人同等に待遇せられ歸化を許されてゐない、尙ほ最近數年の各島人口別を示せば左の通りである。

島地	一九二四年度	一九二五年度	一九二六年度
ホノルル市	九九、二五〇	一〇一、五〇〇	一〇四、三〇〇
オアフ島	六一、九〇〇	六四、三〇〇	六五、〇〇〇
ヒロ町	一一、四九〇	一一、七五〇	一二、二〇〇
ハワイ島	六三、二七〇	六四、七四〇	六五、〇〇〇
ケワロー郡	五八五	五九〇	五八四
カワイ島	三四、五三四	三四、五三四	三五、三六〇
マウイ島	四四、三七二	四四、三七二	四六、〇〇〇
合計	三一五、三七二	三二三、六四五	三二八、四四四

第三節　出生死亡

一千九百二十五年六月三十日に終る一ケ年間の統計による布哇に於ける同期間の出生者を人種別に掲ぐれば下の通り。

人種	人口	出産數	千人に對する出産數
英米獨露人	三五、八八〇	四六〇	一三・一一
支那人	二四、八五〇	八三七	三三・九一
比律賓人	四九、三三五	一、八〇六	四〇・六一
布哇人	二一、一四五	五八八	二七・七三
日本人	一二八、〇六八	六、一八六	四八・八二
朝鮮人	五、九五六	二四三	四一・二八
亞系布哇人	八、三四五	六一二	七五・七四
白人系布哇人	一三、八三七	八八四	六五・五五
葡萄牙人	二七、四七〇	一、〇八六	四〇・〇三
ポートリコ人	六、三八二	三一五	四九・四九
西班牙人	一、九四六	七八	三八・六二
合計	三二三、六四五	一三、一〇九	四一・五七

出産率は亞細亞系布哇人の七分五厘七四を最高とし白人系布哇人の六分五厘五五を次位とする、布哇人の出産力貧弱なるに反し布哇人混血兒の增殖率大なるは注意に値す、日本人は四分八厘八二にて中位にある。又た同期間の死亡數を擧ぐれば、

人種	人口	死亡數	千人に對する死亡數
英米獨露人	三五、八八〇	二三四	六・六七
支那人	二四、八五一	二九二	一一・八三
比律賓人	四九、三三五	八三四	一八・七五
日本人	一二八、〇六八	一、一六八	九・二二
朝鮮人	五、九五六	八一	一三・七六
亞系布哇人	八、三四五	八三	一〇・二七
白人系布哇人	一三、八三七	一八一	一三・四二

葡萄牙人	二七、四七〇	二八三	一〇・四三
ポートリコ人	六、三八二	一〇七	一六・八一
西班牙人	一、九四六	一七	八・七五
雜	四三〇	二三	七一・二一
合計	三二三、六四五	四、〇一七	一二・七四

各人種の死亡率は出産率と反比例をなし死亡率の低きもの出産率高く出産率の低きもの、死亡率の高きは自然の數である。

第四節　布哇の政體

布哇の政治組織は北米合衆國の一縣（テリトリー）であつて州（ステーツ）の如く純自治を許されない、しかもポートリコ、比律賓などと些か趣きを異にし同じくテリトリーと雖も布哇のみはステーツに近く米國憲法、合衆國の法律は悉く此地に適用せられ布哇の市民は米大陸諸州の市民と同一の權利を享有し且つこれを行使してをる、布哇縣の立法部は二院制にして縣會は上院（議員十五名）、下院（議員三十名）より成り二年毎に知事によりて召集さる、上院議員は任期四年、二年毎に半數改選、下院議員は二年毎に改選せられる、縣會開會日數は九十日を規定とするが必要に基いて延長出來る、議員は縣内の市民これを選擧する、行政部は縣知事を長官として書記官を補佐役とする、檢事局、會計局、土木局、監獄、教育局、土地局、測量局、收稅局、衞生局、農林局、會計檢査局等を置き當該政事務を管理執掌せしめる、各局長は知事の任命にかかり縣會上院の批准を經たるもの、知事、書記官、縣高等裁判所判事は合衆國大統領によつて任命される、知事、書記官、縣高等裁判所判事の任期は四ヶ年である、縣行政區域は、

オアフ市郡　ホノルル、オアフ島地、ミツドウエーを含む

ハワイ郡　ハワハ島全部

カワイ郡　カワイ島、ニイハウ島を包括す

カラワオ郡　モロカイ島の一部

マウイ郡　マウイ島全部にラナイ島、カホオラウエ島及びモロカイ島の一部を含む

の四郡、一市郡に分たる、オアフ市郡は一市長、七參事會員、他の郡は七名乃至五名の參事會員を選擧して郡政を總攬せしむ、此他檢事、警察署長、書記、會計等あるも何れも選擧による。司法部は大審院、巡回裁判所、區裁判所より成り大審院は縣の最高法院にして其判事は巡回裁判所判事と同じく大統領の任命にかかる、區裁判所判事は知事これを任命す布哇縣は一名の代議士を公選して華盛頓の中央聯邦議會に送る、布哇縣代議士は發言權を有するも採決に加はることを許されない。以上の外に布哇には合衆國地方裁判所、合衆國收稅局、稅關、郵便局、禁酒勵行部等の官衙あり布哇縣法律に超越せる合衆國法律の適用、並に事務に當る、合衆國官廳官吏の任免は華盛頓政府の掌中にある。

第五節　布哇の教育

布哇は公費によつて完全に近い、義務教育を行ひ程度の如何に拘はらず公立學校にありては一弗たりとも授業料を徴收しない、公立學校は小學程度のもの百七十餘校あり更に各島に一ヶ所のハイスクール、數ヶ所のジユニア、ハイスクールを設く、小學校よりハイスクールを通じて十四學年に分ちて授業を統一してをる、此他ホノルルに師範學校、盲唖學校、感化院等の特殊學校を置き、縣内の最高學府として布哇大學を設け大陸の綜合大學に比して遜色なからしむ、公立學校の收容せる生徒は約六萬あり一切の經費は縣金庫より支出される、公立學校の外に英語を以て授業する私立學校、私立幼稚園六十餘あり、外國語を以てする私立學校百數十あり、公立學校の補助の體をなしてをる、一千九百二十五年六月現在の公立學校要目は左の如くである。

島別	校數	生徒數 男	生徒數 女	生徒數 合計	教師數 男	教師數 女	教師數 合計
ハワイ島	六四	六、七九七	六、一八〇	一二、九七七	七六	三四三	四二
マウイ島	四三	四、一〇八	三、七〇二	七、八一〇	三九	二一四	二五三
オアフ島	四八	一四、一六六	一三、九六四	二八、一三〇	七四	七二	八六
カワイ島	二〇	三、一八五	二、九四一	六、一二七	三	一八	二九
合計	一七五	二八、二五六	二六、七八八	五五、〇四四	二二二	一、四九七	一、七一九

更に縣内に於ける英語を用ゆる私立學校は校數六十五、生徒男五千百八十、女四千六百九十二合計九千八百七十二人、教師男百二十八、女三百三十三合計四百六十二人である。

私立學校は宗教的、人種別色彩を帶ぶるものが多い、公立學校生徒を人種別に示せば（千九百二十五年度調査）

人種	生徒數	人種	生徒數
布哇混血人	三、三七五	日本人	二八、三六三
英米獨露人	一、八一六	朝鮮人	一、〇三二
葡萄牙人	五、七〇四	比律賓人	一、九四五
ポートリコ人	一、〇四三	雜	五八二
西班牙人	三一五		
支那人	五、二七三	合計	五五、〇四四

公立學校生徒は各國人を網羅するも幾んで全部は布哇に出生せる米國市民有權者であつて五萬五千四十四人中外國人は一千四百九十人に過ぎない、布哇教育界の特色は皮膚の色を異にして文明の系統を別にする雜多の人種を包含し、公立學校がこれらを一括して米國市民教育を授けつつあること、日本人、支那人等の東洋人父兄が特殊自國語學校を私設して其子弟に固有の外國語を學ばしめつつあることである、現に日本人は各島に亘つて百三十四の日本語學校を經營し三百餘名の教師によつて約二萬五千の兒童を收容し、支那人、朝鮮人もホノルルに數個の自國語學校を設けてをる、私立外國語學校の目的は東洋人として本質的に必要なる實用的東洋語を授くるにあつて授業方法の如き公立學校放課後の一時的を利用し讀方書方綴方を教うるに過ぎない、公立學校に於ける米國市民教育と何等背馳する處なきも一種の二重教育には相違なくそこに種々の矛盾と誤解を生ずる、東洋人殊に日本人は米國人の日本語學校に對する惡感誤解を氷釋すべく心掛けをるも日本語學校の廢滅には絶對に反對してをる、彼の苛酷なる外國語學校取締法の制定、それに對する日本語學校の抗爭、試訴提起の如き避け難き必然の過程かも知れないがしかし雜多人種を包容せる公立學校當事者の尋常ならぬ苦心努力は大に同情せねばならぬ。

第六節　布哇の宗教

布哇人の原始的生活時代にありては自然物を對照として迷信的信仰を奉じカネ、カナロア、クウ、ロノの四神を偶像として禮拜した、一千八百十年四名の土人青年が捕鯨船員となつて米大陸本土に至り基督教文明に驚異の眼を瞠り米國傳道會社に布哇布教を希望したが其青年の中から布哇最初の宣教師ホプカイナを出した、米國傳道會社は土人青年の希望を容れてハイラム、ブリンガム。アーサー、サーストンの兩宣教師に醫師一名、學校教師二名、出版業者一名、農夫一名を加へ土人青年を隨員として布哇に派遣した、一行を乘せた帆船サジュース號は一千八百十九年十月ボストンを出帆し一千八百二十年三月布哇島コナ、カイルアに上陸した、カメハメハ二世王は快よく一行を迎へて布教傳道を許し且つ種々の便宜を與へた、爾來宣教師の來布する者頻々、基督教の感化と共に固有の迷信的邪教は其影を薄ふし頽廢せる風紀、飲酒の惡癖など漸次に改善せられ泰西文化の移入大に見るべきものがあつた、一千八百二十二年羅馬字を以て布哇語の聖書編纂に着手し一千八百三十年を以て完成し其年布哇人の五分の二は基督教に歸依するの盛況を呈した、米國傳道會社は一千八百

五十二年布哇傳道を自治的となし布哇教會の獨立自給を圖り一千八百六十二年布哇傳道會社の設立を見た、斯くして布哇は基督教新教徒の手によりて靈の世界を開拓されたのである。一千八百三十六年羅馬キヤソリツク教傳道師の渡來するあり其後モルモン宗布教に從事するものあり東洋より佛教、儒教の傳來するあり、布哇の宗教界は頓に殷賑を呈するに至つた、組合派、美以教派、クリスチヤン派、聖公會派、羅馬キヤソリツク派、ルーテル派等あり基督教各派はそれぞれ鞏固の地盤を有して各國人間に布教しつつあり、佛教、儒教の傳道は日本人、支那人間に限られたる觀がある、

第七節　布哇の軍備

北米合衆國國防の太平洋前哨地として布哇の軍備は華盛頓政府の最も重視する處である、近年歐洲大戰の突發、日米國際關係の緊張、太平洋問題の續出、これらの事象は布哇の國防的地位を倍す向上せしめた、合衆國陸軍管區は九個軍團と三個軍區に分たれ布哇は比律賓、巴奈馬と同じく布哇軍區として配備されてをる、軍區司令部はホノルル、シヤフター兵營に置かるるも軍營の大部分はワヒアワ高原スコツフィルドに設けらる、歩兵二個旅團(四個聯隊)、野砲兵一個旅團(二個聯隊)、工兵一個聯隊、航空二個大隊、鐵道隊、衞生隊を擁する外に布哇沿岸砲兵管區があり三個の重砲兵聯隊が要塞を守つてをる、軍營、要塞の所在地、名稱は左の如し。

名稱	所在地
シヤフター兵營	ホノルル市郊外モアナルア
アームストロング要塞	ホノルル港口、カカアコ
デラツセー要塞	ホノルル市郊外ワイキキ海濱
ルーガー要塞	ホノルル市郊外ダイヤモンドヘッド
スコツフィルド兵營	オアフ島ワヒアワ、レイレフア
ルークフィルド飛行場	眞珠灣內フォード島

布哇は合衆國海軍第十四軍區に屬して鎭守府が置かる、太平洋のマルタたらしむべく一千九百十二年以來一億數千萬弗の巨資を拋つて建設された眞珠灣軍港は米國海軍太平洋の策源地である、眞珠灣は天然の要港、米國全海軍を容るるに足り港內には一千萬弗を投じて築造する大船渠あり給油所、飛行場、病院の設備は勿論、二個の潛水艇隊と砲艦、驅逐艦、航空母艦、水雷母艦が碇泊してをる、當局は有名有實太平洋第一の軍港たらしむべく大計畫の下に種々の工程を進めてをる、布哇には合衆國軍隊の外に布哇國民軍の組織あり縣知事司令長官として全權を握りホノルルに一個聯隊、バワイ島に一個大隊、マウイ、カワイに各一個中隊を置く、合衆國國民軍條例に準じて普通市民より希望者を選んで生業の餘暇に訓練してをる、布哇が劍光幟影の巷となれるは十數年來のことにして今や軍人軍屬の數二萬に達し社交的にも經濟的にも軍人階級は布哇社會に重要の一分野を劃するに至つた。

第四章　布哇の產業

第一節　糖業

布哇の經濟的生命は農產業にあり、甘蔗糖、鳳梨、珈琲、米等を主要の產物とする、就中糖業、鳳梨業は布哇產業の骨であり血である、此の二者なくんば布哇の經濟的自立は不可能であらう。糖業は其歷史最も古くして布哇の文化と密接の關係を有する、布哇の存在が世界に認められ人煙稀薄なる無名の島嶼が太平洋の樂園と唄はるるに至れる寔にこれあるがためである、近年鳳梨業擡頭して產額はよく糖業に弟從し近き將來產業界を兩分する勢ひを示すと雖も、糖業の壘を摩することあるべしとは思へない、糖業は過去に於て然りしが如く將來に於ても亦た布哇產業の生命たるを失はないであらう。布哇の地が甘蔗に適し古くより生育せるはキヤプテン、クックの布哇訪問記に『長く伸びた甘蔗が茂つてをる』とあるに

徴するも明かである、但し何時の時代他から移植されたか不明である、大古ポリネシアンが南洋より移住の際齎らせるものと推測する外はない、甘蔗は斯く山野に野生してゐたが土人は製糖の方法を知らず唯だ嚙んで糖分を啜るに過ぎなかつた、一千八百二年ラナイ島で一支那人が碾磑一個、釜數個を以て製糖を始めた、これ布哇に於ける製糖の嚆矢である、一千八百十九年西班牙人マリンがホノルルでやや組織立つた製糖を試み一千八百二十三年伊太利人ラビニはマウイ島ワイカブでモラセス（糖蜜）の製造に着手した、其後マウイ島ワイルクで支那人が企業し一千八百二十五年ホノルル郊外マノアで百英町の甘蔗園が開拓されたが一回の收穫で廢耕した、要するにこれまでは甘蔗より砂糖を製し得るといふ試驗時代に過ぎず産業的價値は零に近かつた。

一千八百三十五年一月カワイ島コロアに於て米國ボストンのウイリアム、ラットなる者數人の共同者を伴ひ來りて小規模ながら近代的の製糖場を創設した、カワイ酋長の厚意で數十入の土人勞働者を得二月より開墾を始め數ヶ月にして二十五英町の甘蔗園と四十八ヶ所のタロ芋畑と五千本の珈琲樹と五千本のバナヽを植付け製糖場は水力を以て機械を運轉せしむるなど製糖會社らしきものが出來上つた、當時貨幣なく會社は通用小切手を發行して勞働者の便宜を圖つた、ラット等の創立したラット會社こそ布哇に於ける製糖會社の濫觴で今日六十萬噸乃至七十萬噸の産額を有する布哇糖業は斯くして呱々の聲を擧げたのである。

ラット會社は一時隆盛に向つたがラットがカメハメハ王朝の信任を得て政治に手を染めたると祝融の災とにより一千八百五十一年惜くも廢滅に歸した、しかもラット會社を導火線として數多の製糖會社は雨後の筍の如く勃興しラット會社の創立二年を經ざるに早くも二十ヶ所の製糖會社が起り一千八百三十七年四千封度の砂糖を商品として市場に供給するに至つた、當時の製糖機械は木製で動力は人間又は牛馬を用ゐる製糖方法は頗る幼稚なるものであつた、ラット會社の生れた一千八百三十五年と製品を市場に出した一千八百三十七年は布哇糖業史冒頭の一頁として永久に記念さるべき歳である。

布哇の糖業は爾來年を逐ふて順調の發展をなし一千八百五十年には四百噸の産出を見たが當業者が眼前の利に迷ひ粗製濫造の弊に陷りたる結果唯一市場たる米大陸に於ける聲價を失墜したので有志相寄り一千八百五十一年布哇國農會を組織し組合の力を以て糖業の刷新と發達を計ることになつた、同年マウイ島イースト、マウイ製糖會社は回轉式乾糖機を採用し一千八百五十八年マウイ島ハイク製糖會社は蒸汽力にて機關を運轉し、一千八百六十一年ハワイ島カウパクエ製糖場は糖汁煮沸に排氣罐裝置を用ふるなど製糖方法の進歩改良は自ら能率を增進し一千八百六十四年には五千噸の産額を示した、その頃米大陸糖業者の自衞運動効を奏して布哇糖は一封度三仙乃至四仙の輸入税を課せらるることとなり當業者は大打擊を蒙むり布哇糖業は一時悲境に沈淪したが生産費節約、能率增進により辛ふじて現狀を維持し得たのである、一千八百七十四年時の主權者カラカウアは産業開發に意を須ゐる必要なる勞働者を外國に求め又た親しく米國を訪問して華盛頓政府と最互惠條約を締結し布哇糖の米大陸輸入を無税たらしむるに成功したので停滯狀態にあつた糖業は頓に振興し二年内に新に製糖會社の生るるもの十三、一千八百九十年カラカウア王崩御の歳は米大陸への輸出額十三萬噸に達する盛況を呈したのである。

米大陸への輸入關税撤廢されてより布哇の糖業は目覺しき發達を遂げ一千八百八十三年布哇砂糖耕主組合は組織されて同業者の結束を固ふし組合の力を藉りて糖業の安全と發展を圖つた、一千八百九十八年米布合併成り獨立國の布哇は米國の一縣となりてより關税問題の杞憂一掃され投資、輸出、販賣に大なる便宜を得て逐に今日の盛大あらしむるに至つたのである、現在五十三ヶ所に製糖會社あり八千萬弗の資本と四萬人の勞働者を擁し二十四萬英町の甘蔗園を經營し年額六十萬噸乃至七十萬噸の九十六度糖を産出してゐる、統計によれば一千九百二十四年度は十一億一千五百四十二萬五千二百八十三封度價格七千七百四十萬九千九百七十八弗、一千九百二十五年度は十三億五千三百十二萬〇二百八十五封度價格七千百四十六萬八千百十五弗の砂糖を大陸に輸出してゐる、左に製糖會社及び産糖額一覽表を掲ぐる。

布哇製糖會社一覽表

（備考　産糖は九十六度粗糖一噸は二千封度）

名稱	所在地	代理店	資本金	一九二五年度産糖額噸
ホノルル耕地會社	アイエア	ブルワー商會	五、〇〇〇、〇〇〇圓	二三、九一五
オアフ製糖會社	ワイパフ	アメリカンファクター	六、〇〇〇、〇〇〇	六四、〇三〇
エワ耕地會社	エワ	キャツスル・クック	五、〇〇〇、〇〇〇	五〇、八二六
アボカ製糖會社	同	ダウセット	—	一、一三六
ワイアナエ耕地會社	ワイアナエ	キャツスル、クック	六〇〇、〇〇〇	六、八二〇
ワイアルア農業會社	ワイアルア	アレキサンダーボールドキン	四、五〇〇、〇〇〇	三二、五八五
カフク耕地會社	カフク	同	一、〇〇〇、〇〇〇	一一、二二〇
ライエ耕地會社	ライエ	同	—	一、八八六
コウラウ農業會社	コウラウ	ブルワー商會	—	—
ワイマナロ製糖會社	ワイマナロ	同	二五二、〇〇〇	八、一七八
（以上オアフ島所在）				
リフエ耕地會社	リフエ	アメリカンファクター	二、一〇〇、〇〇〇	二二、四三四
グローヴファム會社	ナベリベリ	同	—	四、七五五
コロア製糖會社	コロア	同	七五〇、〇〇〇	一一、一九九
マクブライト製糖會社	ワヒアワ	アレキサンダーボールドキン	三、九一九、四二一	一八、三六〇
布哇砂糖會社	マカウエリ	同	三、〇〇〇、〇〇〇	二四、八五六
ゲーロビンソン會社	マカウエリ	ワターハウス	—	三、八六一
ワイメア砂糖會社	ワイメア	アメリカンファクター	一二五、〇〇〇	二、九二四
ケカハ砂糖會社	ケカハ	同	一、五〇〇、〇〇〇	一九、五三五
キラウエア砂糖會社	キラウエア	ブルワー商會	一、〇〇〇、〇〇〇	六、二八〇
マキー砂糖會社	ケアリア	アメリカンファクター	—	一八、五九七
（以上カワイ島所在）				
バイオニア、ミル	ラハイナ	アメリカンファクター	四、〇〇〇、〇〇〇	三五、三九五
オロワル製糖會社	オロワル	ブルワー商會	一五〇、〇〇〇	二、〇六五
ワイルク砂糖會社	ワイルク	同	三、〇〇〇、〇〇〇	一七、八八一
馬哇農業會社	パイア	アレキサンダーボールドキン	二、二五〇、〇〇〇	四〇、七一一
馬哇商業砂糖會社	プウネネ	同	一〇、〇〇〇、〇〇〇	六七、七二六
カエレク耕地會社	ハナ	デヴィス商會	六〇〇、〇〇〇	六、〇二六
キパフル砂糖會社	キパフル	アメリカンファクター	一六〇、〇〇〇	—
（以上マウイ島所在）				
オーラー砂糖會社	オーラー	ビショップ	五、〇〇〇、〇〇〇	二三、九二一
ワイアケア、ミル	ヒロ	デヴィス商會	七五〇、〇〇〇	一〇、九三八
ヒロ製糖會社	ヒロ	ブルワー商會	五〇〇、〇〇〇	二三、一〇六
布哇ミル會社	ヒロ	同	二五〇、〇〇〇	—
カイヴイキ、ミル	オノメア	ブルワー商會	一、五〇〇、〇〇〇	七、六八八
オノメア製糖會社	オノメア	ブルワー商會	一、五〇〇、〇〇〇	二七、七七六
ペペケオ砂糖會社	ペペケオ	同	七五〇、〇〇〇	一四、二四一

ホノム砂糖會社	ホノムヴイス商會	七五〇、〇〇〇	九、二三一	
ハカラウ砂糖會社	ハカラウ同	一、〇〇〇、〇〇〇	一七、八六一	
ワイデア砂糖會社	ニノレ同	—	—	
ラウバホエホエ砂糖會社	ラウバホエホエデヴイス商會	五〇〇、〇〇〇	一四、八〇八	
カイヴイキ砂糖會社	オーカラ同	五〇〇、〇〇〇	—	
ハマクア、ミル會社	ハマクア同	一、〇〇〇、〇〇〇	一四、二四一	
パウハウ砂糖會社	パウハウブルワー商會	五、〇〇〇、〇〇〇	一二、二七四	
ホノカア砂糖會社	ホノカアシエツファー	二、〇〇〇、〇〇〇	九、四九二	
太平洋ミル	ハマクア同	七五〇、〇〇〇	七、一七一	
ニユリー、ミル	コハラデヴイス商會	—	二、九九〇	
ハラワ耕地會社	コハラ同	一二〇、〇〇〇	三、二九五	
コハラ砂糖會社	コハラキヤワスル、クツク	—	七、〇五八	
ユニオン、ミル會社	コハラデヴイス商會	二〇〇、〇〇〇	四、〇二九	
ハウイミル會社	コハラヒンド、ロルタ	三〇〇、〇〇〇	一〇、六八九	
ブアケア耕地會社	コハラソタ―ハウス	—	三三、九二一	
コナ開拓會社	コナ同	五〇〇、〇〇〇	二、一二一	
ハツチンソン會社	カウブルワー商會	二、五〇〇、〇〇〇	一〇、七〇〇	
布哇農業會社	カウ同	二〇〇、〇〇〇	一九、七九三	

（以上ハワイ島所在）

各島別產糖額

（備考　製糖會社は十月より翌年九月までを製糖年度とす）

	一九二二年度	一九二三年度	一九二四年度	一九二五年度
ハワイ島	一九七、〇六四	二三八、九五四	一八八、三六二	二三五、五六八
マウイ島	一二五、五九九	一三三、八四七	一三三、〇六九	一五五、三六四
オアフ島	一三五、四六二	一五三、七七七	一四七、六六三	一八八、五三三
カワイ島	一〇一、〇七一	一〇二、四九九	九六、五一二	一二四、九六九
計	五三九、一九六	六〇九、〇七七	五四五、六〇六	七〇一、四三二

甘蔗耕地就働者數

（備考　一九二五年度布哇砂糖耕主組合統計に依る）

白色米國人	一、一九三（殆んど高級事務員、技師、監督）	支那人	一、三六三（請負仕事、普通勞働者）		
西班牙人	七七	朝鮮人	八七七		
葡萄牙人	一、七八一（製糖場勤務者多し）	比律賓人	二四、五九五（殆んど普通勞働者）		
布哇人	五七四	雜	一八三		
ポートリコ人	一、〇六六	計	四四、四五〇		
日本人	一二、七四一（請負仕事、製糖場勤務者多し）				

以上は男子にして此他常雇、臨時雇として婦人勞働者三千五人、幼年者六百四十五人、學生五千三百三十八人あり甘蔗耕地會社就働者の總計は五萬三千四百三十八人となる、布哇に於て栽培さるる甘蔗の種類は數百種あるも其主なるものはヤローカレドニア。ラハイナ。エチ第百九號。ディー第千百三十五號。縞入メキシコ。縞入テツブ。黃色テツブ。ディ第

百十七號。ロースバンブー。エチ第百四十五號等である、何號とあるは布哇にて作られた改良種であるがその中ヤローカレドニア。ラハイナ。エチ第百九號が最も多く用ゐられてゐる。

第二節　鳳梨業

鳳梨が食用果實として發見されたのは三百九十年前で和蘭のオビエドなる人が栽培したるに始まる、熱帶地植物にして布哇、瓜哇、新嘉坡、臺灣はいづれも鳳梨の產地であるが就中布哇產は品質優良、代表的鳳梨として世界的聲價を博してゐる、鳳梨が布哇に移植されたのは一千八百八十四年で瓜哇種苗をカワイ島に栽培したるを最初とし爾來各島に及んだが果物として市場に現はれたは一千八百八十六年頃である、一千八百九十年頃生果を米大陸に輸出したが大部分は船中で腐敗して失敗に終つた、其頃ダブルユー、トーマスなる者米大陸より來り鳳梨業の將來を期待し栽培、果實保存、罐詰方法に關し熱心に研究の結果、相當の自信を得てオアフ島ワヒアワに罐詰工場を起して鳳梨業に新生面を拓いた、一千八百九十七年二打入百十五箱、價格三百四十七弗の鳳梨罐詰が米大陸に輸出された、罐詰鳳梨の特色は生果以上の新鮮と美味を有することである、忽ち好評を博して販路擴大、產額を漸增し一千八百九十七年は三千百五十一箱、一千八百九十九年は一千六十四箱を輸出するに至つた、當時鳳梨の栽培地はワヒアワに限られてゐた。

トーマスの如き特志家によりて產業價値を高められた鳳梨業は一千九百年に入りて急速の發達を見た、人煙稀薄のワヒアワ高原は日に月に開墾されて肥沃な栽培地と化して季節には黃金に比すべき果實の波を漂はせた、ワヒアワ高原一帶、オアフ島北西部の高原丘地は悉く鳳梨園となり他島に及んではカワイ島のカバア、ラワイ、マウイ島のハイク、バウエラ、マカワオ、ホノルア、ハワイ島のコハラ、モロカイ島、ラナイ島の鳳梨化となり今日にては十二の會社により年額七百萬箱、價格三千數百弗を產出し糖業と對立して布哇產業界に有力なる分野を劃するに至つた、鳳梨業が僅に三十年間に驚くべき發達を示せるは當業者の努力と豐饒なる地味の二拍子の揃へる賜である、現在鳳梨罐詰會社の所在地と千九百二十四年度鳳梨罐詰產額を示せば左の如し。

會社名	所在地	所轄栽培地	罐詰產出額箱
布哇鳳梨會社	ホノルル	オアフ、ラナイ兩島	二、二五六、六六五
リビー、マクネル	ホノルル	オアフ、モロカイ兩島	一、一三六、一一〇
加州パツキング	ホノルル	オアフ、マウイ兩島	一、五九三、一五一
ボールシチー果物會社	オアフ島ワヒアワ	オアフ島	二五六、三四七
ハイク果物罐詰會社	マウイ島ハイク	マウイ島	五九二、〇七三
ボールドヰン、パツカース	マウイ島ラハイナ	マウイ島	二四五、七八九
カワイ果物土地會社	カワイ島ラワイ	カワイ島	二五二、六九二
ハワイアン罐詰會社	カワイ島カバア	カワイ島	一八六、一九六
布哇果物罐詰會社	ホノルル	オアフ島	三五、八五〇
パウエラ鳳梨會社	マウイ島ハイク	マウイ島	一二四、三六四
コハラ鳳梨會社	ハワイ島コハラ	ハワイ島	六七、八九二
ホノルル果物會社	ホノルル	オアフ島	六一、三〇六

最近の鳳梨罐詰輸出額は一千九百二十二年度は四百七十七萬二百三十九箱、一千九百二十三年度は五百八十九萬五千七百四十七箱、一千九百二十四年度は六百八十二萬五千九百四箱となり一千九百二十五年度は七百萬箱を突破した。

鳳梨には種類多きも布哇に栽培さるるは一千八百八十七年瓜哇島より輸入された所謂カナカ種と稱する野生とレッドスパニシュ。スムースカイエンと呼ぶ三種である、カナカ種は芽深く果肉少なく罐詰用として適せず、レッドスパニシュ。スムースカイエン兩種は鱗皮薄く果肉厚く罐詰向きなるも地味の關係より原質を失ひ易きより布哇農事試驗場は苦心研究

スムースカイエンより優秀な改良種を得た、これ品質世界に冠たる現在の布哇種で罐詰用の鳳梨は悉くこれを用ゐられてゐる。

第三節　珈琲業

珈琲は砂糖、鳳梨に次ぐ布哇の主要産物で殊にコナ珈琲の品質香味は世界一と稱せらる、布哇の珈琲は一千八百十七年西班牙人によりて初めて移入された、トム、パウロマリンなる者カワイ島ハナレーに植樹せるを嚆矢とし一千八百二十三年マタンなる者ホノルル附近に一千八百二十五年英人ウイルキントンなる者ホノルルのマノア、カリヒ、パウオア、ニユー等に栽培し一千八百二十七年馬尼拉より種苗を輸入しオアフ島ワイアナエに珈琲園の開かるるあり其後各島に移植され一千八百五十年には二十餘萬封度を産出したが資本勞力の不足、蟲害等の故障に因り捗々しき發達を見ずハワイ島コハラ、プナ、ハマクア、コナ地方を除いては漸次珈琲業者の影を沒して今日にては殆んどコナ地方獨占の産業たる觀を呈してゐる、珈琲は海拔一千五百呎乃至二千呎の高地に適する、コナは此條件を具へ風雨の順もよく南地二十哩の地帶は珈琲の灌木林に蔽はれてゐる、コナに於ける珈琲の栽培、採收に從事するは殆んど日本人でありキヤプテン、クツク會社、アメリカン、ファクタース。布哇珈琲ミル、日本人珈琲ミル等の數會社があつて精製、輸出に當つてゐる、栽培地面積は約五千英町でハマクアに二百英町ほどある、コナの珈琲はアラビア種の優良種モーカ屬で最高級の品位を有し米大陸市場で歡迎されたるも惜むらくは産量少にして世界的供給をなすに足りない、米大陸への輸出狀態を見るに一千八百五十年は二十餘萬封度、一千九百六年は百二十三萬封度、一千九百十年は三百四十四萬封度、一千九百十四年は四百四十三萬封度、一千九百十六年は六百八十四萬封度、一千九百二十年は二百六十萬封度、一千九百二十一年は三百萬封度の數量を示し最近二年間は

	數量封度	價格
一九二四年度	二、三三六、三四三	四六二、九〇九
一九二五年度	四、六一九、六三四	一、一九七、五三五

と註せらる、收穫は結實の豐凶で年により甚しき差ありて一定しない、加ふるに相場の變動甚しく當業者は多年經營に苦心し來つたが最近三四年は豐作にして相場好く非常に景氣がよい、珈琲栽培業はコナ、ハマクア地に開拓の餘地あり又たマウイ其他に好適の地所少なからざるを以て四百萬封度乃至五百萬封度の年産額を倍加せしむること決して不可能でない、しかし珈琲業は大資本を要せざる代りに家族的農民を必要とするを以て農園勞働者不足の布哇にありては現在以上の發展は覺束ないかも知れない。

第四節　米作業其他

布哇に於ける米作業の起源は糖業に次で古い、一千八百五十七年米人が南カロライナ州より種子を輸入播布したに初まり其後支那人が支那米の耕作をなし一千九百〇五年日本人が日本米種子を移植した、現在布哇産米の種類は布哇米、日本米、支那米の三種あり、總て水田によりて耕作さる、幾度か陸米を試作したが成績は良好でない、從業者は大部分日本人であつて支那人これに亞ぐ、カワイ島は布哇第一の米作地にしてハナレイ地方を主としワイメア地方に數千英町の水田がある、オアフ島ボールシチー、カネオへ、ハワイ島コハラ地方も亦た多少を産する、氣候に惠まれて一年二回作を可能とするが地力、勞力の關係より却つて一回作を有利とするやうである、布哇産米の大部分は布哇に於て消費され一少部分が大陸に輸出されてゐる、しかし米大陸に於ける米作業の盛んならざりし時代には布哇米は砂糖に次ぐ重要輸出品の一であつた、一千九百二十年には五千英町より一千四百五十七萬七千八百封度、價格百五十七萬七千弗の收穫があつた。熱帶地の果物としてバナナは米大陸に相當輸出せられてゐる、布哇各島バナナを産せざる處なきも大部分は對内的需要に宛てられ保存輸送の關係から主としてオアフ、ハワイ島産が米大陸市場に送らる、輸出量は一ヶ月二萬房内外である、害蟲地中

蠅發生の結果一時大陸に輸入を制限されたが大なる打擊はなかつた、尤も大規模の栽培を見ざる限り現在以上の輸出は望まれない、布哇のバナナ種類はジヤマイカ、チヤイニース。レッド、スパニシュ。ブラジリアン。ハマクア、バナナ。ボラボラ、バナナ。クサイエ、バオナ。ラーゴ、レッド、スパニシュ。イホレナ。マオリ。ボロウル等で多くは近代他から移植されたものである。布哇の土人は七十年前よりハワイ島コナに煙草を作つて自家用に充てゐた、一千八百五十年頃試驗的にカワイ島に栽培され一千八百七十年頃ハッチンソン博士が玖瑪から渡米してマウイ島ハナに煙草農園を開いたが失敗に終つた、一千九百八年コナニ資本金二萬弗の煙草會社創立され二年後二百五十英町から十八萬封度の原葉を收穫して米大陸に輸出した、一千八百十八年キヤツスルはコナ、ホナウナウの耕地から三萬五千封度を穫て一封度一弗から二弗七十五仙の價格で大陸に賣拂つた、一千九百二十一年コナ煙草會社はホノルルに精製所を設けて事業擴張を圖つたが成績面白からず現在では閉鎖同樣の狀態にある。布哇に於てゴム樹が事業として栽培されたのは一千九百五年でシーラ、ヘビア、カステロの種苗が移植され五個の會社が三十萬弗の資本を擁して經營に着手した、マウイ島ナヒク地方を主とし栽培面積一萬二千英町植樹數十萬本に達しヘビア種最もよく成育したが土壤層淺きため樹體は或程度以上は延びず加ふるに液汁少くして折角の事業も全然失敗に歸し製造場は立腐となりゴム林は雜木林と化して今は一顧もされなくなつた。一千八百九十三年米大陸フロリダ州のサイザル苗二萬本が布哇農林局の手に輸入され先づオアフ島エワ地方に試作されたが成績良好なので布哇纖維會社起りモロカイ、ハワイ島コナ、オーラー各地に盛んな栽培を見た、サイザル纖維は綱索の原料として需要多く有望なれども糖業、鳳梨業等に壓せられて不振の狀態にある、現在栽培面積は二千英町内外で一ケ年一百噸の纖維を產出してゐる。綿花は百年前庭園用としてキドニー種を布哇に移植した、後年產業化すべくカラボニカ種、シー、アイランド種、カリフォルニア種、埃及種、アツプランド種、ミツドアフイフオー種等が各地に栽培された、布哇の地味は棉花に適し纖維强靱、純白にして光澤あり品質優良であるが組織的企業なきため唯だカワイ、オアフ、マウイに一千英町内外が副業的に栽培せられ一ケ年二十萬封度の粗綿を產出しゐるに過ぎない。此他布哇には各島各地に日本人、支那人、葡國人、布哇人の經營する小農園から蔬菜、草花を產出する、その面積は二萬英町に達すべく產額百萬弗以上であるが全部は布哇で消費される、養鷄、養蜂は農家の副業に屬し養豚業は日本人の獨占に等しく年額數十萬弗に達する、アワ樹の根は醫藥原料として日本、獨逸に輸出せられハワイ島に二百英町の栽培地がある、布哇のココナットは野生に任せて庭園用とするのみ、コプラ採收用としての殖林は殆んどない、唯だオアフ島に一ケ所の造林あるもコプラは商品として一噸も輸出されない、布哇の林業は貧弱で名物たりし檀木は濫伐されて跡を留めず唯だコア、オヒア樹が家具裝飾の加工的原料木材として少許の輸出を見るのみ、牧畜はハワイ島マウナケア、マウナロア兩山の山腹、山麓、マウイ島ハレアカラ山腹に相當大規模の牧場あり牛馬羊を放牧してゐるが其產畜は未だ以て布哇の需要を滿すに足りない、肉類の大部分は米大陸、濠洲から供給を仰いでゐる有樣である。

第五節　漁業

四面環海の布哇は洋島として魚族に富むも、多くは近海魚であつて潮流による群棲魚族少きが故に漁業は單に布哇の需要を充すに止まり海外に輸出する程度に達しない、往昔人煙稀なる時代にありては近海は魚類繁殖し土人は原始的方法を以て充分の漁獵あり、又た鯨群の游弋盛んにして米大陸より捕鯨船の來往頻々たるものあり、カメハメハ王朝は檀木の輸出と捕鯨船の貢稅を主要の財源とした時代もあつた、然るに需要の增加と漁法の進歩は近海の魚類を減少せしめ遂に發動機船を以て數百哩外の遠洋に出漁するの已むなきに至つた、布哇の漁業は日本人の專有に屬し數百隻の發動機船は數百哩の圈内に活動して無盡藏の寶庫を開拓してゐる、漁獲高は年々百萬弗を越えるであらう。

第六節　商業

布哇の商業は内に向つては日用必需品の殆んど全部を海外から輸入供給し外に對つては布哇の產物を輸出して販路を世

界に求めて可なり盛んである、絶海の島嶼ながら太平洋の十字交叉點に方り濠洲、加奈陀間、日本米大陸間、東洋南米間、世界一周航路の汽船定期寄港するは勿論、布哇は直接桑港、羅府間二線の定期航路を有して運輸交通の便よく群島内は内島汽船會社の汽船によつて密接に聯絡されをるのみならず砂糖、鳳梨、珈琲等の產物にして大陸に輸出さるるもの年に百萬噸を超ゆるが故にホノルルは旅客寄泊地、物貨集散地として殷賑を呈してをる、一千九百二十五年六月に終る一年間ホノルルに出入せる船舶七百二十九隻、噸數五百七十四萬二千噸、ヒロに出入せる船舶百四十八隻、噸數百四萬五千噸を算し同期間の海外貿易は輸出金額一億二百一萬六千弗、輸入金額八千二百六十七萬九千弗の巨額に達せるに徵するも其一班を知ることが出來やう。布哇の貿易は日本品の輸入年額三百萬弗内外を除いては殆んど全部米大陸を相手とする、輸出品の重要なるは砂糖、鳳梨罐詰、珈琲で一千九百二十五年度は砂糖六千四百五十萬弗、鳳梨罐詰三千二十萬弗、珈琲九十八萬弗、モラセス八十四萬弗、バナナ二十三萬弗と註せらる、輸入品は自動車の四百八十五萬弗、麥粉類の二百四十五萬弗衣類衣服地三百九十六萬弗、鐵器鐵材二百八十六萬弗、機械、汽鑵類二百八十萬弗、肉類、蔬菜、果物八百萬弗、米三百四十三萬弗、煙草二百三十六萬弗、材木類二百四十萬弗、罐詰類三百六十三萬弗を主とする、過去八年間の輸出入貿易金額を掲ぐれば左の如く未だ曾て輸入超過を見たることなく年々數千萬弗の輸出超過を示して布哇產業の隆盛を語る、一千九百十九年、二十年、二十一年の歐洲大戰戰中戰後の好景氣時代にあつては三年間に累計一億六千萬弗の輸出超過をなして布哇の黃金時代を現出した、輸出超過による貿易の差額はそれだけ布哇富力の增進を語るものである。

布哇海外貿易輸入出額

（備考　關稅は米大陸以外外國よりの輸入品に課せらる）

年度	輸出額	輸入額	輸出超過額	稅關收入
一九一八	八〇、五四五、六〇六弗	五一、八〇一、二〇四弗	二八、七四四、四〇二弗	一、〇〇九、二四三弟
一九一九	九八、八五九、三一一	五一、八九五、一一三	四六、九六四、一九八	八五八、二五八
一九二〇	一四五、八三一、〇七四	六八、八七六、〇九四	七六、九五四、九八〇	一、一七二、二九四
一九二一	一三一、二三九、八八七	八九、八八五、九九三	四一、三五三、八九四	一、四二六、七一六
一九二二	六九、四五七、五一一	五九、四〇一、二九四	一〇、〇五六、二一七	一、〇七六、一六三
一九二三	九七、四三一、〇七五	六八、八三四、六三二	二八、五九七、四五三	一、五〇〇、六五三
一九二四	一〇八、六三三、二三三	八〇、〇〇〇、三四七	二八、六三二、八七六	一、五四三、九一一
一九二五	一〇二、〇一六、八八三	八二、六七九、〇五八	一九、三三七、八二四	一、八五四、四〇三

第二編　歴史

第一章　布哇王朝史

第一節　布哇の發見

布哇群島に人類の棲みたるは何時の時代なりや、口碑傳説の徵すべきなく文献の據るべきなく杳として知るに由なきも、六世紀頃南太平洋にポリネシア人の移動あり、其支族がタヒチ、フイジー、サモアの諸島に轉々せる際、ハワイロアなる酋長の率ゆる一族はソサエチー群島を經て布哇群島に移住した、これを布哇人の遠祖とすとの説やや信を措くに足る。要するに有史以前の布哇は全くの蠻土にして布哇人は悠々自適、水草を逐ふて遊食する原始的生活に安んじ文化の假面の下に醜き生存競爭を演ずることなど知らぬ武陵桃源の鄕であつた、當時の布哇人は各島地の漁獵に便よき江灣、果樹に富める山野に割據しそれ〳〵酋長を戴いて小さい集團生活を營んでゐたのである。此の武陵桃源の境を驚かし天使のやうに無邪氣な布哇人が太平逸樂の夢を破つたのは泰西人の布哇訪問である、英國の航海探險家ゼームス、クツクは一千七百七十八年カワイ島を發見し次でオアフ、マウイ、ハワイ諸島の存在を知つた、彼は本國海軍卿サンドウヰツチ伯の名を其儘群島に冠してこれを世界に紹介した、爾來クツクは布哇最初の發見者として公認せらるるに至つたが、一千五百二十七年西班牙艦隊三隻がサカチウラーよりモロツコを經て太平洋に入り布哇群島のハワイ、マウイ、ラナイ、モロカイ、カホオラウエ諸島を發見し一千七百五十五年英國船センチユリー號がキヤプテン、ロード、アンソンの下に太平洋航海中捕獲せる西班牙一商船内に布哇發見の記錄文書を見たりと傳へ、一千五百五十五年西班牙人ジユアン、ゲータンが布哇群島を發見せりとの文献あり、十三世紀の中葉以降日本漁船や日本帆船の屢々布哇に漂着せる形跡あり、クツクを最初の發見

者といふは當らずと雖も逸早く布哇群島の存在を世界に報告せる點に於て『最初の發見者』たる名譽を彼に授くるも不可はない、クツクはデスカバリ、レソリユーションの二船を率ゐる南太平洋ソサエチー群島バルボアに寄港し糧食薪水を積載し北方針路を取つて航進中一千七百七十八年一月十八日カワイ島を發見しワイメア灣に投錨してサンドウヰツチと命名し其儘アラスカに直航、同年十二月再び布哇群島を歷訪して一千七百七十九年一月十七日ハワイ島コナ、ケアラケクア灣に碇泊し、土人に友交を求めた、初めて文明國人に接した布哇人はクツク一行を目覩して驚愕し『船來の人皆な色白く皮膚は豊かにして折疊み自在なり、彼等の頭は四角にして其口より火を吐く、身體の兩側に小孔ありて手の挿入自由にして物品を藏するを得、言語は一切解すべからず』となした、即ち布哇人は洋服、帽子を身體の一部と見做しポケツトを不思議な穴となし喫煙を火を吐くと觀たのである、布哇人はクツク等を海神と崇め親切を盡して薪水や野菜などを提供し彼我の交情密なるものあつたが、帆船備付の端艇の紛失、船員の布哇人娘の誘惑等より誤解を生じて布哇人の一撲襲擊となりクツクは二月十四日船員と共に屢殺され死體は山腹なる洞窟に投ぜられた、クツクの末路は悲慘であつたがケアラケカア灣頭聳ゆるクツク記念碑は永久に彼の事蹟を表彰してをる、其後一千七百八十六年キヤプテン、デイクソンの艦隊、一千七百八十七年ラ、ベロウスの率ゆる佛國探檢船、同年キヤプテンミーアス等は相踵で布哇を訪問しミーアスはカワイ酋長カイアナを伴ひて支那を觀光せしめた逸聞もある。一千七百八十九年キヤプテン、ドグラスはイフイゲニア號に投じて布哇を訪問し酋長に銃器彈藥を献じた、同年キヤプテン、メトカフは帆船エリメア號で獸皮交易のために來航した、一千七百九十一年キヤプテン、ケンドリツクは白檀木採收のために來航した、爾來探檢のため貿易のため、捕鯨のため歐米船舶の布哇に寄港するもの頻々と絶えず布哇人は石斧、木槍、石弓の武器に代ふるに銃砲彈藥を以てし獨木舟に代ふるに三檣帆船を以てし其他衣食住に於て非常なる文化的影響を受けた、布哇人が文明の餘光を拜し悅樂隨喜の涙を流しをる時、恐るべき外國の爪牙は徐ろに其背後に迫つた、外寇の先驅者は花柳病、痘瘡等の忌はしき疾病と飲酒、喫煙の亡國的嗜好であつた。可憐なる布哇人の身心は日に月に文明病のために蝕まれて行つた。

第二節　カメハメハ出現

此時に方り文明の武器と外國人の勢力を利用して布哇群島統一の偉業を完成したのはポリネシアン唯一の英雄カメハメハであつた、カメハメハは一千七百三十六年ハワイ島、コハラ、ハラワなる酋長の子として生れた、資性英邁にして勇武、少年時代より戰鬪に加つて武名を馳せた、キヤプテン、クック一行屠殺の騷動には彼も一揆に加つてゐたらしい、カメハメハが成年期に達した時ハワイ島は三分されて各酋長を頂き、マウイ酋長カヘキリとカワイ酋長カエオが他の諸島を領有してゐた、カメハメハは虎視耽々布哇統一の覇業を夢み機會の來るを待つたが偶まカウ酋長ケオウアとヒロ酋長ケアウマヒリの不人望を聞いて奇貨措くべしとなし叔父カラニオプ酋長の勢威を藉りて挑戰し時に勝敗はあつたが一千七百八十五年のヒロ征伐によりハワイ全島を平定し直ちにカヌー艦隊を編成してマウイ討伐に着手し一千九百九十年ハナより上陸大擧ワイルクに攻寄せたがハワイ島に内亂起れるため一旦引返し一千七百九十五年ラハイナより上陸してマウイを攻略し轉じてモロカイを陷れ破竹の勢を驅つてオアフ島に向ひワイアナエ灣より上陸、オアフ酋長カラニクプレの軍をヌアヌパリに追迫して殲滅せしめ一千七百九十六年オアフ島ワイアナエを根據としてカワイ島征服を企てたるも暴風に妨げられて果さず中途で軍を返した、しかも群島の平定幾んど成りたるを以てハワイ島コナに王居を構へオアフ島ホノルルに幕府を置き腹心の部下、戰功者を各島各地に封じて封建制度を布き外國人顧問を聘して殖産興業と外國との修交に努めた、彼がカメハメハ第一世として布哇國に君臨したのは一千七百八十二年四十五歳の時であつたが一千八百十年カワイ島は干戈を交へずして降り布哇群島統一の覇業はここに完成した、彼の覇業の蔭には外國人の勢力あり、これがカメハメハ王朝滅亡の遠因をなしたりとはいへ兎も角獨木舟艦隊を以て各島を征服し一獨立國を創成した彼はポリネシア人中唯一無二の英雄といふべきである、彼は一千八百十九年ハワイ島コナ、カイルアノ王居で崩御した享年八十二歳であつた。カメハメハ王朝歴代主權者の年代表を左に示す。

	出生地	即位年代	即位年齢	崩御年代	在位年間
カメハメハ一世	ハワイ、コハラ	一七二八	四五	一八一九	三七
カメハメハ二世	ハワイ、ヒロ	一八一九	二二	一八二四	五
カメハメハ三世	ハワイ、ケアフホウ	一八三三	一九	一八五四	二二
カメハメハ四世	オアフ、ホノルル	一八五四	二〇	一八六三	九
カメハメハ五世	オアフ、ホノルル	一八六三	三三	一八七二	一〇
ルナリロ	オアフ、ホノルル	一八七三	三八	一八七四	一
カラカウア	オアフ、ホノルル	一八七四	三七	一八九一	一七
リリオカラニ	オアフ、ホノルル	一八九一	五二	一九一七	二

第三節　外國勢力の侵入

カメハメハの覇業成り布哇王國は生れ統治の實は擧げられたが同時に外國の勢力は種々の方面から布哇に侵入してその平和と獨立を脅かした、布哇群島は地域狹小であつて天産裕かならず人口も少なく文化の程度も低い、獨立國の體面を支持するには殖産興業を盛んにして財源を作る外ばないが、それには外國人の技術と資金が絶對に必要であつた、又た文化生活を營み文明國として立つにはどうしても外國人の指導を俟たねばならぬ、これらの弱點に乘じて外國人は或は領土慾、或は物質慾から術策を構へ口實を設けて間斷なく布哇を苦めた、布哇が布哇人の布哇として獨立政府を維持したのはカメハメハ大王即位の一千七百八十二年よりリリウオカラニ女王退位の一千九百二年に至る百年間であるが此の百年間は泰西人といふ猫が布哇といふ鼠を捕り啖ふ過程を示せる哀れなる御伽畫の展開とも譬ふべきであつた、優勝劣敗は免るべからず、布哇や布哇人の運命はクツクが發見せる刹那既に定つたのであるが歴史を按じて今更ら暗然たらざるを得ないの

である、布哇は建國以來歐米諸國就中三大國の勢力に威壓された、三大國とは英、佛、米を指す、英國の勢力はキャプテン、クックの布哇發見に始まり世界最强國として布哇に臨み國王や布哇人を見ること印度の酋長や奴隷と撰ばず布哇王國を少年の擬國會以下に取扱つた、一千七百九十四年早くも布哇併合の計畫を旋らし一千八百四十三年英國總領事は些細の口實を以てボウレット提督麾下の英國艦隊を墨國近海より布哇に廻航せしめ王朝政府に六ケ條の不當要求をなし容認を强制した、カメハメハ三世は砲門下の脅迫を如何ともする能はず泣いて布哇群島讓與の詔書を發し政廳には色鮮かな英國旗が揭揚された、しかも米國の抗議、佛國の好意により英國は要求を撤回し國書を以て布哇の獨立を承認することになつて危く滅亡を免れたのである、佛國の勢力は一千八百二十六年佛人宣教師數名が軍艦カメツト號に塔乘しカメハメハ三世の侍從ジヤン、リヴァスを伴ひて來航せるに因由する、偶ま基督教新舊教徒の反目あり王朝政府が新教徒に加擔せるより一千八百三十九年佛國政府は舊教徒の佛國人を保護し信教自由を確保する辭令の下に軍艦アルメミ號を派遣して陸戰隊を上陸せしめて五ケ條の過大要求をなし談判が荏苒決せざるや一千八百四十二年佛國提督トルメリンは陸戰隊を以て政廳を占領し王室用帆船カメハメハ三世號を捕拿するなど威壓脅喝至らざるなき暴狀を演じたが幸ひ英米兩國の庇護ありて無事に此の葛藤を切拔けることが出來た、王朝政府は頻出する外國との紛議を避くるため一千八百五十一年臨時ながら主權を米國に供托してその保護となるの已むなき窮地に陷つた、米國の勢力は地理的關係と宣教師の文化的貢献によりて自然に形成された、一千八百二十年米國傳道會社はハイラム、ブリンガム一行の宣教師團を布哇に送つた、一行は基督教の傳道は勿論、醫藥、出版、農業方面に於て大に貢献する處があつた、彼等は政治的何等の野心なく誠心文化の開拓に任じ傍ら英佛兩國の不法なる壓迫に抗爭して王朝政府を庇護したるを以て自然と布哇人の信賴を博し地の利と人格の力を以て牢乎として拔くべからざる勢力を扶殖し遂に政治上、產業上鞏固の地歩を築いたのである、しかし宣教師の子孫や他の米國人は決して貴き殉教者や君子人ばかりではない、米國人の勢力强大となりて布哇人が不安を抱いて對抗策を講ずるや米國人英佛の白人系住民と結合してこれに當り王朝政府を倒し布哇の獨立を奪ひて米布合併の大團圓に赴かしめた、英國の勢力は布哇を煩悶せしめ佛國の勢力は布哇を疲弊せしめ米國の勢力は布哇の獨立を奪つた、國家興亡の跡を顧れば感慨無量である。

第四節　歷代の治績

カメハメハ一世の次に即位したカメハメハ二世は暗愚で豪奢をこととし誅求苛斂で內外の信を失した、英國の保護國たらしむる目的を以て一千八百二十三年渡英したが翌年倫敦の客舍で崩御した、攝政カアフマヌは鋭意善政を布き民力の涵養に努めて名聲があつた、一千八百二十五年即位したカメハメハ三世は中興の英主で賦課を輕くし信教の自由を認め財產の安全を保證し殖產を盛んにし立憲政治を布いて世界各國をして布哇獨立國の存在を公認せしめた、カメハメハ四世は代議制の完成を唯一の業績として夭折し、カメハメハ五世は資性俊敏にして大志あり農產業を振興するため外國勞働者輸入の途を開き病院を設け學校を創設し燈臺を置き軍備を整へて治績大に見るべきものがある、王權の衰弱を慨し回復のため憲法修正を企てたが人民に反抗されて成らず晩年を怏々として暮した、カメハメハの血統は王の崩殂によりて斷絕し他の王族から即位したルナリロ六世は在位僅か一年、一千八百七十四年デヴイト、カラカウア王が王冠を頂いた、王は世界の大勢に通曉した傑物でカメハメハ王朝末葉を飾る人物であつた、一千八百七十五年米布互惠條約を締結して砂糖輸入稅を撤廢せしめて布哇糖業を泰山の安きに置いた、一千八百八十一年東洋、歐洲を歷遊し米大陸を經て歸布した、日本皇室を訪問して國際的ローマンスを作れるは此時である、一千八百七十一年（明治四年）日本と對等通商條約を結んで日本の國際的地位を向上せしむる動因をなし、日本移民輸入の端を開いて布哇と日本の交涉を密接ならしめた、覇氣滿々の王はサモア島を屬領たらしむべく軍艦カイミロア號を派遣し王權擴張の一手段としたが何れも失敗したが、水道、電氣、鐵道、電信等の文明利器の輸入には成功した、一千八百九十一年桑港の客舍に卒去するまで王の治世十七年、その中央集權、帝國主義は米國共和政治の感化を受けた人民には喜ばれず多くの紛爭を生じたが、殖產興業、文化機關の設備に對する努力

は特筆に値する、カメハメハ王朝最後の君主リリウオカラニ女王は一千八百九十一年即位式を擧げた、筒井筒の幼友達にして船長の子息なる白人ドミニスと結婚して床しきローマンスを有する女性である、王女時代一千八百八十七年夫君を伴ひ英國ヴィクトリア女王戴冠式に參列した、優しき女王ながら王權の衰退を慨き君主獨裁政治を布かんとして人民の反抗を買ひ革命を招致して王朝顚滅の悲運に會し即位僅か二年にして退讓し社交的尊稱たる女王の名に守られて晩年を平安に過し一千九百十七年十一月十二日ホノルルで薨去した、斯くてカメハメハ氏の社稷は百年にして絶えたのである。

第二章　米布合併

第一節　王權回復運動

カメハメハ王朝は獨立王國を支持するために外國人の智識と資本を利用したが此の事實は軈て王朝が外國人勢力に壓せられて滅亡すべき運命を齎らした、布哇に生れた最初の產業は糖業でカメハメハ三世時代勃興した糖業は逐年順調の發展をなしカメハメハ四世時代には布哇の經濟的生命たるに至つたが糖業は資本、技術、勞力一切を提供せる外國人によりて經營された、從つて糖業の發達は外國人勢力の增大を招き外國人勢力の增大は布哇王朝の衰微を意味した、已むを得ざる自然の數とはいへ王權把持者や勤王黨に取つては慷慨に價する痛憤事たるに相違ない、玆に於てか幾度か王權回復の運動が起つたが結果は却つて王權の威信を傷け民心を遠からしむるに過ぎなかつた、カメハメハ王朝の君主中王權回復に最も努力せるはカラカウア王であつた、世界を漫遊して新智識を有する王は王權の衰微を慨し如何にして外國人の勢力を防止しカメハメハ氏の社稷を安んずべきやに腐心した、內に王黨內閣を作りて官權を强くし外に列國君主と友交して知己を作り、聲望を高くせんがためにはサモア占領を企てたりした、甚しきに至つては王姪の配遇に日本の皇族を迎へ日本の勢力によつて白人禍を牽制せんとの苦策さへ旋らした、覇氣に富んだ王の苦心も努力も時非にしては何等酬はるる處なく折角の施設も計畫も悉く失敗に終りて徒らに民權派を跋扈せしめ憲法を民主的に修正するの已むなきに至り王朝の影を彌が上に薄ふする逆結果を得たのみであつた、次に即位したリリウオカラニ女王は女性ながらも英邁の資、勝氣の性、カラカウア王の遺圖を紹ぎ萎縮せる王權を振張し布哇人本位の獨裁君主政治を布んとした、乃ち一千八百九十三年一月議員、閣臣、高官、外國使臣をイオラニ宮殿に召集し

一、白哲人は布哇人女子と結婚せる者の外は參政權を有せず。

二、上院議員は女王これを勅選す。

三、閣臣の任免は女王の大權に屬し內閣は議會に責を負ふことなし。

の條件を以て憲法を修正せんことを强要した、王權派は異議を唱へざるも民權派と白人系住民はこれを以て時代錯誤の君主專制政治の計劃なりとし猛烈なる反對を試み閣員も亦た此の修正案に同意を拒み喧々囂々歸する處を知らざる混亂を呈した、しかも女王は決然として

諸子にして贊成せずんば朕は朕の有する大權に基き直ちに修正憲法を發布して有効ならしめん。

と斷言した、白人系の閣臣並に議員、民權派の有志は退いて市民大會を開き女王の意圖に反對して保安會なる團體を組織し王政を廢して假政府樹立の大謀を回らした、恰かもヒロより米國軍艦ボストン號の寄港するあり駐劄米國公使スチーブンは市民大會の要求に依ると稱してボストン號より陸戰隊をホノルルに上陸せしめ米人保護の名を藉つて示威運動を試み、これに策應して假政府の義勇隊は戰鬪準備を整へ王權派車隊に對峙するなど殺氣橫溢ホノルルは何時彈雨流血の巷たるや測られざる危機に瀕した、しかも假政府の軍隊とボストン號陸戰隊の武力は王權派の總てを威壓するに餘りあつた、女王は內閣員に諮議して其王權を拋棄し警察署、兵營、政廳を擧げて假政府に引渡して降服の意を表した、革命は一兵を衂らずして遂行され女王は閣臣署名の詔書を發して憲法改正の企圖を中止し今後斯る無謀を再びせざることを誓つた、それと同時に假政府は布告文を以て君主政體を廢止して米國と合併するまで共和政治を布くことを宣言して、エスピー、ド

ール。シー、キング。ビーシー、ジョン。ダブルユー、スミスの四名を執政官に推選した、假政府の宣言と前後して女王は退位の布告文を發し民權派の處置を抗議し米國陸戰隊の武力に抗し能はざるが故に假政府の强制命令に服從するも抗議の餘地を保留して米國に交渉復位の日を待つ旨を述べた、血涙並び下るていの女王の詔勅に署名したのは外務大臣サミュエル、パーカー。司法大臣エーピー、ターソン。大藏大臣ウイリアム、コーンウエル。內務大臣ジョン、カルバーンの四閣臣であつた、女王の王權回復運動は斯くして全然逆の結果に終りカメハメハ氏の社稷は朝露の如く脆く儚なく消えて了つたのである。

第二節　革命當時の事情

革命は雜作なく僅か一週日の間に遂行された、王權派の布哇人は悲憤遣る瀨なく檄文を飛ばして白人系住民や民權派一味の橫暴不逞を說き假政府組織の不法を鳴らしたが大勢は如何ともすることが出來なかつた、當時布哇には十八ケ國人が住居した、人口は日本人の二萬六千最も多く支那人の二萬、葡國人の一萬これに次だが大部分は勞働者で參政權もなく政治運動に沒交渉であつた、革命は資本家であり智識階級である少數米英獨佛人を中心勢力として行はれた、これらの背後には强大なる國家を控ふ、日支葡人に縱令革命に不滿ありとも本國政府を動して抗議するは不可能に近い、布哇の實體が近世の一獨立國たる資格と實力を缺き早晩强國に併呑さるべき運命にあるは火を睹るより瞭かである、革命の勃發が米布合併の前提たるは時の力、地の利よりして當然の歸趨なりと考へられる、大勢は然りとするも布哇人の意圖は別にあつた、當時の布哇人系新聞テレグラフの如き寧ろ合併を免れずとせば同じ有色人種たる日本帝國の版圖たるを望む、日本人は布哇に多數在住すれど別に野心なく日本國家は布哇を保護する地の利と而して充分の實力と文化を有する、合意的に日本と合併せんか布哇は幸福と繁榮兩つながらを得べしと說いた、血は水よりも濃しポリネシアンと東洋人は人種を異にするも同じ有色人種にして靈犀相通ずるものあり、布哇人が米國の威壓支配を免るるの不可能を知りながら日本人と接近、提携を希望せるは人情として將に然るべき處、テレグラフ紙の所論はカラカウア王の日本皇族招請の企劃によりて表示された布哇人の親日的思潮の發露と見てよい、若し當時の日本が今日の如く民族的、國家的に發展してゐたならば布哇の運命は更に微妙に轉化したかも知れない。

第三節　米布合併成立

一千八百九十三年一月布哇假政府は五人の使節を華盛頓に差遣して米布合併の交渉を開始せしめた、廢女王リリウオカラニも亦たそれと前後して特使を華盛頓に送つて米國陸戰隊の不法干渉に抗議せしめた、布哇假政府の使節は二月華盛頓でハリス大統領に謁見し國務卿と商議して合併條件を決定し兩國代表者署名の合併案を華盛頓議會上院に提出した、當時米國に於ては布哇併合に就て賛否の兩派ありて容易に決せず上院が批准に躊躇するうちに大統領の更迭となりクリーブランド大統領新に就任するや布哇併合を非なりとし合併案を上院より撤回しヴラウンド大佐を特別調査員として布哇に差遣した、ヴラウンド大佐は同年三月ホノルルに到着し先づ政廳より米國旗を引卸し駐屯の米國陸戰隊に撤退を命じ布哇との外交的關係を王朝時代に還元し同年七月華盛頓に歸任した、クリーブランド大統領は廢女王リリウオカラニの哀訴に同情し同年ウイルスを布哇に遣はして廢女王對假政府の紛爭を調停せしめた、ウイルスは種々の困難を排して使命を遂行したが女王復位の一段となつて假政府の拒絕に會ひ其儘華盛頓に引揚げて復命した、クリーブランド大統領は華盛頓議會を動して女王復位を實現せしめんとしたが議會は布哇王國の存立を好まず反對したるを以て大統領はこれに關する一切の行動を抛棄した、從つてリリウオカラニ女王の復辟は絕望となつたが米布合併の議も自然消滅に歸した、是に於てか民權派の人士は布哇獨立共和國の建設に着手し一千八百九十四年七月三日布哇共和國政府の成立を宣言し憲法を布き假政府の主任執政官スタンフオード、ビー・ドールを第一次の大統領に公選した。リリウオカラニ女王退位一年半後のことである、然るに一方王權派は雌伏二年復辟を翹望せるも平和的手段にては到底行はれざるを悟り且つ共和國の樹立に亢奮し此上は武力

により直接行動を以てカメハメハ王朝を再興する外なしとて勤王同志を糾合して私かに義勇軍を編成し一千八百九十四年十二月ウイルコックス。ウオーカー。ギユリック等の領袖は女王邸に會合して旗擧の策戰を協議したが陰謀中途にして發覺し一千八百九十五年一月ホノルルのマノア、カイムキに於て政府軍と一戰を試みたるも烏合の衆とて散々に擊破され一週日にして一兵を剩さず或は死し或は捕はれて全滅の悲運に陷り廢女王リリウカラニ以下關係者は叛徒庇護、叛逆罪に問はれて囹圄に下された、折角の義擧は徒らに多數の犧牲者を出すに止まつたが罪人の大部分はリリウオカラニの女王權利一切拋棄の贖罪的行爲によつて間もなく特赦された、廢女王は此事件以後布哇の政治公共事業に一切關係せず一市民として隱棲すべきことを政府に誓約した、一千八百九十七年マツキンレー大統領就任するや米布合併談判復活し幾多の交渉經緯の結果、同年七月合併案は華盛頓議會を通過して布哇共和國も亦た此の議決を承認し同年八月十二日合衆國代表者、布哇共和國代表者はホノルルに立會して合併式を擧行した、合併といふは實は布哇獨立國の滅亡である、政廳屋上に飜る布哇國旗が引卸されて色鮮かな星條旗が揭揚せらるる時、參列の布哇人は何れも暗涙に咽んだ、布哇人より成る布哇音樂隊は奏樂に堪えず隊員は何時の間にか四散して式場に姿を見せなかつた哀話もある。當時日本政府は米布合併に抗議したが形式的なもので徒らに歷史資料として抗議文書を殘したに過ぎなかつた、布哇人志士國士の義憤擧兵で最後の一頁を飾つたカメハメハ王朝は玆に全く終焉を告げ爾來布哇は北米合衆國の一縣として今日に及んだのである。

第三編　日本人

第一章　歷史的交渉

第一節　日本人漂着者

日本人と布哇の交渉は何時の時代に始まりたるか、日本と布哇は三千餘哩を隔つるも一水相通ずる同一海洋にあり、殊に黑潮のこれを連繫するあるが故に有史以前より何等かの關係ありしことは疑ひを容れない、布哇人の口碑によれば今を距る六百六十年前マウイ島カフルイにママラと呼ぶ一漁船が漂着した、漁夫は皮膚さまで黑からぬ外國人であつた、土人と雜婚して此の地に永住したが布哇人中身體痩形にして髯毛多く色やや白き種族はその後裔であるといふ、一千八百〇四年（文化元年）仙臺領の船頭津太夫が一行四名と共に布哇に漂着せしこと日本の記錄にあり、一千八百三十二年（天保三年）オアフ島ワイアルア灣に日本帆船遭難し生存者四名ホノルルに一年餘滯留せしこと布哇の文獻に見ゆ、日本と布哇の記錄に現はれたる日本人と布哇の交渉はこれを以て濫觴とするが、それ以外數百年の昔より日本の漁船、帆船が布哇群島に漂着せる形跡多々あり、布哇人中日本人に酷似せる骨格風貌を有する種族あり、又た布哇人の言語に日本語より轉訛せりと覺しき單語の少なからざるを考察すれば兩者の關係は隨分古いものであらう、一千八百三十四年（天保五年）、尾張の音吉一行三名、一千八百三十九年（天保十年）船頭平四郎一行三名、一千八百四十一年（天保十二年）遠州の船頭千太郎一行三名が布哇に漂着した、一千八百四十一年土佐の漁夫傳藏一行が土佐沖に出漁中遭難し島島に漂着せるを米國捕鯨船フェア、ヘーヴン號に發見救助されてホノルルに送屆けられた、一行中十五歲の少年、中の濱の漁民萬次郎のみは船長に伴はれて米大陸にて勉學し十二年後歸朝、唯一の英語通詞として幕府に重用されて旗本の士人となつた、醫學博士中濱東一郎

は其嫡子である、一千八百四十一年攝津の船頭善助一行二名、一千八百四十七年（弘化四年）米國捕鯨船フランセス、ヘンリエッタ號は漂流日本人四名を救助してホノルルに同伴、一千八百五十年（嘉永三年）紀州の船頭吉松一行等がホノルルに避難した、これと前後して布哇群島に漂着し、或は無人島より布哇に屆けられたる例は屢々あるも悉くは漁夫、船夫であつて偶然の出來事より布哇と相見えたに過ぎなかつた。

第二節　日布修交端緒

旅客として布哇に最初の一歩を踏入れたのは一千八百六十年一月（萬延元年）日本が最初の遣米使節新見豐前守正興の一行であつた、一行は日米修交條約批准交換のため米國に欽差されたもので副使村垣淡路守以下六十餘名、米國軍艦ポーハタン號に搭じて同年一月二十二日横濱を發し二月十四日ホノルルに寄港して一週間滯泊した、此の間布哇官民の歡待を受けたが初めての洋行とて異國の風物見るもの聞くもの一として奇ならず珍ならざるはなく、布哇國王カメハメハ四世に謁見するや綬章を指して『御亭主は襟掛けなり』王妃の禮裝を見て『奥樣は肌抜ぎなり』と評するなど十二分の赤毛布振りを發揮した、此の赤毛布連中無名の下役として勝海州、福澤諭吉等明治維新の俊毫が加はりゐたるは面白いではないか。一千八百六十八年（慶應四年）英國帆船サイオト號は日本移民百五十三名を布哇に齎らした、所謂明治元年者と稱せらるる本邦海外移民の先驅者にして日本と布哇の交渉は此の移民によりて新紀元を開いたのである、一千八百七十一年（明治四年）日本布哇間に通商條約が締結されて國際的親善の關係を生じた、一千八百八十一年（明治十四年）布哇のカラカウア王は世界漫遊の途次日本を訪問し朝野の熱誠な歡迎を受けた、王は日本の勢力を藉りて布哇より白人の勢力を一掃すべく一日私かに明治大帝に面謁して日本の或皇族を愛姪カイウラニの配遇者たらしめんことを懇望した、折角の希望は達せられなかつたが日布兩國の友交は兩帝室を通じて倍す敦厚を加へた、治外法權を撤廢して日本の條約改正を間接援助したのもカラカウア王で、一千八百八十五年（明治十八年）日本移民連續輸入の端を開いて日布關係を經濟化して緊切ならしめたのもカラカウア王であつた、王の日布親善政策は特筆すべきものがある、一千八百九十三年（明治二十六年）布哇王朝が泯びて共和國となり更に米國に併合せらるるや日本人と布哇の交渉は日本對米國領土の關係に變化して人間的色彩や戯曲的場面を少なくならしめた。

第二章　日本移民沿革

第一節　布哇移民由來

布哇には土着の布哇人あるも懶惰にして勞働者として好ましくなく且つ人口減少の一方であり産業に要する勞力は結局外國人に仰がざるを得ない、一千八百五十一年布哇農業協會は一ヶ月三弗の給料で百八十人の支那人を輸入せるを皮切りに一千八百六十四年には移民局を設置しヒレブランド醫師を東洋に派遣して適當の勞働者を物色せしめた、一千八百六十五年より一千八百八十六年に至る二十年間盛んに支那人の入國するあり其數二萬を越えた、一千八百六十八年南洋よりボリネシア人を輸入したが布哇人と同じく成績不良なので一時中止し千八百七十八年アゾレス、マデイラの諸島より葡萄牙人を移入し六年間に一萬人に達した、一千八百七十年米大陸より少數の白人をラナイ島に移住させた、其後諸威、露西亞、獨逸、西班牙の移民が試驗的に輸入されたが白晳人種は熱帶地の勞働に適せずして悉く失敗に終り唯だ葡萄牙人のみ甘蔗耕地の勞働に於てこそ東洋人に及ばざれ布哇中産階級住民としては先づ成功に近い支那人は薄給に甘んじ過激の勞働に耐ゆる點に於て資本家に取つては理想的勞働者といふべく一時多數の輸入を見、甘蔗耕地は支那人勞働者によつて支持さる る觀を呈したが社會的同化に難きと米大陸に於ける支那人排斥の影響を受けてその潮來は布哇の將來に禍を遺すものなりとし一千八百八十六年入國を嚴重制限せらるるに至つた。

第二節　最初の移民

日本人が移民として布哇に入國したのは一千八百六十八年（明治元年）である、布哇政府は日本駐劄布哇領事の斡旋により日本政府の許可を得て男百四十三人女九人、子供一人合計百五十三人の日本移民を英國帆船サイオト號で輸入した、此の百五十三人は日本海外移民の嚆矢であり布哇と日本人の關係を經濟的に結つけた連鎖であつた、彼等は住所賄附一ケ月四弗の賃銀、期間三ケ年の契約で勞働し成績良好なりしも虐待の誤報日本に傳はり一千八百七十年（明治三年）日本政府調査委員の來布となり事實無根の眞相は判明したが百五十三人の大部は懷鄕病に罹りて大半歸國し一部分が居殘つて所謂明治元年者とて邦人社會の長老として敬愛された、爾來十七年間日本移民の渡航を見ざりしも一千八百八十六年支那移民の入國を制限した布哇政府はこれに代るべき移民を求めて日本に着目し一千八百八十四年日本駐劄の布哇公使アーピンは時の外務大臣井上伯に交渉を開始した、一千八百八十一年カラカウア王來朝の際同樣の希望を耳にしたる日本政府はアーピンの懇請を容れて兩國政府の間に移民協約を締結し布哇政府は東京布哇公使館内に移民取扱所を置きて移民事務を處理せしむることになつた。

第三節　官約第一回船

一千八百八十五年（明治十八年）一月二十八日横濱出帆の汽船ペキン號は九百五十六人（内百一人は子供）の日本人を塔載して布哇に向つた、これ俗にいふ官約第一回船である、斯くて日本移民は踵を接して布哇に入國し一千八百九十四年（明治二十七年）は二萬九千人、一千八百九十九年（明治三十二年）は五萬八千人を數ふるに至つた、一千八百九十四年日本政府は移民官營を廢して私立移民會社の事業に移した、即ち一千八百九十四年六月十三日入港の第二十七回船三池丸を官約移民の最終船とする、同年六月以降は少數の自由渡航者を除く外は悉く民間移民會社による契約移民であつた、然

るに移民會社の多くは移民の膏血を搾り布哇の雇主を瞞着して私利を營むに汲々として非違の行爲を逞ふせるより常に紛紜絶えず一千八百九十七年（明治三十年）日本移民上陸拒絶事件起りて日布國際談判となつたが大事に至らずして解決した、一千八百九十八年布哇は米國に併合せられ一千九百年（明治三十三年）布哇は米國の一縣となつた、米國移民法は契約勞働を許さざるより移民會社の手を經たる日本移民入國の途はここに斷たれた、恰かも此年ホノルルに黑死病燒拂事件發生せるを機會に日本政府は自發的に移民の布哇渡航を禁止した、一千八百九十四年（明治二十七年）より一千九百年に至る六年間契約移民として渡布せる日本人は四萬二百八人に達した、日本移民の輸入一時斷絶するや布哇は勞働者缺乏に苦みポートリコ人を試用したが成績頗る不良なるに閉口し日本移民の復活を熱望するに至つた、一千九百一年（明治三十四年）八月日本政府は再び布哇移民を許可し定期船による一便船の渡航者を男女合計六十人に制限し一千九百四年（明治三十七年）四月これを百七十人に增加した、一千九百一年より一千九百五年末まで渡航せる移民は三萬六千四百九十三人と註せらる、一千九百六年（明治三十九年）日本政府は移民船の臨時回航を認可したので日本移民は大擧入國し半年間に四千人の多數を算した。

第四節　日本移民禁止

日本移民の潮來と前後して布哇より大陸に轉航する日本人も亦た夥しく布哇は從らに日本移民來往の踏臺となり產業界は勿論社會的不安を感ずること甚しきより官民協力して轉航防止運動を起し遂に一千九百七年（明治四十年）大統領の轉航禁止令となりて東洋移民は米大陸への轉航を絶對に禁止された、翌年ルート高平の日米紳士協約に基き家族、寫眞結婚者、專門技術家を除く日本移民の布哇渡航を日本政府が自發的に禁制することとなり明治元年を序とし明治十八年以來華々しく展開された日本人の布哇移民史はここに最後の頁を閉ぢたのである、一千九百八年來纔かに許された家族、寫眞結婚者、專門技術家の渡航も一千九百二十四年（大正十三年）七月實施の米國新移民法により再渡航者、布哇出生者、旅行者を除

く一切の日本人の入國を禁止さるるに至つて日本移民史は徒らに回想の資料たるに過ぎなくなつた。日本人は體力強健にして熱帶地の勞働に堪え勤勉にして溫順、怜悧にして生產能率に富む、布哇の產業が今日の如く發達し布哇の文化が太平洋の樂園たる名實を具備するに至れるもの全く日本人粒々辛苦の賜である、布哇の日本人は既に移民時代より定住時代に轉換した、現在十三萬人口の過半數は布哇に出生せる所謂日本人系米國市民である、しかしながら日本移民の偉大なる貢献は布哇の山河の存在する限り永久に記憶され謝恩さるべきである、朝鮮人は一千九百一年（明治三十四年）より一千九百五年の間七千人の輸入を見、比律賓移民の輸入は一千九百八年日本移民禁止の後に始まる、比律賓人は現在數に於て布哇勞働界の中心勢力を把持するも經驗、知識、勤勉の點よりして日本人の能率は依然布哇產業界勞力方面を代表してをる。

第三章　社會的變遷

第一節　移民時代

布哇に於ける日本人の社會的變遷を時代的に區劃すれば一千九百八年（明治四十一年）日本移民禁止までを移民時代、一千九百二十四年（大正十三年）米國新移民法實施までを定住時代、それ以後を第二世日本人の時代とすべきであらう。明治元年百數十名の日本人が渡來したが後續者なく社會的にも經濟的にも一勢力をなすに足らず唯だ勞働者階級に日本人の見本を提示せるに過ぎなかつた、明治十八年以來秩序的に數萬の日本移民が入國して、初めて社會生活を營み布哇の社會に日本人の一分野を形成した、しかも日本人として異域に定住するは最初の經驗であり、何等の準備も抱負もなく機械的に輸入され働されるといふ狀態にあるのでその社會生活は極めて幼稚で無秩序なものであつた、明治十八年に始まる官約移民の待遇は渡航經費一切は雇主が支辨し三ケ年契約で住宅薪水附で一ケ月の賃銀十五弗であつた、賃銀より一ケ月二十五仙を積立金として引去り領事館が保管の任に當つた。此の積立金は契約滿期後に拂戻す規定であるが事實その大部分は受取人なく今日まで其儘になつてをる、否受取人なきにあらず手續煩瑣のため放棄したのである、日本政府は官約移民を監督保護するため移民監督局をホノルルに設け中山讓治を監督官に任じ地方監督官十數名を各島に配置した、毛利甲賀、山本晋、小林幸隆、君島桂三、三田村敏行、中澤重友等地方監督官には醫師兼務が多かつた、監督官は移民保護の外に雇主との交渉役をも兼ねたが往々私利に眩惑して不法偏頗の行動に出づる者があり、言語事情の不通より移民と雇主の間に紛議が絶えぬので特別監督官の派遣となつた、日本政府は移民募集を人口稠密なる地方に於てしたが廣島、熊本、福岡、和歌山諸縣出身者の成績が良いので後年はこれら諸縣より勸誘することにしたものの愛鄕心の强い日本人として普通の者は外國に出稼ぎを欲せず寒村か貧漁村で生活難を喞つ者が乘るか反るかの奮發心で應募した、從つて大部分は無教育者であつた、飜つて雇主側たる砂糖耕地會社の待遇振りを見ると契約だけは表面的に履行したが其代り牛馬の如く勞働者を酷使し出來るだけ契約を誤魔化して勞力の搾取に努め病氣の場合も重病ならざる限りルナをして病床から甘蔗畑に引出さしめて就働させた、當時勞働者對雇主の紛議は幾んど雇主の不法非理に起因したが日本の領事も、移民監督官も事勿れ主義を奉じて事件を有耶無耶に抹殺して勞働者の主張を顧みなかつた傾向がある、官約移民が廢止されて移民會社取扱ひとなつても砂糖耕地會社の勞働者待遇に何等の改善も變化もなく加ふるに責任のない移民會社は惡辣な手段で移民の膏血を啜るに努め、その方便として雇主と結托策應を厭はなかつた、斯かる境遇にある日本人の生活狀態は想像するに餘りあり、當時ホノルルの日本人社會は領事館員、移民會社關係者を中心とする一派と嬪夫、賭博者等の無賴漢を中心とする一派によりて兩分せられ正業者は戰々兢々兩者の間に介在して肩身狹く暮した、砂糖耕地では低級なキャンプ生活が營まれ男女數不均衡に伴ふ風紀紊亂に陷り、博徒や醜業者等の不良分子多く日本人社會は總じて無節制で病的に流れた、蓋し移民地の過渡期にありては免るべからざる共通の現象であらう、しかし如何に移民地とはいへ年處を經て家庭を作り子供を有つ者加はり個人の責任觀念强くなり、教育宗教盛んになりて娛樂修養の機關備はり米人社會との接觸頻繁となり、更に日本の

國際的地位の向上に伴ふて民族的自尊心に刺戟さるる機會の多くなるに及んで日本人社會も漸く節制秩序を生じて健實に赴いた、殊に一千八百九十八年米布合併の結果、契約移民の廢止となり窮屈な契約勞働より解放され米大陸轉航の途開かるるに及んで日本人の生活は急激に轉化した、大陸に成功の機會を求むる者、甘蔗耕地を去つて獨立事業に就く者を續出し、砂糖耕地會社に働く者と雖も多年の壓迫に屈した反撥的心理の勃發から資本家に對しては待遇改善の要求となり、移民會社に對しては革新同志會の報復運動となり社會は一時混亂を呈したがこれも進歩向上の一過程に外ならず、移民會社や無賴漢は其影を沒し日本人社會は初期に比して著く面目を改めたのである。

第二節　定住時代

一千九百〇七年（明治四十年）東洋移民の大陸轉航は禁止せられ翌年のルート高平協約は日本移民入國の途を絶つた、此の結果として布哇の日本人は新陳代謝の機會を失ひ布哇群島に密封されて否應なしに椰風蕉雨裡に定住せざるべからざる運命に置かれた、居住移轉の自由を奪はるるは生活向上を阻止せらるるに等しく甚だ苦痛には相違なきもその反動として一種の諦めを以て定住の決心をなし布哇にて成功せんとする發奮努力を生じたるは轉禍爲福といふべく日本人の物質的精神的生活に非常なる進歩を齎らした、一千九百九年（明治四十二年）オアフ島甘蔗耕地日本人勞働者は增給を要求して大罷業を敢行し七千人は家族と共に四ヶ月に亘つて櫛風沐雨の苦慘を嘗めた、一耕地の紛爭に起因する小規模の罷業は屢々ありたるも、待遇改善を欲求しての組織的大罷業は日本人としても亦た布哇にありても未曾有の事に屬する、資本家は狼狽しながらも弱味を見せずと對抗し勞資兩者共に莫大の損失を蒙むり第三者にも甚しき迷惑を及ぼした、大罷業は形式に於て勞働者の敗北に終つたが實際は勞働者に有利の結果を生んだ、資本家は契約移民時代より踏襲せる勞働者待遇法の誤れるを悟り勞働者を機械視せずして一個の人間として取扱ふ傾向を生じて罷業終結後間もなく最低一ヶ月十八弗の標準賃銀を二十弗に引上げた、此の罷業は契約勞働時代の壓迫に對する反動、人間的に生きんとする欲求の發露として重大視せねばならぬ。大正八九年の交布哇各島甘蔗耕地日本人勞働者間に賃銀增額運動起り其前提として勞働同盟が組織され資本家に對し折衝を重ねたるも資本家は例によつて頑强な態度に出で總ての要求を斥けたので大正九年（一千九百二十年）オアフ島各甘蔗耕地勞働者六千人（二千人の比律賓人勞働者をも含む）は同數の家族を提げて大罷業を開始した、資本家は必死とこれに對抗し有ゆる術策を盡して罷業破壞を企てたが勞働者の陣容牢乎として拔くべくもなかつた、勞資戰は六ヶ月に亘り双方の損耗數千萬弗に達しながら有耶無耶に終焉を告げたが此の罷業は世界的風潮に動かされ勞資對等の主義に立脚した純乎たる勞働運動であつて人種別を超越し布哇勞働者の水準的生活を高めんとする人間的欲求の發作に外ならず布哇文化史上特筆すべき出來事である、前後二回の罷業は資本家側が米人であり勞働者側が日本人たる關係上、人種的社交に多少の惡影響を與へたるも大局より觀れば時代錯誤の布哇産業組織（糖業を中心とせる）にあつては必然發生すべき事件であつて勞資は勿論第三者ともこれによつて大に啓發される處があつた、殊に甘蔗耕地の勞働者待遇は以上二次の大罷業の結果として契約勞働時代に比して雲泥の差あるほど改善された、しかし大罷業以來賃銀低き甘蔗耕地を去つて農業商業其他の獨立事業に轉じて生活の安定を得んとする傾向顯著となり、日本人々口は甘蔗耕地に減少して都會や事業地に激增するの移動を示し又た日本に歸國すべきは歸國し布哇に居殘る者は永住の臍を固めて其積りで生業に勵み、結婚者の數は獨身者を凌駕し、子女の增加は教育機關の膨脹となり、延いて日本語學校問題等を産んだが生活の安定と向上は日本人社會の面目を一新して米人社會に伍して恥しからざる程度に達した、要するに契約勞働より自由勞働へ、自白勞働より獨立事業へ、獨身生活より結婚生活へ、結婚生活より父母としての生活へ、出稼根性より永住主義への轉換を定住時代の特長とする、布哇に於ける外國移民としての日本人の社會生活は此の時代に於て最も進歩し完成の域に達したりと評すべきである。

日本人の布哇移住は明治十八年（一千八百八十五年）に始まり明治四十一年（一千九百八年）に終つた、其期間入國せる日本人の大部分は頽齡、然らずんば老齡、中年に達して死滅減退の一方であり明治四十一年以降家族として日本より呼寄せられたる幼少年子女が壯年期にありて日本人社會の中堅をなせるを現狀とするがここに注意すべきは布哇出生子女の增加と其成長である、大正十五年の調査によれば布哇日本人々口十二萬八千人中五萬七千人は日本出生にして七萬一千人は布哇に出生せる第二世日本人である、其上年々五千乃至六千人の出生者を見る、即ち日本人社會は人口に於て第一世日本人より第二世日本人の時代に入つてをり質に於ても既に成人して社會の一員たる者數千を算すべく七萬一千人の半數は成年期の程遠からぬ青少年子女である、第一世日本人は多年布哇に在住するも言語思想の相違より米化を心掛けながらも其社會は飽まで日本人式を免れず米人との交際も他人行儀を出でない、第二世日本人は身體髮膚は正しく日本人ながら米國領土に生れ米國式教養を受けたるが故に其思想や生活は日本人と謂はんよりも寧ろ米人に近い、日本語より英語を易しとしてこれを常用する、日本食より洋食を可とし、盆踊りよりもダンスを好み、日本の家族制度より西洋の夫婦本位の家庭生活を愛する、座臥常住の生活樣式や心的働きは殆んど米人と同じである、第二世日本人の强味は父母が市民權なき外國人として政治に沒交渉であり官公吏となる能はず、官有地拂下げ、政府關係土木事業に關與する資格を有せず甚だ不利な境遇に置かれあるに反し布哇に出生せる彼等は米國市民として選擧權は勿論一切の特權を享有しをることである、從つて彼等を中心として形成される社會が第一世のそれに比べて米化の色彩强くして白人社會と密接の交渉を保ちて布哇一般社會の有力なる分野たるべきは疑ひを容れない、大正十三年米國立法部は極端な排外移民法を制定し日本人の如きは明治四十一年以降許可され來れる家族、寫眞結婚者は一切入國を禁止され僅かに再渡航者と布哇出生者のみ除外されることになつた、其結果として布哇の日本人は日本との人事的聯絡を絶たれて今後は自主自營、布哇に現住せる同胞を以て日本人社會を維持するの外なきに至つた、此事實は第二世時代の出現を大に促進したやうである、市民權を有する第二世の大部分が成人して活躍する日、日本人社會は以前と全然一變せる內容と外觀を以て恒久的安定に到達するであらう。

第四章　日本人と教育

第一節　日英語教育

布哇の日本人子女は公立學校に於て英語を以て全課目の義務教育を受けて米國市民としての素地を作り更に同時に日本語學校に於て日本語を學びて日本人の特質を失はざらんとしてをる、日本語學校は公立學校放課後の一時間を利用し讀方、書方、綴方を授くるに止まり公立學校の補助機關たる積りで經營しをると雖も子女に取つては一種の二重教育たるを失はない、これよく議論の生ずる處なるも日本人子女は國籍は米國にあるとも社會的には矢張り日本人として差別的待遇を與へらる、此不利を補塡するには日本人として特殊方面に活動の機會を求めなくてはならぬ、その武器として一通りの日本語を習得するの必要あるは境遇の然らしむる當然の欲求として是認せねばならぬ、父兄が幾多の障碍に會しながら愛する子女のため飽まで日本語教授機關の存置に努力しつつある所以のものここにある。

第二節　日本語學校

明治十八年（一千八百八十五年）以來入國せる日本移民は十年を經ざるに三萬人近くの數に達し子女の增加は日本語學校の必要を痛感せしめた、明治二十九年基督教牧師奧村多喜衞は有志者の寄附と私費を割いてホノルル市ヌアヌ街ベレタニア街角の英語幼稚園の一室を借受けて一教師を得て三十名の兒童を收容した、これ布哇に於ける日本語學校の濫觴であつて此の學校こそは現在ヌアヌ街布哇中央學院の前身である、爾來生徒の增加、校舍の擴張に伴ひククヰ街を經て明治三十二年ヌアヌ街の現在場所に新築移轉したのである、布哇中央學院に次で生れたるを本願寺學園とする、本派本願寺が教化の一機關としてホノルル市フオート街に附屬日本語學校を設立せるは明治三十五年である、生徒激增のためバラマに分

校を置いたのは明治四十五年で現在のフォート學園とバラマ學園はそれである、日本人が漸く永住の腰を据へ社會的形體の整ふにつれ日本語學校は各島各地に設けられ明治四十年頃には日本人の住む處、日本語學校を見ざるなきの盛況を呈した、これら日本語學校は小學校程度のものにして社會的活動に要する一通りの日本語を授くるに充分ならざる憾あるを以て本派本願寺は明治四十年ホノルル市に布哇中學校、布哇高等女學校を創設し中等程度の授業を開始し次で布哇中央學院も中學部を設置し、淨土宗開教院も布哇女學校を新設した、其後各地に中等日本語學校の設立を見、小學程度の日本語學校中補習科、中學部を置くものを生じた、大正十三年（一千九百二十四年）の調査によれば布哇全島の日本語學校數は百三十五校（中學校を含む）、教員數三百五十五人、生徒數二萬一千五百〇三人となる、各島別にすれば、

島別	校數	教員數	生徒數
ホノルル	一五	九七	六、九〇九
オアフ島	二六	五八	三、四三三
ハワイ島	五三	一一一	五、七一九
マウイ島	二四	五六	三、三四七
カワイ島	一六	三二	二、〇七一
モロカイ島	一	一	二四
計	一三五	三五五	二一、五〇三

更に經營者によつて區別すれば

	校數	教員數	生徒數
本派本願寺附屬	二三	八五	五、四七六
淨土宗附屬	一二	三七	一、四五九
基督教附屬	一〇	一九	五六九
曹洞宗附屬	一	三	二四五
大谷派本願寺附屬	一	二	二〇九
獨立經營	八八	二〇九	一三、五四五
計	一三五	三五五	二一、五〇三

となる、其後連年生徒は增加一方にて校數の如きラナイ島の一校、其他數ヶ所に新設を見たるを以て現在にては百四十校に達したるべく生徒は二萬五千人以上を算するであらう。

第三節　教育界變遷

日本語學校の增加は統一機關の發生を促し統一機關によりて授業の改良を圖り公立學校との聯絡を保たんとする希望は期せずして明治三十九年のホノルル教育會、大正三年の日本語學校關係教育家會議となり大正四年の布哇教育會組織となつた、布哇教育會は第一の事業として教科書編纂に着手した、從來日本語學校は日本の國定教科書に添刪を施して使用したが風土並に社會狀態を異にする布哇に適せざるは勿論公立學校の課業に順應し短時間の授業を有効ならしむるには特別の教科書を編纂する必要あるは何人も感ずる處、此の事業は教育會の努力、伏見宮記念奬學會の援助により無事に完成し日本語授業に新生面を開くことになつた、これと前後して教學分離問題起り一時議論の沸騰を見る、宗教關係の學校は布教に利用さるる傾向あるが故に寺院教會より引離して父兄の直接支配下に移すを可とする分離論と、宗教關係の學校は何等の弊害あらず布哇の如き土地柄にありては經營の方便上、又た內容の充實を圖るにも却つて寺院教會の附屬を得策なりとする非分離論の二派に岐れて論爭に火花を散らしたが大なる波瀾も變化も起さず何等の決論に達せずして問題は終了を告げた、實際問題として教學分離は一利一害あり遽かに是非を斷ずべからず斯かる水掛論に耽るよりも寧ろ學校の實質的

價値を進めることに力を致すべきであらう。日本語學校の創生時代は漫然と日本内地の小學校を範として授業したが米國市民たるべき子女の將來、公立學校にて規定の義務英語教育を受けつつある事實を考察する時は徒らに舊套を趁ふべきでない時勢に刺戟されて當事者も父兄も大に顧みる處あり、日本語學校は單に日本語を授くる機關に過ぎざること、公立學校の義務教育に背馳せず却つて補助機關となりて兒童の保護善導に任ずるものなることを標榜し此の方針に向つて進むことになつた、教育會が組織され教科書を編纂したのもそれがためであり、教料目に大改廢を加へ授業時間を午前の公立學校開校前より午後の公立學校放課後に改むるなどの英斷は悉く此の配慮に基いたのである。

第四節　試訴事件顚末

然るに日本語學校が盛んとなり到る處公立學校と校舍を並べて咿唔の聲喧しき見るや米國人中これに對して反感と誤解を抱く者漸次に增加し日本語學校當事者が不斷に說明氷釋に努め來れるに拘はらず米國人の反日本語學校熱は次第に高調して遂に外國語學校取締問題となつて具體化した、米國人の或者は日本語學校は日本帝國主義を注入する處なりとし或者は排基督教佛教宣傳の機關なりと非難した、いづれも嗤ふべき誤解僻見に基くものなるも思慮ある米國人中公立學校に於ける米國主義の教育を傷くる虞あり、二重教育は兒童の身心に弊害ありとて憂慮する者を生じた、これに對して日本人は百方其然らざるを釋明し兒童の保護上有益の働きをなしつつあることを反覆力說して米國人の疑惑と誤解を釋くことに骨を折つた、折角の努力も効なくして大正八年（一千九百十九年）布哇縣會に外國語學校取締法案が提出され下院を通過したが幸ひ上院に於て握潰しとなつた、然るに翌年の臨時縣會に再び同樣の提案を見た、日本人は否決せしむべく必死の運動を試みたが大勢動かすべからず辛ふじて妥協の下に法案を多少緩和せしめたるのみにて遂に通過制定、大正十年（一千九百二十一年）より實施さるるに至つたのである、實施されたる外國語學校取締法の大要は外國語學校を縣教育局の監督支配下に置き、教員は英語にて檢定試驗を受くるを要し、教科課程、授業科目、教科書の決定權を縣教育局に與へ、違反者は輕罰に處すといふにある、日本人は妥協せる關係上此の取締法に服從したが翌年即ち大正十一年縣政府當事者は其權限を利用して日本語學校の學年短縮を企て大正十二年布哇縣會は更に苛酷なる外國語學校取締法修正案を可決し幼稚科及び第一學年、第二學年の廢止を强い外國語學校管理費に充つるため生徒一人に付年一弗の稅金を課するなど日本語學校の經營を脅かし存在の意義を失はしむる擧に出でたのである、玆に於てか外國語學校取締法は子弟の正當なる教育に無法の干涉をなすものにして米國憲法違反の惡法なれば宜しく試訴を起してこれを無効ならしむべしとの議論が日本人間に生じた、試訴は不可なきも米人の感情を害すれば他日犬糞的復讐をさるる惧あるを以て寧ろ此際隱忍すべしと論ずる者もあり輿論は二派に岐れたが父兄の大部分は試訴に賛成して大正十一年（一千九百二十二年）ホノルル合衆國地方裁判所に該法を無効とする試訴を提起し同時に該法の適用を一時停止するインジヤンクションの申請をなし大正十二年試訴賛成の學校當事者及び父兄は外國語學校試訴期成會を組織して試訴の目的を達成すべく努力することになつた、布哇縣政府の抗議あるしもインジヤンクションはホノルルにて許可され本訴は桑港なる第九合衆國控訴院に回附されたが大正十五年（一千九百二十六年）五月二十二日第九合衆國控訴院は『子弟に必要なる智識を授けんとする私立學校の存在に對し法律的干涉を加ふるは違法なり、子弟の教育は父兄の自由に屬して何人も此の自由を奪ふべきにあらず日本語學校の狀態を考察するに外國語學校取締法は憲法違反なり』との判決を下して原告の主張を認容し布哇縣の外國語學校取締法を無効なりとした、縣政府は華盛頓大審院の最終判決を仰ぐべく上告の手續きをしたが結局日本語學校の勝訴に歸するは疑ひなきが如くである、積年の日本語學校問題はここに終局を告げたが第二世日本人の教育方針は依然として研究すべき多くの疑問を有してをる。

第五節　子女教育方針

布哇の日本人は勞働者階級の者大部分を占めて教育程度は概して低い、父兄はこれを恥ぢてせめて子女には出來るだけ

の教育を施さんものと心掛け經濟の許す限り競つて上級の學校に通學せしめてをる、公立小學校生徒の半數は日本人であり、日本語學校も亦た同數の生徒を有する、ハイスクールや大學の在學者過半數は日本人であり米大陸にて大學教育を受けつつある者も亦た少しとしない。教育の普及進歩は大に慶すべきであるが其結果白襯衣勤務を好み土に親み汗に塗るる農業や筋肉勞働を厭忌する傾向を生じたるは注意すべき現象で社會の重大問題たるを失はない、何故ならば布哇は土地狹隘、人材の需要に限りあり、無際限に增加する專門技術家や白襯勤務者を容るる餘地なく現に既に供給過多の觀がある、布哇の狀態然りとすれば今後は布哇以外に人材消化の天地を求めざるを得ない、米大陸は舞臺廣大なれども有色系市民が白人系市民と均等の機會を與へらるるやは疑問であり、さりとて東洋方面に發展するには日本語並に東洋に關する知識に缺くことなきやを懸念さる、斯かる環境にある子女をして前途を多幸多福ならしむるには如何なる方針を以て教育すべきか、日本語學校問題は幸ひ解決に近きたるも此の問題は宿題として未だ何等の結論に達しない、恐らく難澁なる問題として當分は日本人社會を惱ますであらう。

第五章　日本人と宗教

第一節　基督教

移民と宗教とは密接な關係がある、歐米人は未開地に殖民する場合は第一に道路を築き第二に寺院を建てる、布哇は未開地にあらざるも日本人の住む處、必らず寺院が設けられた、基督教あり佛教あり神道あり、無味乾燥な移民地生活を慰藉し安心を與へ風教を維持するに宗教が如何に偉大の貢献をなせるやは今更ら呶々を要しない、布哇に於ける日本人の宗教史は明治十八年日本人が移民として正式に入國すると同時に始まる、明治十九年美以派の基督教牧師美山貫一が大陸よりホノルルに來りて福音を傳へ明治二十二年本派本願寺僧侶曜日蒼龍が日本より渡來して大悲大慈佛恩を說きたるを佛耶傳道の嚆矢とする。明治十九年（一千八百八十六年）九月米國加州美以監督教會は布哇に日本移民の入國を聞き牧師美山貫一を派遣した、美山はホノルルにありて傳道すること一年にして米大陸に歸還し清水泰三これに代る、八ヶ月を經て美山は日本より鵜飼猛、三谷雅之助の二牧師を同伴來布して布教に從事した、熱烈な信仰と眞摯な傳道は領事安藤太郎以下十二名の受洗者を出して大成功を收めた、受洗者を中心として共濟會なる團體生れ禁酒奬勵や慈善事業に盡力した、美山牧師は在留二ヶ年にして米大陸に去つたが布哇日本人基督教界の開拓者として記憶さるべき人物である、明治二十四年加州美以監督教會は折角開拓せる地盤を組合派の布哇傳道會社に讓りて布哇傳道を中止したが一部の信徒は殘壘を孤守して復活の日を俟つた、果然明治二十八年桑港より牧師松野菊太郎來りて美以教會を復興した、これ現在ハリス教會の前身である、爾來布哇の日本人美以教會は加州區に屬することになつた、當時は定まりたる會堂なく或は私宅、或は病院で隨時に集會を催ほし十人二十人の來集を見るに過ぎなかつたが篤信者のみの集會にて熱があり力があつた、明治二十一年布哇傳道會社は牧師岡部次郎を招いて、日本人間に傳道を開始した、當時ホノルルには美以派の地盤張れるを以て組合派の岡部は布哇島ヒロに於て布教に從事し明治二十五年京都同志社より奥田龜太郎、奥村禎太郎、神田重英、江口一民等を招致して大擧布教線の擴張に努めた、岡部等がホノルルに開設せる教會こそ現在ヌァヌ教會の前身である、岡部は布哇傳道會社日本人部長となり明治二十七年副牧師として奥村多喜衞を日本より迎へた、明治二十八年岡部の歸朝後奥村が其後任として組合派日本人部の主任となつた、明治三十五年組合派教會は自給自營を斷行して布哇傳道會社との關係を絶つた、奥村は會社との緣故上、同教會を去つて別にマキキ教會を創設した、美以派は日本人間に基督教信仰の扉を開き組合派は組織化せる傳道方法を以て教線の擴張に努めた、其後聖公會の加はるあり年を逐ふて教會は各地に設けられ信徒の數も增加した、現在組合派二十三ヶ所、美以派十ヶ所、聖公會四ヶ所の日本人教會がホノルルを首め各島各地に分布されてをる。

明治二十二年（一千八百八十九年）豊後の本派本願寺僧侶曜日蒼龍は佛法弘通のため渡來した、當時本山は外國傳道の準備も施設なきより曜日は獨力を以て布哇布教を志したのである、ホノルルを中心にマウイ、ハワイ、カワイ各島を一巡して佛恩を說いた、苦心の末ホノルルに布教所開設の計畫成り報告のため歸朝したが種々の故障に會して其儘日本に留つたので折角得た布教の端緒も中絶の已むなきに至つた、當時ヒロにありし移民監督官木村齋次は痛くこれを惜み同志と協力してヒロに佛教會堂を建立し西澤某を駐錫せしめた、踵いで蒲行、姫路、荻野等の僧侶が來布したが本山と何等の關係なく信徒を瞞着して私利を貪り宗教家の體面を瀆す行爲のみ多く眞面目に曜日の志を繼ぐ者はなかつた、明治三十年宮本惠順本山の命により視察のため渡來各島を訪問した、信徒は獨立自給の條件を以て開教使の駐在を熱望して已まざるを以て宮本は其旨本山に復命した、玆に於て本山は布哇開教の方針を決定しヒロの金安三壽、ホノルルの佐藤行信を開教使に任命し山田將爲を特派開教使として布哇に送つて布教を管理せしめ更に明治三十一年布教監督として里見法爾をホノルルに駐在せしめた、布哇に於ける正式の佛教傳道はこれを濫觴とする、里見等は過去十年間黙僧の荒せる地盤を整理して信徒を慰安しホノルル市フォート街に布教場新築の計畫を立て組織的に布教線の延長に努力した、里見監督は同年歸朝、翌三十二年開教使今村惠猛と共に歸來し同年布教場の建築成り、明治三十三年里見監督歸朝今村開教使其後を襲いで監督に任ぜられた、爾來本願寺の教勢は隆々として昂り本願寺別院として法人教團となりフォート街大伽藍の建立となり、婦人會、青年會、日曜學校等の附屬機關を完備し近年英語傳道を開始して外人の開教使をも置き第二世日本人教化のため青年教團をも設けた、各島に四十ケ所の布教場を有し事業として二十三の日本語學校をも經營して教育界に貢献し今や布哇佛教の中心たる觀を呈してをる、本派本願寺の今日あるは今村監督首め當事者の熱心なる傳道と苦心經營の賜による勿論なるも布哇在住日本人の大部分が中國、九州等眞宗と密接の關係ある地方出身なること與つて力がある。明治二十七年（一千八百九十四年）東京淨土宗關係者の間に成れる布哇宣教會より松尾定諦を派遣して布哇を視察せしめ次で岡部學應を特派して開教の準備に着手した、これ布哇に於ける淨土宗開教の淵源とする、岡部は各島を巡察しハワイ島ハマクア、パアウハウに教會堂を設けて布教を開始した、明治三十一年八壽田大定、田中摩訶衍の兩開教使來り明治三十二年淨土宗本山は朝鮮臺灣と同じく布哇を開教區域となし明治三十三年伊藤圓定其他數名の開教使を派遣して布哇島の布教網を完成せしめ同三十六年開教使長として淸水信順を送つた、明治三十八年伊藤圓定はオアフ島に移りホノルルにありて布教に從事し明治四十年ホノルル市サウス街に伽藍を新築した、明治四十二年淸水使長歸朝するや伊藤圓定後任となり布哇島よりホノルルに淨土宗開教本部を移し婦人會、青年會等の附屬團體を組織し事業の一部として布哇女學校を創設し教學二途に亘つて大に活動した、爾來順調に發展し現に各島に十六ケ所の布教場と十二の日本語學校を擁して佛教界に雄視してをる、淨土宗が歷史古く多くの信徒を控へながら本派本願寺に比べて教勢不振の狀態にあるは最初首都ホノルルを度外視してハワイ島の布教に全力を傾倒せしこと統一機關の運用拙きためと見らる、開教使長は伊藤圓定、立川眞教を經て最近井上照眞が就任した。曹洞宗の布教は明治三十六年備後の河原仙英本山より在留邦人慰問使として布哇に派遣されたるに創まる、同三十七年管良雲來り平井隆機、植岡祖曉來援して布教線を張り大正二年磯部峯仙駐在を命ぜられ曹洞宗假別院をホノルルに設け大正六年ヌアヌ街に別院伽藍を新築移轉して今日に至る、現任監督は駒形善教にして別院に屬する青年會館を有し婦人會、青年會其他の所屬團體を操縱し各島に八ケ所の布教場と一の日本語學校を支配してをる、本願寺、淨土宗に比べて日淺きも鋭意教勢の發展に努めて活氣がある。日蓮宗は曹洞宗より古きこと三年、明治三十三年高木行運本山より派遣されて布教を開始した、明治三十五年ハワイ島カウに教會堂を建立し明治四十五年ホノルル市リリハ街に假布教院を設置し更にスクール街に伽藍を造營して移轉した、村雲婦人會布哇支部其他の附屬團體あり、マウイ島プウネネ、ハワイ島カウバハラの二ケ所に布教場を有する、現任監督は末藤孝辨である。眞言宗は所謂御大師樣として半俗半僧の徒が古くから堂宇を建てて奉仕せるも加持祈禱を事として非難の聲あり大正三年醍醐派本山布教部長關榮覺取締りのために渡來しホノルル市キング街に假別院を設け系統不明なる各地の御大師堂をして高野派、醍醐派の何れかに從屬せしめ僧侶の資格を決定し布教方法を統一して眞言宗の面目を一新するに至つた、大正六年ホノルル市セリダン街に別院を新築して移轉以て

今日に至る、關監督歸朝後龜山弘應來任鋭意教務の刷新と教勢の進展を圖つてをる、各島に二十三ヶ所の布教場、堂宇を統轄してをる。大谷派本願寺の開教は明治三十六年開教使蓮靜がカワイ島マカウエリに布教場を設けしを最初とする、大正五年大谷派本山教學部長關根仁應ホノルルに東本願寺假別院を設け大正十年パラマの新建物に移り同時に別院に昇格し泉原寛海監督に任ぜらる、カワイ島マカウエリ、ワイメア、ホノルル市スミス街、同モイリリに布教場を有し數個の從屬團體を運用し教勢の伸展に力を濺ぎつつある、最近深奥九十九が監督として就任した。布哇には此外ホノルル市に天臺宗寺院が一ヶ所ある。

第三節　神道

明治三十七年ホノルルの敬神家相寄りてアアラ、レンに社祠を建立して天照皇大神を奉祀した、これ布哇に於ける神社の嚆矢である、大正元年神宮奉齋會の議員禮部の川崎利太郎來布して社司となり正式に奉齋會布哇部を組織し本部の認可を得て天照皇大神宮靈殿を鎭祭するに至つた、大正七年リリハ街に神殿、社務所を造營して遷座し同時に財團法人組織となし神道本院より神道布哇別院として允許され川崎利太郎社司兼教會所長として活動、祭祀、布教に從事してをる。明治三十八年宮王勝良日本より來りてホノルル市ベレタニア街に出雲大社を建立し大社教の布教を開始した、明治四十年信徒の助力を得てキング街パラマの地を相し教會神殿を造營して遷座して神威の發揚に努め教勢大に昂る、明治四十二年大社教管長より大社教布哇教會所の名稱を授けられて御分靈を奉祀した、大正七年布哇分院に昇格し同時に財團法人の教團組織となした、大社教にありては海外唯一の分院である、分院長宮王勝良は數個の團體、二ヶ所の布教所、三ヶ所の講社を司宰して熱心布教に從事してをる。明治四十四年清正公歸依者の懇請により肥後の加藤神社の分靈を迎へて奉祀されたるを加藤神社とする、明治四十五年ホノルル市ベレタニア街に神殿を建立して鎭座式を執行した、榮木鎭次郎社司として神道青年會を組織して布教に力を濺ぐ、神道には此他ホノルル及び各島に金刀比羅神社あり、稻荷神社、胡子神社、嚴島三鬼神等あるも其多くは氏神として祭祀さるるに過きず、宗教として傳道に從事せるは出雲大社、神道教、加藤神社を主とする。

第四節　宗教概觀

布哇に於ける日本人の宗教を概觀するに最も多數の信徒を擁し比較的完備せる布教機關を有するは佛教を以て最とする、これ日本人の大部分が傳統的に日本よりの佛教信者なることに主因する、佛教各派はそれぞれ日本內地の本山と聯絡し行政的には其支配下にあるも經濟は全然獨立自給にして一切信者の喜捨に依るが故に布教に關する方針や施設方法は或程度まで自由に決定處理することが出來る、從つて布哇の佛教は教理の研究は內地に劣るも時代に順應し民衆化せる宗教として日常生活に喰込む點に於ては日本內地に勝るものがある、布哇にあつては初期の佛教は布教精神、布教方法等悉く日本のそれを踏襲せるが故に米領土として米國人の誤解を招き易く又た信者を寄附攻となし經濟的に疲弊せしむる傾向ありしも布教僧侶の人格向上と信者の覺醒に伴ひ此弊は漸次に芟除せられ米國人の反感も歲と共に薄らぎつつあり、極少數ながら米國人の歸依者と佛教研究者を出すやうになつた、信仰方面を別とするも布教僧侶は地方日本人社會の指導者、斡旋者として奉仕し又た日本語學校を經營して邦人子弟の薫陶、哺育に從ふなど社會的貢獻大なるものがある、これを要するに布哇の佛教傳道は部分的に詮議すれば批難の點あるも大體に於て成功といふべく布哇の文化に意義ある働きをなしたといつて差支ない、唯だ問題は今後第二世日本人に對する教化を如何にするやにある、本派本願寺の如きは米國人間に布教を試み第二世日本人教化に着眼して其機關を設定し英語布教師の養成をなしつつあり、其他の各宗も同樣の方針で適當な方法を講じてをる、普遍的に存在する佛教關係の青年會の如き又た青少年子女教化の補助機關と見るべきである、第一世日本人凋落後第二世日本人に對して佛教が如何の教化能率を示すやは布哇佛教の消長を決する試金石である。基督教は信徒少きも其信仰は比較的に堅固である、教會は米國各派の傳道會社に屬し經濟的補助を受けて其支配下に置かる、經濟的維持

に苦勞少き代り一種の拘束を受け日本人間の傳道に不利の結果を來す場合少しとしない、殊に初期にありては敎役者中往々にして極端な外國崇拜に陷り信徒の反感を惹起し人心を敎會より遠ざからしむる愚を演ずる者あり、努力の割合に成績の擧らざる憾がある、しかしながら牧師、傳道師の大部分は英語に通じ日米人間の意志疏通を進むる仲介者として社會的寄與の大なるものあり、地方邦人社會の指導者として先覺者としての貢獻は佛敎僧侶と同じくこれを認めなくてはならぬ、惟ふに基督敎は第一世日本人よりも第二世日本人に對つてよく使命を果し得る可能性を有するではなからうか、何故ならば米化せる第二世日本人は基督敎徒たるべき多分の適應性を持つからである。布哇の神道は傳道すべき宗敎としてよりも祖先祭祀の機關として特別の立場にある、佛耶の信徒と雖も共通的に祖先崇拜、敬神の念を有する、神道は此の特殊の意義に活き過去に於けるが如く將來も存在の價値を失はぬであらう。

第六章　日本人と産業

第一節　日本人の立場

布哇の産業は白人の資本と東洋人の勞力によつて今日の發達と隆盛を來した、換言すれば英語國人の資本と日本語國人の勞力の結合が今日の布哇産業を産んだのである、それだけ布哇の産業に對して日本人は偉大の貢献がある、しかし産業界に於ける日本人の立場は勞力供給者に止まつて資本家、經營者としての存在は極めて微弱である、否な日本人が資本を提供しても布哇の富源の大部分は既に少數白人の掌中にあるが故に企業、經營の餘地は幾んどなしといふも過言でない、唯だ僅かに白人の捨てて顧みざる遺利を拾ふか、白人のなし能はざる種類の事業を執るか二途其一を撰ぶ外はないのである、日本人が布哇に一社會をなしたのは明治十八年であるが甘蔗耕地の契約勞働者として入國したる悲しさは他を顧みる餘裕も遑もなかつた、三年の契約期を終る頃小さな貯金を資本に獨立事業に轉ずる者を生じたが日本人相手の雜貨商、雜業、然らずんば小農業等に過ぎなかつた、明治三十三年契約移民が禁止され自由移民となつてから獨立業者は漸次に增加し商業の如き却々旺んとなり商人階級は經濟的に社會の中堅たる觀を呈した、明治四十二年日本移民の入國途絶えた當時にあつては各種商業、漁業土木建築業、洋服裁縫業、理髮業、各種農業、白人家庭勤務、食料品製造、製作工場其他あらゆる職業に亘つて日本人の發展を見た、しかし經濟的實權は甘蔗耕地就働者の手にあり、他の職業者は直接間接それによつて衣食し事業を維持したのである、爾來甘蔗耕地勞働より獨立事業に轉ずる者逐年多くなり狀態は徐々に轉化したが日本人の如何なる事業も白人に對抗し白人を凌駕するものは極めて少く、商業にせよ、農業にせよ、工業にせよその大部分は白人の資本と産業に左右され、支配されてをる。

第二節　農業

甘蔗耕地の契約勞働を終へた日本人の大部分は其儘耕地に留つたが一部分は他に轉業した、商業を始むる者、雜業に從ふ者あり職業の撰擇は一樣でないが日本よりの經驗を利用して農業に從事する者も可なり多かつた、數英町、數十英町の土地を租借又は購入して甘蔗穀類、野菜類其他の作物を耕作栽培したのが布哇に於ける日本人農業の端緒である、農業の收得は大ならざれども甘蔗耕地の低廉なる賃銀よりは遙か優る處あり、家族の增加につれ耕地勞働より獨立農業に轉ずる者の多くなるは自然の數である、日本人農業者は各島各地に散在し都會附近にあつては蔬菜、花卉を作り地方にありては特殊の農作に從事してをる、最近の調査によれば布哇各島を通じて農業者の數は一千五百戸を數へ一萬近くの人口を包容し其生産額は數百弗に上り甘蔗耕地勞働者の賃銀收入、商人の所得のそれに匹敵して日本人經濟の主要な財源となつてをる、日本人の農業中特筆すべきをハワイ島コナの珈琲栽培業とする、コナの珈琲栽培業は日本人の獨占といふも不可なく戸數五百戸、人口二千の從業者あり五千英町より每年五六百封度を産出して砂糖、鳳梨に亞ぐ布哇の名産たらしめてをる、コナ産珈琲は品質優良世界一の評あり前途有望である。カワイ島に於ける米作業も日本人農業の主なるものの一たる

を失はない、同島ハナレイ、ワイメアは布哇第一の米產地で少數の支那人を除いて殆んど日本人が斯業を壟斷してゐる。砂糖に比肩する布哇の重要產物たる鳳梨業と日本人の關係は最も深い、鳳梨栽培業は白人の資本で經營されをるが栽培收穫の勞苦に當れるは日本人である、大正二年頃日本人間に鳳梨企業熱高潮し一時オアフ島のみにても資金七十萬弗、栽培面積五千英町に達し白人を壓倒せんばかりの盛況を呈したが罐詰工場を有せざる弱點に乘ぜられ生果非買同盟に逢ひ一溜りもなく崩壞して破產者續出、栽培地の大部分を擧げて白人の手に委ねざるを得ざる慘狀に陷つた、大正八九年の交鳳梨熱再燃しマウイ島ハイク、パウエラ地方の如き狂熱的企業を見、同業者激增したが間もなく相場暴落のため大部分は失敗に終り徒らに經濟界を攪亂したに過ぎなかつた、爾來鳳梨栽培業は白人會社の獨占經營に歸したがオアフ島ワヒアワ、カフク地方、マウイ島ハイク、パウエラ、マカワオ、ホノルア地方、カワイ島ラワイ、カパア地方には今尙ほ鳳梨園を經營せる日本人が少なくない、數十英町の土地を租借又は所有して甘蔗栽培に從事する者ハワイ島に多い、同業者の利益を進めるため組合も組織されてをる、これを要するに日本人農業中個人的ながら大規模なるを鳳梨、米、甘蔗、珈琲栽培業とし從業者の多數なるを蔬菜栽培業とする、布哇の日本人は農園勞働者として糖業、鳳梨業を支持する外に獨立農業者として珈琲、米、甘蔗、鳳梨を產出し且つ新鮮な野菜類を農作供給しつつあるのである。

第三節　商業

布哇日本人の商業は明治十八年移民の來住と同時に創まる、當初は其數極めて少なく商法も幼稚で取引も僅少であつたが人口を增し購買力の進むにつれ商業も亦た發達を遂け甘蔗耕地に日本人勞働者の滿ちたる明治四十年前後は其絕頂期ともいふべく日本食料雜貨品の需要盛んにして其輸入販賣は悉く日本人によつてなされた、ホノルルに直輸入商軒を並べ地方地方には雜貨商店雨後の筍然として續出し商人の天下たる觀あり、商業家の團體、組合は日本人社會を左右する勢力を有してをつた、然るに其後日本人生活の變遷による日本品需要の減少、被扶養者增加に伴ふ購買力の低下、放漫なる懸賣習慣の齎らせる貸金回收難、同業者の過多及び其他の原因で日本人商界は大なる危機に瀕したが、商取引の改善、西洋品の取扱ひ、外國人顧客の吸集、經費節減、合資合併等の英斷改革で辛ふじて難關を切拔けることが出來た、一時破產閉店するもの相踵ぎ自然淘汰を經て商界は却つて健實なる發展の道程に入れるものと認めてよからう、大正十四年（一千九百二十五年）中日本より布哇に輸入された商品の數量金額を示せば左の如し。

品目	數量	金額
日本米	一五七、六三三袋	二、四八八、七七五圓
味噌	一二、六五五樽	五八、七〇五
醬油	九一、四三三樽	五六六、六三四
豆類	三二、八七六袋	三一五、九一四
茶	三、一八八函	一五〇、二四八
罐詰	三七、四五九函	七〇七、六二五
乾燥野菜	五、七一五函	一三八、四九七
呉服反物	四、一一二函	七五〇、八九八
陶磁器	三、二三〇函	七六、二四八
乾魚	二〇、六三四函	六九〇、八四五
莚	五、六四六丸	七二、六六五
漬物類	一六、九九五樽	一二三、一二六
履物類	三、七八二函	二一四、〇四七
化粧品	一、一二〇函	七〇、九六六

食料油	七、六二二函	一五一、四四九
セメント	四三、二〇〇袋	四一、五九〇
フィルム	六卷	三、九三〇
美術品	一三個	一七、四六四
其他雜貨	四一、五七九	一、二八七、四四六
計		七、九二七、〇七二

明治二十三年に於て日本品輸入額僅か一萬二千弗に過ぎざりしものが明治三十二年には六十四萬七千弗となり、大正元年には二百四十一萬弗に激增し大正九年には四百七十七萬弗となりて日本貿易の新記錄を作るに至つた、大正十年より日本米輸出禁止となり輸入額に激減を來したが兩三年來輸入復活し大正十四年の如き百餘萬弗の輸入高を示してをる、これら日本品の大部分は日本人商人によつて輸入販賣されてをる、以て日本人商界の現況を知り得るであらう。

第四節　漁業

布哇の漁業は布哇人の幼稚なる磯漁、少數支那人の養魚池經營の外殆んど日本人の獨占にかかる、日本人とて最初は甘蔗耕地勞働より轉職せる者が不完全なる方法にて小規模の漁撈をなせるに過ぎなかつたが、魚類の需要增加に伴ひ漁業者も多くなり漁撈方法も進歩して來た。殊に和歌山、山口、廣島諸縣下に於ける漁夫が續々渡來してより漁業は大に發達して獨り日本人間のみならず布哇の重要產業の一たるに至つた、昔は磯漁、近海漁撈を主としたが魚類の減少につれ大型發動機漁船を以てする遠洋漁業が盛んとなり今日にては大量漁獲は遠洋出漁に限るやうになつた。布哇の漁業に三種あり養魚池より小魚を獲るもの、近海にて磯魚を漁るもの、遠洋にて大魚を釣るものこれである、日本人は其いづれにも從事して布哇各島の江灣日本人漁夫を見ざるなき有樣であるが大規模なるは遠洋漁業を第一とする。日本人の漁業獨占を抑制するため白人は屢々白人漁夫の輸入を試むるも、板一枚奈落の底を恐れず方數百哩の海洋を縱橫に馳驅する勇氣と經驗は日本人以外に求むべくもなく白人の計畫は悉く失敗に歸したのである、漁市場に現はるる漁類は鰤、鰺、ウルワ、鮪、鰹、鯛、章魚、烏賊、カマス等數十種に上る、鰹漁は特別の技倆と經驗を要する代り最も利益あり和歌山縣出身者の專有事業たる觀がある、水揚せる漁類は幾んど全部は冷藏庫に保存して生の儘市場に賣捌かれるが鰹のみは大量漁獲があるので大部分は鰹節に製造される、布哇產鰹節は品質佳良にして日本品に劣らず日本品を壓倒して布哇は勿論、米大陸にも販路を有する、ホノルルに鰹罐詰會社あり季節季節に製造するが大陸の鮭、鰯罐詰のそれに敵する能はず大なる發展を見ない、ホノルルに布哇水產會社、太平洋漁業會社、ホノルル漁業會社の三會社ありハワイ島ヒロに布哇島漁業會社、布哇水產會社の二會社あり、いづれも日本人の組織せる株式會社にして五會社は二百隻以上の發動機漁船を支配し其他マウイ、カワイ、オアフ、ハワイ各島に個人又は組合所有にかかる發動機漁船百隻を超ゆ、これら發動機漁船は四馬力以上八十馬力の動力を有し小型なるは近海に大型なるは遠洋に出漁する、大型發動機船の航續力は一千哩以上にしてよく外洋數泊に堪え一航海數千弗の收獲を擧ぐることがある、布哇各島に於て日本人漁夫が水揚する魚類は一ヶ年百萬弗に達すべく一千人の漁業家、三千の家族はこれによつて衣食してをる、海洋の寶庫は無盡藏にして果つることなし、日本人が此の有利な事業を壟斷しをるは心强しとせねばならぬ。

第五節　職業種別表

布哇の日本人が如何なる職業に從事しつつありや、帝國總領事館調査、外務省發表の統計によりて左にこれを揭げる。

布哇日本人職業種別表

帝國總領事館調査
大正十五年六月現在

職業別	地方別	ホノルル 本業者	ホノルル 家族	オアフ島 本業者	オアフ島 家族	ハワイ島 本業者	ハワイ島 家族	マウイ島 本業者	マウイ島 家族	カワイ島 本業者	カワイ島 家族	合計 本業者	合計 家族
本邦内地人計	男	九五一九	九八九九	六〇三四	六四三九	九三三六	九八五二	五四七三	五七四一	三九一五	三八八六	三四二八七	三五八一七
	女	二四六七	一四〇三九	一一〇四	八三八四	一三一四	一四八四一	一二六〇	七一六三	一七〇六	四七〇九	七八五一	四九一二六
本邦内地人合計			三九九二四		二九五一		三五三三三		一九六三七		一四二二六		一二七〇七一
朝鮮人	男		一五九三		五一〇		一二三八		四七四		四四七		四二六二
	女		七二〇		二四七		五三六		二三四		二五九		一九九六
臺灣籍民	男		三八二三七		二二七〇八		三七一〇七		二〇三四五		一四九三一		一三三三二九
	女												
總計													
前年同期ト比較		×増	四九九	×減	三一五	×減	三五五	×減	二九五	×減	一八七	×減	一六七九
戸數			八三七〇		五七二三		九七一三		五六九〇		四五〇二		三三九〇七
農耕、園藝、畜産	男	二二三	五七〇	二〇八	四四九	二三八一	二六九五	四一〇	五三二	二四五	五〇九	三三八八	四九五五
	女	六三二	六二四	八	六二四	四三八	四三八三	三	六五七	一〇	四八六	一〇四	六七八一
同勞働者	男	四三一	五〇一	三三五一	三七三九	三九〇七	二九二九	二九二三	二九二七	二三一八	一八一〇	一二七一八	一二九〇六
	女		八〇五	六〇二	四四一七	六七七	五〇三	九四四	三四八四	一四一五	一九八八	三三五二	一六五一〇
漁業、製鹽業	男	二〇	二四	三	六	一八	三三	五	三	四	三	一四	五八
	女		三五		五		二二		二		二		八四
同勞働者	男	三三二	二六二	一〇二	八二	一六八	一二六	六七	三八	七一	六八	七四〇	五七六
	女		四三一		一二五		二六〇		八〇		二一		一〇〇七
金屬工業	男	一三二	一二二	一〇	三五	五〇	四二	三一	三三	一五	二八	二四八	二五九
	女		二〇〇		四一		七八		五〇		三七		四〇六
洗張、染色、洗濯業	男	一五八	一五八	三三	五一	三〇	四五	一五	三七	二八	五〇	二二七	三四一
	女	三三	三三	三	三七	四〇	四五	三	三〇	三	四八	一九六	三八二
飲食料品、嗜好品製造	男	一五	二五	六	一四	八	二二	二七	三八	一八	二六	二九	五一
	女		三一		一五		一〇		一一		九		五六
被服、身廻リ品製造	男	一三〇	一四七	三九	四九	二八	五一	二七	三八	二八	三九	二四一	三三四
	女	二二三	二〇一	三〇	五九	三〇	六八	二二	四一	一二	二八	二二五	四〇八
土木建築業	男	六五	六八	一八	三一	三九	二七	二五	三七	三	二八	一五〇	一九〇
	女		一〇五		四五		六五		五一		二八		二四九
大工、左官、石工、ペンキ職	男	二三六二	二三九七	一七一	一九八	四七七	四五八	二二一	二二一	一六五	二八一	二四八	二四八九
	女		二四二二		三〇		六八八		三七		二八		四〇四〇
製版、印刷、製本業	男	一八	五〇		五九	一	二	三	二	四	二	一九	五二
	女		六一				三						六四
學藝、娯樂、裝飾品製造	男	三三	二四		二三		二八		二七		一八二		二三
	女	八	一四		八		三八		三一		二八		二四
工場勞働者	男	七二一	六五八	六二七	四二七	二八八	二七三	三二一	三七二	一八二	二七五	二二四九	一八六六
	女	一四一	九二七	二二二	六八八	一二七	三八	三一	五二七	二八	二七五	五二九	二七三五
物品販賣業	男	四八	二五六五	一五	五九〇	三七	九一	八	五九三	二〇	四二一	一八〇一	一八〇一
	女		五										六
貿易商（店員社員ヲ含マズ）	男	八	一三		八	一	二	九	一一	四	五	七一	一〇
	女											一三	一四
媒介、周旋業	男	五五	六四	一一	八八	一〇	二四	九	一一	四	八	一二	八八
	女	三	一〇八		一六		二七		一六				一七
物品貸及預リ業	男	二二五	二二五	一〇	一八	一八	二九	八	二	三	一六	一七七	一六六
	女	二七	二三五		二八		一五		八		八	三三	二八八
會社員、銀行員、商店員、事務員	男	一〇二	九二〇	一四九	九〇	三八	三八	二二〇	二四〇	一七一	二二八	一八八六	一八四〇
	女	三二二	一七一	二二	一七一	四九	六二	四一	三七二	三二	四九八	四六九	三三五一
旅宿、料理、貸席及藝妓業、遊戲場、興業場	男	一二三	一二三	一三	一三	六〇	三八	一一	二〇	一〇	一四	一八三	二三九
	女	四	二四一	一	二四	八七	三三	二二	二二	二二	二二	二二	五九七
藝妓、娼妓、酌婦	男	一	一七		三四		五		八		五		四
	女	五三					八		五		九		二四
其他	男												
	女												

理髮、髮結、浴場業	男	一三六	一四一	二五	二九	四七	五三	三	二七	三	二七	二六三	二九六
	女	七三	二三一	三	三三	八	八四	七	八〇	八	四一	一八	四六九
其他ノ商業	男	五三	一七五	一七	二四	二七	三〇	二	二六	七	一八	一三四	一七五
	女	一	一三五	一	三	二	四三		三	二	二六	六	二六九
郵便、電信、電話從業者	男	九	五	七	八	八	二					二四	一五
	女		一〇		一五		九						三四
鐵道勞働者	男	八九	一三	一二八	九七	三八	九二	五五	二九	五九	四七	四四九	三八九
	女		四一		一七三		一三八		七三		八八		六〇二
車馬業、自働車運轉手	男	六八九	六九九	三二八	一九七	二七二	二八一	一九五	一九九	一六〇	一八一	一五三四	一五五七
	女		三七五		三一	三	四七七		二五五		一七五	三	二五〇三
運搬夫、仲仕等	男	一四七	一五三	七〇	七八	七七	一三一	五〇	六三	三	二八	三六六	四四一
	女		二七三		一〇三		一四九		八八		三九		六五〇
官公吏、雇傭	男	一六	三六									一六	三六
	女	二	三四									二	三四
宗教關係者	男	三八	四五	一〇	二五	二〇	三一	八	一三	六	一七	八二	一三〇
	女	二	四四	二	二九		五		一七		一八	四	一六二
教育關係者	男	三七	三九	二八	二七	四九	四五	二三	三八	二三	一三	一六九	一七三
	女	四〇	四八	五	二〇	三三	五八	七	四九	九	二三	一三四	一九七
醫務ニ關スル業	男	六二	八八	九	三	三	一八	七	一六	四	一三	九四	一五六
	女	四五	一三三	七	一五	一一	二四	六	一八	七	一七	七六	一九七
法務ニ關スル業	男	一三	三三	一	一	四	七	一	二			二九	三一
	女		四〇				三		一				五四
新聞雜誌記者、通信員著述者	男	四一	三五			八	七	五	三	三	二	五七	四七
	女		五七				五		四		四		八〇
畫家、彫刻家、音樂家、寫眞師	男	三	一七	四	二	九	一	三	二	二	二	二九	三四
	女		一九		一〇		一八		四		三		五六
其他ノ有業者	男	七九	一〇四	六九	一〇一	一五	七五	二八	三七	三五	七〇	三三六	三八七
	女	二四	一三一	八	一三二	一三	一二七	五一	四七	二七	七二	一四七	四七九

其他ノ勞働者	男	一二九一	一三三三	一七九	一三九	一三九	三三	二七九	一六一	一五四	四〇	三二四四	一五九四
	女	六九	一三六	九	一三五	一三五	三三	一〇	五五	一〇	七一	六五九	一五二一
家事被傭人	男	一〇六八	一〇八八	一三五	六九	六九	一二一	九九	一〇二	七七	五一	一四八四	一四三一
	女	八二三	一三八九	一二八	八一	八一	一三三	一〇一	一〇五	八八	八九	一三六七	一六八六

特別附錄

在亞米利加合衆國帝國外交官

華府帝國大使館歷代大公使

任官	就任年月	氏名
少辨務使	明治三年十月	森有禮
代理公使	同五年十月	森有禮
臨時代理公使	同六年七月	高木三郎
臨時代理公使	同六年九月	矢野次郎
特命全權公使	同七年十一月	吉田清成
臨時代理公使	同十一年十二月	吉田二郎
特命全權公使	同十三年五月	吉田清成
臨時代理公使	同十四年十二月	高平小五郎
特命全權公使	同十五年十月	寺島宗則
臨時代理公使	同十六年十月	内藤類次郎
特命全權公使	同十七年九月	九鬼隆一
臨時代理公使	同二十年十月	赤羽四郎
特命全權公使	同二十一年六月	陸奥宗光
臨時代理公使	同二十二年十二月	佐藤愛麿
特命全權公使	同二十四年一月	建野鄕三
臨時代理公使	同二十七年七月	宮岡恒次郎
特命全權公使	同二十七年八月	栗野慎一郎
特命全權公使	同二十九年六月	星亨
臨時代理公使	同三十一年七月	中川恒次郎
特命全權公使	同三十一年十一月	小村壽太郎
臨時代理公使	同三十三年五月	鍋島桂次郎
特命全權公使	同三十三年七月	高平小五郎
臨時代理公使	同三十八年十二月	日置益

明治三十九年一月大使館に昇格す

臨時代理大使	明治三十九年一月	日置益
特命全權大使	同三十九年四月	青木周藏
臨時代理大使	同四十年十二月	宮岡恒五郎
特命全權大使	同四十一年二月	高平小五郎
臨時代理大使	同四十二年八月	松井慶四郎
特命全權大使	同四十二年十二月	内田康哉
臨時代理大使	同四十四年八月	埴原正直

特命全權大使	同 四十五年二月	珍田捨己
臨時代理大使	大正五年七月	田中都吉
特命全權大使	同 五年十月	佐藤愛麿
臨時代理大使	同 七年一月	田中都吉
特命全權大使	同 七年四月	石井菊次郎
臨時代理大使	同 八年六月	出淵勝次
特命全權大使	同 八年十一月	幣原喜重郎
臨時代理大使	同 十一年三月	佐分利貞男
特命全權大使	同 十二年二月	埴原正直
臨時代理大使	同 十三年七月	吉田伊三郎
特命全權大使	同 十四年三月	松平恒雄

ホノルル帝國總領事館歴代領事

任官	就任年月	氏名
日本領事代理心得	明治八年十一月	ゼ、ビ、デイクソン
日本貿易事務官代理	同 十年十一月	ゼ、デイ、ブルワー
日本貿易事務官代理	同 十三年九月	ゼ、オー、カツカー
領事	明治十八年一月	中村治助

明治十八年總領事館に昇格す

總領事	明治十九年二月	安藤太郎
總領事代理	同 二十二年十二月	鳥居忠文
總領事代理	同 二十三年五月	正木退藏
總領事	同 二十四年六月	正木退藏
總領事	同 二十五年十一月	藤井三郎
總領事事務代理	同 二十七年十一月	成田五郎
總領事事務代理	同 二十八年一月	清水精三郎
總領事	同 二十八年十一月	島村久

明治三十年四月總領事館を公使館に改む、但し翌年總領事館に復す

辨理公使	明治三十年四月	島村久
事務代理	同 三十一年七月	平井深造
總領事代理	同 三十一年九月	齋藤幹
總領事事務代理	同 三十五年八月	岡部三郎
總領事	同 三十六年三月	齋藤幹
總領事事務代理	同 三十八年十二月	松原一雄
總領事	同 三十九年九月	齋藤幹
總領事事務代理	同 四十一年八月	阿部嘉八
總領事	同 四十一年十月	上野專一

總領事代理	同 四十五年五月	森安三郎
總領事代理	大正一年十月	來栖三郎
總領事	同 一年十月	永瀧久吉
總領事務代理	同 二年十二月	原田明達
總領事代理	同 二年十二月	有田八郎
總領事	同 五年四月	諸井六郎
總領事代理	同 八年八月	古谷榮一
總領事	同 九年七月	矢田長之助
總領事代理	同 十一年二月	內藤啓三
總領事	同 十一年三月	山崎馨一
總領事代理	同 十四年一月	竹內駒治
總領事代理	同 十四年四月	吉田丹一郎
總領事	同 十四年六月	青木新
總領事代理	同 十五年七月	竹內駒治
總領事	同 十五年七月	桑島主計

邦曆西曆年代對照表

西曆	邦曆	西曆	邦曆	西曆	邦曆
1927	昭和 二	1888	明治二一	1849	同 二
1926	昭和元(大正一五)	1887	同 二〇	1848	嘉永元(弘化五)
1925	大正一四	1886	同 一九	1847	弘化 四
1924	同 一三	1885	同 一八	1846	同 三
1923	同 一二	1884	同 一七	1845	同 二
1922	同 一一	1883	同 一六	1844	同 元(天保一五)
1921	同 一〇	1882	同 一五	1843	天保一四
1920	同 九	1881	同 一四	1842	同 一三
1919	同 八	1880	同 一三	1841	同 一二
1918	同 七	1879	同 一二	1840	同 一一
1917	同 六	1878	同 一一	1839	同 一〇
1916	同 五	1877	同 一〇	1838	同 九
1915	同 四	1876	同 九	1837	同 八
1914	同 三	1875	同 八	1836	同 七
1913	同 二	1874	同 七	1835	同 六
1912	大正元(明治四五)	1873	同 六	1834	同 五
1911	明治四四	1872	同 五	1833	同 四
1910	同 四三	1871	同 四	1832	同 三
1909	同 四二	1870	同 三	1831	同 二
1908	同 四一	1869	同 二	1830	天保元(文政一三)
1907	同 四〇	1868	明治元(慶應四)	1829	文政一二
1906	同 三九	1867	慶應 三	1828	同 一一
1905	同 三八	1866	同 二	1827	同 一〇
1904	同 三七	1865	慶應元(元治二)	1826	同 九
1903	同 三六	1864	元治元(文久四)	1825	同 八
1902	同 三五	1863	文久 三	1824	同 七
1901	同 三四	1862	同 二	1823	同 六
1900	同 三三	1861	文久元(萬延二)	1822	同 五
1899	同 三二	1860	萬延元(安政七)	1821	同 四
1898	同 三一	1859	安政 六	1820	同 三
1897	同 三〇	1858	同 五	1819	同 二
1896	同 二九	1857	同 四	1818	文政元(文化一五)
1895	同 二八	1856	同 三	1817	文化一四
1894	同 二七	1855	同 二	1816	同 一三
1893	同 二六	1854	安政元(嘉永七)	1815	同 一二
1892	同 二五	1853	嘉永 六	1814	同 一一
1891	同 二四	1852	同 五	1813	同 一〇
1890	同 二三	1351	同 四	1812	同 九
1889	同 二二	1850	同 三	1811	同 八

布哇日本人銘鑑目次其二

布哇人物略傳（いろは順）

い ノ 部

井小路一男……一
井上協平……一
井口宇右衛門……二
井田平……二
井芹長藏……三
一木彦太郎……三
一場勳……四
一戸信太郎……四
一本杉隆一……五
今村惠猛……五
今泉秀……六
今井己三郎……六
石原新松……七
石井勇吉……七
石井喜太郎……八
石井新一……八
石栗牛九郎……九
岩本又喜……九
岩本福次郎……一〇
岩永秀記……一〇
岩永知一……一一
岩佐末次……一一
岩佐新藏……一二
岩崎關三……一三
岩下貞亮……一三
伊田市作……一三
伊藤尙……一四
伊藤平次郎……一四
伊藤庸次……一五
伊藤理一郎……一五
伊津野忠三……一六
伊積光行……一六
飯島由太郎……一七
池野正男……一七
生長榮助……一八
泉原寛海……一八
磯村高助……一九
糸賀淺吉……一九
茨木小彌太……二〇

は ノ 部

橋本松次郎……二〇
橋本敬三……二一
橋本秋代……二一
橋本伊三吉……二二
橋本清市……二二
橋本萬穉……二三
橋口盛左衛門……二三
原直之……二四
原田常太郎……二四
原田助……二五
原田剛……二五
原田春市……二六
原田義海……二六
原田耕藏……二七
林吉松……二七
林繁次郎……二八
林龜之助……二八
林辨藏……二九
林茂喜……二九
伴敬三……三〇
埴田昌平……三〇
半澤徹治……三一
馬場己作……三一
長谷川三郎……三二
長谷川圓藏……三二
濱崎甚助……三三
濱崎好松……三三
濱元貞助……三四
濱野國松……三四
濱名初穉……三五
濱田台五郎……三五
濱田勘吾……三六
濱田初太郎……三六

濱田九一……三七
芳我日下……三七
芳賀七郎……三八
畑　貞之助……三八
島中善吉……三九
早木森太郎……三九
早川治郎……四〇
春永萬喜……四〇
羽野島吉……四一

に ノ 部

西村　要……四一
西村秀市……四三
西村行藏……四三
西原春吉……四三
西島榮次郎……四三
西川忠三郎……四四
西ヶ谷政吉……四四
西本竹平……四五
西岡三澄……四五
西山勘助……四六
二木良衛……四六
二井勘次郎……四七
仁井見得一……四七
新谷峰五郎……四八
錦田萬吉……四八

ほ ノ 部

本田榮作……四九
本田菊一……四九
本田忠太郎……五〇
堀内德政……五〇
堀内良平……五一
堀内勝雄……五一
堀内壽平……五二
堀田治助……五二
堀　貞一……五三
堀　定正……五三
堀　忠三……五四
堀川伊助……五四
堀本忠一……五五
細　井　勇……五五
星野傳三郎……五六
本城繁藏……五六
星出保太郎……五七

と ノ 部

富川勇三……五七
富川安七……五八
豊福初太郎……五八
豊福鹿藏……五九
當山哲夫……五九
遠山市太郎……六〇
東福寺　子四郎……六〇
東福寺　香……六一
東海林甚七……六一
堂野文司……六二
土井來助……六二
德山省吾……六三
德丸熊喜……六三
百百增太郎……六四
十時竹次郎……六四
苫井伴助……六五
戸田文平……六五
友清盛一……六六
友枝生藏……六六

ち ノ 部

近森作藏……六七

を ノ 部

大岡寛……六七
大塚長雄……六八
大森政衛……六八
大井賢成……六九
大竹辰次郎……六九
大西龍二……七〇
大崎梅次郎……七〇
大江法爾……七一
大木幸一……七一
大田重太郎……七二
大畑誠一……七二
大谷孫一……七三
大久保長吉……七三
大城戸健一……七四
大濱　太……七四
大空與作……七五
折笠寅三郎……七五
岡本兼松……七六
岡本德一……七六
岡本敬春……七七
岡本惣三郎……七七
岡木英吉……七八
岡本楠榮……七八
岡田德太郎……七九
岡田才平……七九

岡田多一……八〇
岡崎丈市……八〇
岡崎音治……八一
岡迫要爾……八一
岡砂藤一……八二
岡　涙之助……八二
岡村虎助……八三
太田達一……八三
太田登一……八四
太田傳治郎……八四
太田龜喜……八五
小田切源策……八五
小川道二……八六
小田泰助……八六
小野寺德治……八七
小野壽吉……八七
小澤健三郎……八八
小栗高太郎……八八
尾崎三七……八九
尾崎澤次郎……八九
尾上久二……九〇
尾上卯一……九〇
尾中九一……九一
尾川仙之助……九一
緒方數彦……九二
緒方清四郎……九二
緒方熊市……九三
奥村多喜衛……九三
奥村寅次……九四
奥野作次郎……九四
沖本藏次郎……九五
沖　鐵次郎……九五
織田博愛……九六
王常辰次郎……九六

わ ノ 部

渡邊酋藏……九七
渡邊　潔……九七
渡邊純造……九八
渡邊峯雄……九八
渡邊幸太郎……九九
渡邊彌吉……九九
渡部七郎……一〇〇
脇本勝一……一〇〇
和田一郎……一〇一

か ノ 部

河野一幸……一〇一
河野市太郎……一〇一
河野新太郎……一〇二
河野喜好……一〇二
河本勝一……一〇三
河本觀次郎……一〇四
河村弘嚴……一〇四
河村大藏……一〇五
河村義一……一〇五
河崎京一……一〇六
河崎久太郎……一〇六
川崎正郷……一〇七
河内辰次……一〇七
河内文雄……一〇八
河田政昭……一〇八
河口利三郎……一〇九
河谷道太郎……一〇九
河原哲夫……一一〇
川原順一……一一〇
川原田牧三……一一一
川口力一……一一一
金城善助……一一二
金城直遣……一一二
金井貞吉……一一三
勘迫今次郎……一一三
柏龍天……一一四
龜山弘應……一一四
冠念一……一一五
影佐熊太郎……一一五
芽原長助……一一六
鎌野爽治……一一六
鍜冶寅雄……一一七
兼田孫三郎……一一七
梶谷甚九郎……一一八
加藤文八……一一八
加藤利作……一一九
加屋清一……一一九
嘉屋嘉一……一二〇
勝谷克巳……一二〇
垣内庄作……一二一
高無萬之助……一二一
桂　政藏……一二二

よ ノ 部

吉澤次郎……一二二
吉澤龜次郎……一二三
吉野佐太郎……一二三
吉田留次郎……一二四
吉岡熊太郎……一二四

吉本種一……一三五
吉岡文藏……一三五
吉川吉太郎……一三六
芳本義八……一三六
米倉國三郎……一三七
横野民三郎……一三七
横山國五郎……一三八
横川與市……一三八
横竹松四郎……一三九
横田一人……一三九
米元勝……一四〇
吉增新次郎……一四〇
吉原久吉……一四一
余田近之一……一四一

たノ部

田中彦一……一四三
田中林藏……一四三
田中仙學院……一四三
田中小太郎……一四三
田中政之助……一四四
田中彌六……一四四
田中良次……一四五
田中滿治……一四五
田中治三郎……一四六
田邊三之亟……一四六
田添龍壽……一四七
田川英次郎……一四七
田村槇太郎……一四八
田村忠義……一四八
田村繁一……一四九
田村峰吉……一四九
田島政吉……一四〇
田島朝明……一四〇
田阪聞政……一四一
田原治久馬……一四一
田口久次郎……一四二
田頭嘉男……一四二
竹下健一……一四三
竹森達二……一四三
竹中新太郎……一四四
竹内國太郎……一四四
竹本久平……一四五
竹廣稔……一四五
竹本勇太郎……一四六
武田一登……一四六
平良與常……一四七
平良牛助……一四七
立石雛次郎……一四八
谷岡松次郎……一四八
谷川三藏……一四九
谷川富藏……一四九
谷山勝次……一五〇
谷口稔……一五〇
谷間欽誠……一五一
谷村松右衛門……一五一
高山甚吉……一五二
高橋政一……一五二
高橋德衛……一五三
高橋秀夫……一五三
高橋直一……一五四
高野市平……一五四
高嶺正金……一五五
高畑寅次……一五五
高田龜之助……一五六
高村鐵藏……一五六
高木末熊……一五七
高木秀道……一五七
高野爲寛……一五八
高澤小六……一五八
王榮仁牛……一五九
大師德三……一五九
埼市藏……一六〇
龍溪玄深……一六〇
瀧本修次郎……一六一
伊達直太郎……一六一

そノ部

空中光太郎……一六二
空山總二……一六二
相賀安太郎……一六三
曾賀部四郎……一六三
曾根田健二……一六四
曾川政男……一六四

つノ部

辻德市……一六五
堤千吾……一六五
津田默龍……一六六
津嘉山朝保……一六六
津波章孝……一六七
土屋精一……一六七
築山長松……一六八
筒井眞次郎……一六八
角田初平……一六九
坪井與三郎……一六九

ねノ部

猫本俊一……一七〇

なノ部

永井秀雄……一七〇
永澤雄之進……一七一
永木平三郎……一七一
永岡有信……一七二
永田清……一七二
永山常太郎……一七三
長井慶太郎……一七三
長守又次……一七四
長迫光藏……一七四
中村渠平藏……一七五
中村好太郎……一七五
中村一郎……一七六
中村勘一郎……一七六
中村惣七……一七七
中村持照……一七七
中辻貞次……一七八
中塚一郎……一七八
中重彌一郎……一七九
中尾茂造……一七九
中尾弐良……一八〇
中尾新太郎……一八〇
中畑忠雄……一八一
中島百一……一八一
中島金子……一八二
中島勇喜……一八二
中島犀一郎……一八三
中橋鶴松……一八三
中川市之進……一八四
中山歌治郎……一八四
中山五郎……一八五
中山市太郎……一八五
中山準藏……一八六
央旭……一八六
央參次郎……一八七
中澤蕃昌……一八七
中筋五郎吉……一八八
中市勇一……一八八
中原仙太郎……一八九
中津柳太郎……一八九
奈良元道助……一九〇
梨羽峯太郎……一九〇
名田勇次郎……一九一
難波次男……一九一

むノ部

村田龍一……一九二
村田壽吉……一九二
村田安太郎……一九三
村田勝平……一九三
村上惣四郎……一九四
村上勝平……一九四
村上杏助……一九五
村川逸郎……一九五
村岡廣喜……一九六
村岡祝司……一九六

うノ部

上森七藏……一九七
上里良溫……一九七
上岡辰之助……一九八
上田新吉……一九八
上杉健之助……一九九
上江洲智綸……一九九
上原加邦……二〇〇
上原與吉……二〇〇
上村二男……二〇一
上島泰岳……二〇一
内田重吉……二〇二
内田金二……二〇二
内田近治……二〇三
内田鐵心……二〇三
内田榮太郎……二〇四
内海賢登……二〇四
内山一郎……二〇五
宇野友吉……二〇五
宇野誠……二〇六
宇野雅雄……二〇六
植田龜次郎……二〇七
植田政一……二〇七
植田百次……二〇八
有働貞三……二〇八

のノ部

野田政次郎……二〇九
野田儀角……二〇九
野坂孫一……二一〇
野口次郎喜……二一〇
登倉一……二一一
濃人鍬一……二一一

くノ部

桑原達吉……二二二
桑原群一……二二三
桑田彦太郎……二二三
草尾雄五郎……二二三
草岡信次郎……二二四
國清太吉……二二四
國宗小佐次郎……二二五
國行幾造……二二五
國近菊平……二二六
國光嘉市……二二六
國廣寅一……二二七
口羽義教……二二七
沓内光……二二八
沓内直記……二二八
管野角治……二二九
菅野鐵次……二二九
黑田重三郎……二三〇
黑田峻英……二三〇
黑川淳三……二三一
藏岡靜……二三一
久保田佐一郎……二三二
久保田記三……二三二
楠本丑之助……二三三
楠本鶴吉……二三三
倉本信次郎……二三四
倉崎重一……二三四

や ノ 部

山本荒太郎……二三五
山本清三……二三五
山本熊之助……二三六
山本鐵造……二三六
山本重子……二三七
山本滿平……二三七
山本清吉……二三八
山本嘉市……二三八
山本初一……二三九
山本一行……二三九
山本晋……二三〇
山本美代吉……二三〇
山本昌作……二三一
山本勝三郎……二三一
山本吾三郎……二三二
山村勝次郎……二三二
山崎勝太郎……二三三
山崎森太郎……二三三
山崎達軀……二三四
山田新太郎……二三四
山田恒藏……二三五
山肩禮夫……二三五
山肩貞三……二三六
山城松太郎……二三六
山代屋粂七……二三七
山下義之……二三七
山下忠……二三八
山口隆戒……二三八
山口七藏……二三九
山口正人……二三九
山岡佐太郎……二四〇
山重乙二……二四〇
山根宇一……二四一
山中哲一……二四一
山塚禎次……二四二
山近峯三郎……二四二
安井美然……二四三
安井里助……二四三
安井柳太郎……二四四
安田明治……二四四
安森勝太郎……二四五
矢野友一……二四五
矢野唯雄……二四六
屋宜盛蒲……二四六
屋嘉宗常……二四七
柳原吉太郎……二四七
籔井由松……二四八
八代作吉……二四八
八岡市次郎……二四九
大和光次郎……二四九

ま ノ 部

松田隆彦……二五〇
松田猪七……二五〇
松田常三……二五一
松井格助……二五一
松井嘉市……二五二
松井勇哲……二五二
松井登太良……二五三
松岡榮藏……二五三
松本和助……二五四
松本民平……二五四
松本慶次……二五五
松尾梅助……二五五
松尾精一……二五六
松永安平……二五六
松村保……二五七
松村正人……二五七
松村正穗……二五八
松坂丈一……二五八
松坂茂……二五九
松崎清志……二五九
松澤四方吉……二六〇
松並一雄……二六〇
前原禎一郎……二六一
前田龜太郎……二六一
前田鶴喜……二六二
前田勝喜……二六二
前田仁平……二六三
町田友三……二六三
町田龜三郎……二六四
町田龍助……二六四
增田留藏……二六五
增田正史……二六五
增永壽三郎……二六六
增原與一……二六六
牧野金三郎……二六七
的野又雄……二六七
丸山金一郎……二六八
丸本玉次郎……二六八
益田增太郎……二六九
眞下龍平……二六九
間下法電……二七〇
眞子金藏……二七〇
又吉全興……二七一
萬壽榮二……二七一

ふ ノ 部

福永金槌……二七二
福永是一……二七二
福永秀一……二七三
福錄彌八……二七三
福田弟一郎……二七四
福田善一……二七四
福島睦夫……二七五
福城諧久……二七五
福本理忠太……二七六
藤清……二七六
藤本實平……二七七
藤本潮溫……二七七
藤本時正……二七八
藤本正亮……二七八
藤本龜太郎……二七九
藤本虎藏……二七九
藤本亦藏……二八〇
藤元龍一……二八〇
藤井清市……二八一
藤井順一……二八一
藤井吉次……二八二
藤井作助……二八二
藤門周吉……二八三
藤谷晃道……二八三
藤村貞雄……二八四
藤島壽平……二八四
藤上敏夫……二八五
藤江茂一……二八五
藤浴常次郎……二八六
藤木正夫……二八六
藤川壽郎……二八七
藤川平吉……二八七
藤田久吉……二八八
藤野要太郎……二八八
藤野培造……二八九
藤岡傳次郎……二八九
古野保……二九〇
古川七郎……二九〇
古屋理一郎……二九一
古林七兵衞……二九一
深田晋一郎……二九二

こ ノ 部

小林幸次郎……二九二
小林榮之助……二九三
小林金次郎……二九三
小林宥仁……二九四
小林元一……二九四
小林善三郎……二九五
小波津幸秀……二九五
小波津喜朝……二九六
小出祐一……二九六
小杉銑之輔……二九七
小久保久彦……二九七
後藤官平……二九八
後藤鎭平……二九八
兒玉令一……二九九
兒玉群二……二九九
米屋三代槌……三〇〇
今野一郎……三〇〇
近藤省三……三〇一
河面格郎……三〇一
鷹田竹造……三〇二
國分鐵吉……三〇二
古明地利輔……三〇三

え ノ 部

驛藤一……三〇三
胡子信一……三〇四
遠藤捨松……三〇四
惠下藤吉……三〇五

て ノ 部

寺田太次郎……三〇五
寺田安太郎……三〇六
寺本梅吉……三〇六
寺本甚松……三〇七
寺岡仁輔……三〇七
寺河内宇作……三〇八
寺崎貞助……三〇八
出羽五十八……三〇九
出目常宣……三〇九
傳明地襄一……三一〇

あ ノ 部

淺海吾一……三一〇
淺海庄一……三一一
有田仙藏……三一一
有田專次……三一二
有光正孝……三一二
穴見牛吾……三一三
阿部金五郎……三一三
朝比奈梅吉……三一四
秋田京一……三一四
阿川太助……三一五
明本重藏……三一五
青山正法……三一六
新田建繁……三一六

さ ノ 部

佐藤好助……三一七
佐藤嘉太郎……三一七
佐藤勝藏……三一八
佐藤味法……三一八
佐藤又平……三一九
佐藤太一……三一九
佐渡武茂……三一〇
佐伯政太郎……三一〇
佐伯彌樂……三二一
佐伯末吉……三二一
佐伯圓一……三二二
佐伯群司……三二二
佐佐木喜代次……三二三
佐貫十七一……三二三
佐久間房吉……三二四
坂田利三郎……三二四
坂田運次郎……三二五
坂本九市……三二五
坂本德弍……三二六
坂井嘉作……三二六
坂井德一……三二七
坂口勝平……三二七
酒井秀司……三二八
迫田當二……三二八
迫田德次郎……三二九
貞安春美……三二九
貞宗德郎……三三〇
更科眞里……三三〇
榮木鎭二郎……三三一
澤村作市……三三一
笹井太馬喜……三三二

き ノ 部

木村吾市……三三二
木村齋次……三三三
木村寅喜……三三三
木村三右衞門……三三四
木下作一……三三四
木下白夫……三三五
木下梅市……三三五
木津爲太郎……三三六
木谷法觀……三三六
貴多鶴松……三三七
喜佐田善藏……三三七
喜名朝猷……三三八
清弘正一……三三八
北口熊吉……三三九
北村松五郎……三三九
北島音次郎……三四〇
北村健司……三四〇
岸井彦七……三四一
岸田英一……三四一
岸八郎……三四二
桐村義英……三四二
行德榮太郎……三四三
絹谷顯保……三四三
菊池萬吉……三四四
吉川多三郎……三四四

ゆ ノ 部

湯尻法眼……三四五

み ノ 部

三輪仙吉……三四五
三輪省吾……三四六
三坂德松……三四六
三原政喜……三四七
三浦萬吉……三四七
三浦信一……三四八
三宅直吉……三四八
見田政造……三四九
宮本淳……三四九
宮本文哲……三五〇
宮本純……三五〇
宮崎匪石……三五一
宮城武夫……三五一
宮城高光……三五二
宮城源水……三五二
宮王勝良……三五三
宮田喬一……三五三
宮本才八……三五四
宮川智補……三五四
宮原義明……三五五
宮增鶴松……三五五
滿田豊藏……三五六
光井柳介……三五六
水田謹一……三五七
水野甚太郎……三五七
水本重喜……三五八

し ノ 部

清水兵作……三五八
清水濟……三五九
清本小市……三五九
冷水幸太郎……三六〇
繁田幸一……三六〇
城瀧大六……三六一
椎木市之亟……三六一
島本清一……三六二
島本運平……三六二
島田新吉……三六三
品川末繼……三六三
靜間五郎……三六四
新宅賢一……三六四
新原保太郎……三六五
白木菊槌……三六五
白田喜造……三六六
下甲義人……三六六
下田牛次郎……三六七
正田喜一……三六七
生田貞一……三六八
秀德源次郎……三六八
尖戸福治……三六九

ひ ノ 部

廣畑市郎……三六九
廣川專吾……三七〇
廣田寛敬……三七〇
弘津益次郎……三七一
弘重重一……三七一
平井勝利……三七二
平本清治郎……三七二
平山福平……三七三
日野義雄……三七三
檜垣久一……三七四
比嘉靜觀……三七四

も ノ 部

籾井安太郎……三七五
森藤定人……三七五
森永千次郎……三七六
森川虎一……三七六
森五郎……三七七
森重峯之助……三七七
森分篤一……三七八
森田榮……三七八
森杉延吉……三七九
森原宇作……三七九
毛利佐一……三八〇
毛利伊賀……三八〇
毛利元一……三八一
本好祐章……三八一
本川源之助……三八二
本重和助……三八二
門出馬之亟……三八三
桃山義男……三八三

せ ノ 部

關屋芳五郎……三八四
關屋長次郎……三八四
關屋吉太郎……三八五
仙田壽之吉……三八五
清家武雄……三八六
切東秀一……三八六

す ノ 部

隅田睦治……三八七

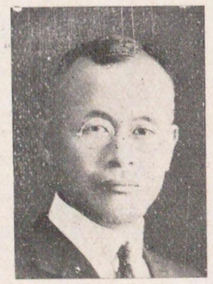
住田多次郎……三八七
住田代藏……三八八
末田代次郎……三八八
末岡章……三八九
菅村芳弘……三八九
須内一信……三九〇
杉田定吉……三九〇
鈴木多次郎……三九一
須磨伯吉……三九一

井小路一男氏

出生　明治七年一月
原籍地　山口縣玖珂郡灘村
現住所　布哇島ホノカア
職業　商會支配人

氏は明治二十七年八月來布した、ホノルルにをること一年にして馬哇島に赴きハナ耕地に數年を過し明治三十七年布哇島に移りホノカアに定住して今日に至りハマクア商會支配人として敏腕を振つてをる氏は大正八九年の勞働運動には勞働同盟會ホノカア支部長、布哇島同盟會幹部として大に活動し、後ホノカア日本人會長、日本語學校學務委員長として社會に寄與する處大である、資性清廉潔白、直情徑行、事理に明かにして地方有數の人物である、夫人ウメの間に長男豊、次女サダ、三女ミドリあり、長女は既に他に嫁してをる。

井上協平氏



出生　明治六年六月五日
原籍地　山口縣大島郡久賀町
現住所　ホノルル市オースチン街二四六
職業　保險代理業

氏は明治四十一年十一月來布した、日本に於ける教育家の經歴を抛ち實業家たるべく志し商界に立つべく準備中、方針を一變して大正五年紐育生命保險會社代理人となるに及びて異常の成績を擧げ大正七年以來毎年保險勸誘額二十萬弗を超ゆるを以て會社内の二十萬弗倶樂部員に推薦され大正九年には全米に於ける二百人倶樂部の一人に擧げられ日本人同業者に前例なき面目を施した、大正十二年度には八千五十六人を算する會社の全米代理人中、第二十二位、大正十三年度は八千六百六十四人中第二十位を占むる優秀の成績を示し爾來毎年二十萬弗以上の記錄を續け、同業邦人中有數の成功者として知られ、氏は專門的保險業者として更に飛躍を試みてをる、家族は夫人フジ子、長男潔、長女愛子、次男淑人、三男潤、次女マリ子、四男濟、五男滋の五男二女ある。

井口宇右衛門氏

出生　明治七年五月十一日
原籍地　廣島縣世羅郡西大田村
現住所　ホノルル市カイムキ十番街
職業　學校長

氏は鄕里に於て若冠の頃より小學校教員として教育事業に沒頭し、明治二十六年六月世羅郡伊尾尋常小學校に教鞭を執れるを手初めに、同二十九年三月御調郡向島東校、同三十一年十月世羅郡西大田東校、同三十四年十月大田東尋常小學校長に歷任し、西大田郡西大田村、同三十六年一月同郡西大田中央尋常小學校訓導兼校長に轉じたが布哇渡航を志し同三十八年十一月依願退職となつた、此間年功加俸を受け成績良好、功勞大なるを以て廣島縣より賞金を給與せられ更に教育基金令第八條に依り奬勵金を授けられた、明治三十九年四月一日來布するや直ちに布哇島カウ郡ナアレフ本願寺附屬小學校教員を囑托せられ同四十四年五月ホノルル本願寺附屬小學校に轉じ大正元年十月馬哇カフルイ日本語學校長となり翌年オアフ島ワイパフ本願寺附屬校に移り大正三年モイリリ日本語學校長としてホノルルに定住し同七年六月カイムキ日本語學校長として今日に至る、三十年間一日の如く育英事業に奉仕して倦まず斯界の元老として重きをなす、夫人も亦た教職にあり長男亮造氏は寫眞製版技師として既に結婚しホノルルに長女一江は神戸コーレス會社員として日本にある。

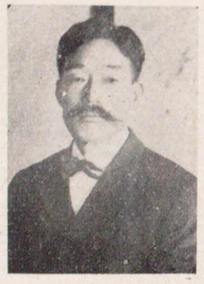
井田平氏

出生　明治十四年十二月二十三日
原籍地　東京府荏原郡松澤村
現住所　ホノルル市ヌアヌ街
職業　美術店

氏は青年時代米大陸にありて學生生活を送り加州スタンフォード大學に學んだ大正三年十二月十日布哇に來り種々の事業を試みたが數年前ヌアヌ街現在場所に美術店を開業し意匠、圖案、廣告看板の調製、繪畫表裝等を營業としてをる、氏はデトロイト美術學校の卒業生で布哇に於ける唯一の同校出身者である、夫人可壽榮あるも子供はない、氏は東華と號し文筆の嗜がある。

井芹辰藏氏

出生　明治七年十一月三日
原籍地　熊本縣上益城郡白旗村字糸田
現住所　布哇島カウ、パハラ
職業　請負業商業



明治二十八年三月來布せる氏は布哇島ペペケオミルに就働すること五年、しかも一介の勞働者にては到底成功の望なきを覺知しカウに移り耕地カチケンの請負仕事を始めた、氏の運命はこれよりとんとん拍子に展けて遂に八百五十英町の甘蔗小作をなし傍ら商店を經營し數萬の資產を有するカウ地方の模範的成功者たるに至れるも天は二物を與へず不幸大正十年五月十日、四十八歲を一期として病死した、氏は經綸を完ふせず中途にして逝いたが進取的事業家として範を垂れカウ地方開發に致せる功績は永久に滅びないであらう、內助の功大なる夫人ツギの間に辰雄、辰廣、辰晴、ハツエ、茂子、ツエ子、サエ子の三男四女あり未亡人は亡夫の冥福を祈るべく尼僧となりてパハラ日蓮宗敎會の留守居として各地に布敎し、子女の成長を樂みにカウを墻墓の地としてをり、長女ハツエはヒロに商店を營み二女茂子は嫁して米大陸にあり、長男辰雄は米大陸に三女ツエ子は日本にあり他の子供は何れも學校に通つてをる。

一木彥太郎氏

出生　明治十九年七月二十一日
原籍地　山口縣熊毛郡大野村
現住所　馬哇島ワイルク
職業　旅館業

氏は明治三十六年四月二十八日布哇に渡航した、ホノルルに於けるシーサイドホテルに勤むること六年にして布哇島ヒロに移り其處に六年を過した、大正八年十二月八日馬哇島に轉じワイルクなる蘆邊ホテルを讓受け一木旅館と改稱して經營今日に至る、地方の有志家で佛敎青年會監査、防長海外協會ワイルク支部役員に推さる、釣魚を道樂としワイルク大公望の頭目の一人である、家族は夫人ツネあるのみ子供なし。

一塲勳氏

出生　明治二十七年三月二十九日
原籍地　廣島縣安藝郡船越村
現住所　オアフ島エワ
職業　學校長

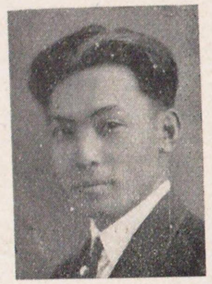
日本より教育家として立てる氏は大正四年一月二十五日布哇の人となるや布哇島コナのホナウナウ日本語學校に教鞭を執り勤續六年に及んだ、大正九年エワより聘せられエワ日本語學校長として今日に至る、育英事業に精進する傍らエワ日本人關係の公共事業に參與して盡す處が多い、夫人ミサヲの間に愛孃惠美子がある。

一戸信太郎氏

出生　明治十一年四月七日
原籍地　岩手縣盛岡市下小路町
現住所　オアフ島ハレイワ
職業　醫師

氏は明治三十五年仙臺醫學專門學校を卒業、秋田縣小坂鑛山病院に勤務すること四年にして福島縣加納鑛山病院に轉勤して二年を過した、其後朝鮮咸鏡北道の警察醫、檢疫醫として奉職二年に及んだが更に支那東間島琿春なる帝國領事館囑托醫、支那稅關囑托醫として四年間勤務した。歸朝後東京の傳染病研究所、三井病院に就て半ヶ年醫術の研究をなし大正四年五年三十一日布哇に渡來した、大正五年五月布哇縣醫術開業試驗に合格するや同年七月ハレイワに一戸病院を設立して診療に從事した、大正七年日本に歸省し刀圭界の視察見學をなすこと一年半にして大正九年二月歸布しハレイワに於て從前の如く開業今日に至る、ワイアルア地方の重鎮として內外公共事業に關係せざるなく人望がある、夫人好子の間に長男信一、次男信二、長女若子、三男信の三男一女あり長男信一氏は京都帝國大學醫科に在學中である。

一本杉隆一氏



出生　明治二十四年三月
原籍地　廣島縣安佐郡大竹町
現住所　ホノルル市プアレン
職業　齒科醫師

氏は明治四十一年十二月來布した、翌年四月オアフ島ライエ日本語學校を創立し大正元年十月まで教鞭を執つた、ライエ日本語學校を辭職せる氏はホノルルに出で醫師ヲール氏の助手を勤むること八年、大正八年十月米大陸ウイスコンシン州マーケット大學に入り翌九年十月ミゾリー州セントルイス大學に轉じ齒科醫術を研學した、大正十二年六月セントルイス大學を卒業し布哇に歸來、布哇縣醫術開業試驗に合格し同年九月リヴァ街ペレタニヤ角に齒科醫院を開業して今日に至る、新進の齒科醫である、家族は夫人シゲヨあり。

今村惠猛氏

出生　慶應三年五月二十五日
原籍地　福井縣足羽郡東郷村
現住所　ホノルル市フォート街
職業　宗教家

氏は鄕里なる本派本願寺末寺惠修寺の相續者として生る、慶應義塾に學び明治二十七年十二月義塾文科を卒業し德島、福井兩縣下の縣立中學校に教諭たること四年、明治三十二年二月二十七日本山の命に依り開教使として布哇に出張し翌三十三年一月里見法爾師に代りて布哇布教監督となる、爾來三十年間氏の熱心なる布教傳道と異常なる努力經綸は完全なる布教網と教學機關と確固たる基礎を有する本願寺別院の今日あらしめて克く以て布哇宗教界の一方に雄視せしむるに至る、明治四十年十月四日布教場は昇格して本派本願寺布哇別院となり法人教團組織となし大正八年巨萬の淨財を得て莊嚴なる別院伽藍を新築竣成せしむ、明治三十三年佛教青年會をホノルルに設立、大正十二年布哇屈指のホノルル佛教青年會館建築を成就せしめ、明治四十二年布哇中學校、布哇高等女學校を創立して第二代日本人中等程度日本語機關となし人材養成に貢献す、現在布哇各島に三十六ケ所の布教場、二十三校の小學程度の學園、二校の中等日本語學校を總括支配し此他多數の男女青年會、佛教婦人會、日曜學校を管理し、青年教團を設け英語傳道に力を濺ぎハント夫妻、カビー博士等の外人傳道師を活動せしめてをる、布哇別院輪番、布哇開教總長、本願寺教團總務長、教學總監として布哇に於ける本派本願寺教學二途の事業を司宰經營し布哇邦人の教化指導に偉大なる功績がある、家族は夫人キヨ子、長男寛猛次男信之、三男得之、長女光子、次女惠子、三女和子あり、キヨ子夫人は教學兩方面に亘りて良人の事業を助けて功勞少なからず長男寛猛氏は慶應義塾大學在學中、次男信之氏は米大陸大學在學中である、氏は今日まで五度日本を訪問し一度米大陸を旅行して教學界の視察をなした。

今泉秀氏

出生　明治十九年八月七日
原籍地　福島縣田村郡飯豊村小野山神
現住所　布哇島ヒロ、ワイアケア
職業　農業

氏は明治三十九年十一月布哇に來る、布哇島に定住してワイアケア耕地にをること多年、一介の勞働者より身を起して地方屈指の事業家となり今日にては八百英町の牧場を經營して數千頭の牛畜を有し別に六十英町の甘蔗小作をなし四年前ヒロ椰子島にワイアケア、マーケットを開設し山本氏を支配人に數人を使用して肉類販賣をなしつつある、事業家として各方面に活躍せる氏は地方の重鎮として大小公共事業に關係し社會のために奉仕を怠らず勞働運動の起れる大正八九年の交は勞働同盟會長として奔走し、又た日本語學校學務委員長として。青年會長として、更にワイアケア甘蔗小作同盟會長として貢献する處大なるものがある、夫人ヨシの間に長男正以下三男一女を擧げ圓滿な家庭を作つてをる。

今井巳三郎氏

出生　明治九年七月九日
原籍地　新潟縣北蒲原郡加治村
現住所　布哇島ペペケオ、大マウカ
職業　甘蔗小作業

氏は明治三十三年二月十二日を以て來布した、布哇ババアロア耕地アマウマに勞働すること二ケ年にしてペペケオの現在場所に轉じ甘蔗栽培業に從事し一時同耕地屈指の事業家と唄はれたが糖價下落のため失敗に終り悲境に陷りたるも不撓不屈、難關を突破して今日あるに至つた、甘蔗小作業者として活動する傍ら大正八九年の日本人勞働者の增給運動に當りては勞働同盟會の支部長、或は代表者として大に盡力しホノルルに出府するこに數回に及んだ、又た大マウカ同志會會長たること多年。日本語學校の學務委員長或は會計。書記として社會的事業に貢献する大なるものがある、家族は夫人ヨリあるも子供は一人もない。

石原新松氏

出生　明治元年八月五日
原籍地　廣島縣安佐郡安村
現住所　ホノルル市スクール街二〇七
職業　時計店主

氏は明治二十二年一月五日、官約七回船移民として來布し馬哇島スペクル耕地に就働すること三ケ年、後ちクラに轉じ事業家として三年を過した、明治二十七年布哇島オーラー九哩に旅館を開業し經營四ケ年にしてホノルルに出でた、明治三十年ヌアヌ街に時計商を開始し同三十五年歸國十年間を日本に暮し明治四十五年再び布哇の人となりスクール街にて石鹸製造業を創めたが間もなくキング街スミス角に時計商を開き時計、貴金屬の販賣、修繕に從事し大正十二年十月ホテル街スミス街角に移轉して今日に至る、同業者間の元老にして又た成功者である、夫人ハナ長女靜子等の家族がある。

石井勇吉氏

出生　安政二年八月十九日
原籍地　廣島縣廣島市大手町二丁目
現住所　ホノルル市クアキニ街一七四四
職業　藥店主

氏は陸軍衛生隊雇員として日清戰役に從軍し勳六等に叙せらる、明治三十二年十一月來布、翌三十三年三月石井藥舗を開業し藥品、賣藥の卸小賣をなす其後業務を擴張し數年前株式組織に改め社長となりて經營今日に至る、ホノルルに於ては本重藥舗に亞ぐ最も古き藥店である、明治三十三年五月、日本政府發給の藥劑師免狀に依り布哇縣政府より無試驗にて藥劑師免狀を受く、同年日本赤十字社協賛委員となりて社員勸誘募集を開始し爾來献身的に同社のために盡力し功勞を以て特別社員に列し有功章を授けらる、同社布哇特別委員部が社員一萬人を有する今日の盛況は氏の力に負ふ處大である、公共事業に熱心で日本人商人同志會以來日本人商業會議所員にして日本人慈善會にも關係し副會長たりしことあり現に墓地協會會計、廣島縣人會理事である、又た西本願寺の有力な信徒で其方面に貢献する處も多くホノルル邦人社會故老の一人として社會的活動の經歴に富む、家族は夫人マツ、長女キク、次女トモ、三女トミ等で三女共に嫁して數人の孫あり。

石井喜太郎氏

出生　明治二十一年十月二十一日
原籍地　廣島縣佐伯郡五日市町
現住所　布哇島ホノム
職業　製糖會社員

氏は布哇島バアウイロに出生せる日本人系米國市民の一人である、幼時父母に伴はれてホノムに移り公立小學校を卒業して曾我部義塾に入り更にヒロのボーディングスクールに學ぶこと數年にしてホノムに歸りホノム製糖會社に勤務し耕地支配人の信任を博し日本人部主任となりて今日に及ぶ、十四英町のホームステッド地を所有し甘蔗の栽培を副業とするが、大正八九年勞働運動當時はホノム勞働同盟會の會計となりて活動し現にホノム獨立青年會、ブルワ野球團の幹部として盡力してをる、前途ある地方有數の新進人物である、家族は夫人シヅノ、長男正夫長女アイコ、次女キヨコ、三女エミコ等がある、兩親はヒロ、ワイアケアホームステッドに健在で氏の孝養を受けてをる。

石井新一氏

出生　明治二十五年二月八日
原籍地　廣島縣安藝郡海田市町
現住所　加哇島リフエ
職業　耕地會社出納係り

氏は加哇島コロアに出生せる日本人系米國市民の先輩である、公立小學校、日本語學校を卒業後、地方の素封家チャーレー、ライス氏の愛顧を受けキブウ耕地の簿記係りとして勤務したが非常の信用を博して出納係りに昇進して今日に至る、資性温厚頭腦明晰にして加哇日本人系市民協會長として其他公共事業に盡す處大なるものあり、家庭にありて妻子を有し、老母、弟妹を扶養して孝養を盡してをる。

石栗半九郎氏

出生　明治六年九月一日
原籍地　新潟縣岩船郡館腰村大字小川
現住所　オアフ島エワ
職業　エワ耕地農事試驗場助手

氏は明治三十二年十一月六日布哇に渡來した、ホノルルに上陸するや直ちにワイバフ耕地に赴き八ヶ月を甘蔗畑の勞働に服した、それよりエワ耕地に轉じ今日はエワ耕地農事試驗場助手として精勤してをる、氏は大正四年來日本赤十字事業に力を濺ぎ多數の社員を募集するは勿論日本赤十字エワ社員會を組織して大に盡す處あつたので大正十三年特別社員に推薦せらるる名譽を荷ふた、赤十字事業の外地方の公共事業にも熱心であつて現にエワ日本語學校學務委員長、エワ日本人社交倶樂部書記、日本赤十字エワ社員會會計に推されをる地方有數の德望家であり人格者である、文筆の嗜あり俳諧に趣味を有する、家族は夫人ハナの間に一女文子がある。

岩本又喜氏

出生　明治十八年三月五日
原籍地　熊本縣飽託郡清水村
現住所　布哇島ホノカアミル
職業　製糖所副技師

氏は明治三十七年九月十六日汽船ゲーリック號にてホノルルに上陸し布哇島クイハエレ耕地に働いたが耕地支配人の信任を受け支配人がホノカア耕地に移るや伴はれて同耕地に就職して今日に及ぶ、製糖所副技師として重要な地位にをる、氏は地方公共事業に最も熱心であつて學務委員として日本語學校に盡すは勿論、勞働同盟會組織當時はその幹部として副支部長の任に就きて大に活動し、熊本縣海外協會支部長としては同郷の團結と親睦に力を致し、ミル共勵會の會長としても大に働いた、現に救濟會々長、熊本縣海外協會理事に推されてをる、ハマクワ商會發企者の一人で同商會の理事である、夫人ミツル、長女ミツヨ、次女マツ子、三女ハルヨ、長男敏男、四女スミ子の家族を有する。

岩本福次郎氏

出生　明治四年一月
原籍地　廣島縣廣島市段原町
現住所　ホノルル市キング街バラマ
職業　商業

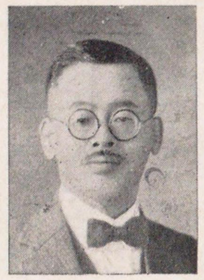
明治二十五年五月來布した氏は加哇島ハナペペに七ヶ年甘蔗畑に勞働した、明治三十二年日本に歸省して翌三十三年再び布哇の人となりホノルルにありて商業に從事すること十ヶ年にして大正元年日本を訪問し同年歸布しキング街現在場所に岩本商店を經營し家具並に日米雜貨食料品の販賣に從事して今日に至る、手固き營業振りを以て知らる、家族は夫人テルの間に一子政男あり政男氏は日本にて教育を受け兩親の許にありて家業を手傳ふ、既に妻子がある。

岩永秀記氏

出生　明治二十年七月七日
原籍地　熊本縣上益城郡豊秋村
現住所　馬哇島下バイア
職業　寫眞館主

氏は明治四十一年十月二日來布した、ホノルルに上陸するや馬哇島下バイアなる養家に一旦落着いて半年を過したが寫眞術研究のためホノルルに出て山本寫眞館に入つた、數ヶ月後馬哇島カフルイなる小林寫眞館に轉じて三年を經たがホノルル山本寫眞館主歸國のため再びホノルルに出て同寫眞館の留守經營に當つた、大正三年下バイアに歸り岩永寫眞館を開業して今日に及ぶ、地方の有力家で熊本縣海外協會バイア支部會計、下バイア日本人同志會理事長たりしことあり又たホノルル布哇產業株式會社の株主で副社長に推されてをる、夫人ミツルの間に長女美惠子長男秀幸、次男記朝、三男美都男の三男一女を有する。

岩永知一氏



出生　明治四年二月十八日
原籍地　東京府豊多摩郡西大久保町
現住所　ホノルル市フォート街
職業　商業

氏は明治二十八年四月五日布哇に來るや間もなくホノルルに於て木村齋次氏の經營する木村商店の帳簿係となり明治三十六年五月木村商會と改名して就職した、大正七年禁酒法の實施に支配人となり更に社長を兼ねて株式會社となるや選まれて東京に靜養する同商會は解散廢業し目下岩永商店を開業して今日に至る、氏は日本人商業會の元老にして日本人商業會の有力なる一員たること多年、又た同團、護持會の本派本願寺の三十年來信徒であつて同教團の幹部として教化事業に盡力し同時に本願寺關係學校の日の如く教勞あり、外國語學校取締法問題起るや委員として功績あり、試訴期成會理事長として解決に力を濺いだ、家族は夫人十重子、長男勇、次男登、三男篤、四男順（死亡）、五男孝、六男眞、七男陸郎、長女智子、次女信子あり七男二女の子福者である。

岩佐末次氏

出生　明治二十二年十月四日
原籍地　福岡縣浮羽郡水縄村大字二田
現住所　オアフ島レイレフア
職業　商業

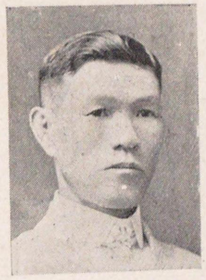
氏は明治三十九年布哇に來り布哇島ババイコウ耕地に勞働すること三年、オーラー九哩に移りて請負業に從事し數百名の勞働者を使役し傍ら日米雜貨商店を經營した、大正十年オアフ島に轉じ豊福氏と共同レイレフアなるスコツフイルド兵營内に美術骨董日米雜貨品を取扱ふレイレフア商會を創立し盛んに營業して今日に至る、オーラー在住時代より青年會長、日本人會長、學務委員等に推され公共事業に參與し日本語學校、寺院にも大に盡力する處があつた年齡若く地方有數の青年實業家である、家族は夫人キミヨの間に長男道夫長女喜代子、次男浩治の二男一女あり、大正十五年家族同伴久方振り日本に歸省して數ヶ月を過した。

岩佐新藏氏

出生　明治十八年十月十六日
原籍地　千葉縣夷隅郡大原町
現住所　ホノルル市北キング街
職業　サーヴイス、ステーション主

明治四十年二月二十七日來布した氏は加哇島マカウエリ耕地にありて六ケ月間甘蔗畑の勞働に服した、其後ホノルルに出で外國人家庭に勤めて大正三年日本に歸省し翌四年歸府、カリヒに於て養鷄事業に從ふこと三年、大正八年同地に自動車立場を設け乘客用自動車を運轉してゐたが大正十二年八月ギユリツク街角に、ギユリツク、サーヴイス、ステーションを開設し、自動車用品、附屬品一切の販賣、自動車修繕に從事して今日に至る、氏の獨力經營せるギユリツク、サーヴイス、ステーションは日本人間の元祖は良好の業績を擧げてをる、家族は夫人マチ、長女カネ子がある。

岩崎關三氏



出生　慶應三年七月二十六日
原籍地　兵庫縣神戸市北長狹通六丁目
現住所　オアフ島ワイパフ
職業　商業

氏は明治二十四年十月一日來布、ホノルルに二三ケ月滯在したが米國軍艦ムヒケン號に乘組み南洋のサモア、フイジー諸島を巡航すること一年にして再び布哇に來たり中米各國を巡遊七年後日本に歸省した、日本を去つて三度布哇の人となれる氏は布哇島ヒロに赴き渡邊民藏氏とヒロ新報社に入つたが更に紺野留吉氏と共にホノカア藤谷商店に勤め其後オーラア耕地商店に七年、ククイハエレ支店に七年の店員生活を送つた、大正六年の交オアフ島ワイパフ耕地商店に轉じたが同八年の勞働運動に參加しワイパフ同盟の幹部たりしため商店を罷められたが大正八年八月日本人勞働者がオアフ商會を創立するや選まれて支配人となり株式組織となれる今日大株主の一人たる氏は又たワイパフグラーヂの主なる株式の一人である、氏は重役兼支配人として經營に當つてをる、夫人ミチは病歿してあらず家族として長男廉、長女芳子、二女富美子、三女ソノ子、次男大二郎等の子女を有する

岩下貞亮氏

出生　明治十年一月二日
原籍地　長野縣長野市大門町
現住所　ホノルル市カイムキ第五番街
職業　實業

氏は明治三十九年六月ホノルルに上陸した、布哇醬油會社に勤務して間きなく商業商會に入りて勤續十年、大正八年布哇醬油會社の支配人となつたが大正十四年同會社がアメリカ醬油會社と合併するに及びて之れを辭した、氏は同會社の株主で實業方面に關係しカイムキの住宅には農園を經營してをる、家族は夫人梅、長男貞元、次男貞重、長女孝子、次女和子がある。

伊田市作氏

出生　明治九年四月二十三日
原籍地　熊本縣菊池郡清泉村龜尾
現住所　加哇島マカウエリ
職業　耕地從業

氏は明治三十五年八月布哇の人となつた、加哇島マカウエリ耕地に就働して二十餘年一日の如く甘蔗畑の勞働にいそしみ餘暇を公共事業に捧ぐるを樂としてをる、多年館府總代、日本語學校學務委員長として盡力し更に勞働同盟會支部理事、熊本縣海外協會支部理事として此方面にも貢献する處大である、家族は夫人仁壽、長男敏雄、長女政子がある。

伊藤尚氏

出生　明治三年十一月十八日
原籍地　熊本縣八代郡鏡町
現住所　馬哇島ブウネネ
職業　日本人郵便局主任

明治三十五年七月十五日布哇の土を踏んだ氏はホノルルにをること半年にして加哇島ハナペペ日本語學校に聘せられて同校に教鞭を執る、ハナペペに二年を暮したが此間ホノルルに出て『ホノルル新聞』の記者たりしこともある、明治三十九年三月馬哇島教育會の招聘に應じブウネネ日英學校（現在ブウネネ日本語學校の前身）の教師となり五年間勤續した、其後同地に日本人郵便局を開設し日本人郵便物一切を取扱ひて今日に至る、地方の元老にして公共事業に盡す處多くブウネネ教育會役員、熊本縣海外協會ブウネネ支部長、ブウネネ基督教會役員に推さる、明治四十二年數ヶ月日本に歸省したることあり、家族は夫人トシ子、長男帝次、長女トワ、次男鐵三、三男俊半、四男高雄等がある。

伊藤平次郎氏

出生　明治十四年十二月二十三日
原籍地　東京市芝區三田同朋町
現住所　馬哇島ラハイナ
職業　宗教家

氏は明治三十五年慶應義塾を卒業して米大陸に渡航し加州南加大學に學び同四十五年日本に歸つた、其後間もなく妻帶し夫婦共に再び渡米、ウエスト、ヴアヂニヤ大學よりボストン大學神學部に轉じてこれを卒業、爾來聖職に就いて各地の教會を司宰してゐた、大正十三年五月美以教會傳道局の命により美以教會牧師として馬哇島ラハイナに赴任して今日に至る、布教の傍らラハイナ日本語學校長として教育方面にも活動してをる、夫人シマあるも子供はない。

伊藤庸次氏

出生　明治二十二年一月八日
原籍地　宮城縣亘理郡坂元村
現住所　オアフ島ワヒアワ
職業　工場支配人

氏は明治四十年一月十五日布哇に上陸し加哇島リフエ耕地に三年間勞働した、明治四十三年ホノルルに出で自動車修繕所に入りて自動車修繕の技術を研究し、キャシナー、グラーヂに勤むること三年にして大正八年三人合資のワヒアワ、グラーヂを開設し自動車修繕、附屬品販賣に從事した、業務發展に伴ひ大正九年二月、組織を改めてワヒアワ、グラーヂ株式會社となし氏は其大株主として副社長兼支配人として經營に努力を捧げてをる、大正十二年九月歸國、恰かも關東大震災直後の横濱東京を見物し十二月歸布した、ワヒアワ本願寺法務委員にして書記に推され又た學務委員をも兼ねてをる、人望ある新進實業家で家族は夫人コイサ、長男勉、長女マサ子、次女レイ子等がある。

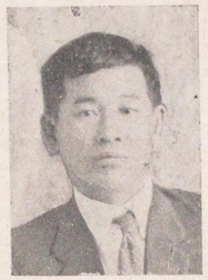
伊藤理一郎氏

出生　明治十四年十二月十五日
原籍地　廣島縣甲奴郡田總村
現住所　オアフ島ワヒアワ
職業　商業

氏は明治三十三年二月布哇に渡來した、馬哇島ラハイナ耕地に就働すること二年にして布哇島に轉じヒロ、ワイアケア耕地に二年をりてホノルルに出で川原商店に三年間勤務した、明治四十一年ワヒアワ關屋商店に入り支配人として在勤十ヶ年、大正七年日本に歸省留ること二年にして大正九年歸布するやワヒアワに伊藤商店を開業、日米雜貨食料品の販賣に從事して今日に至る、公共事業に關係しワヒアワ本願寺法務委員、學務委員に推され前者は會計の任にある、釣魚を道樂としハレイワ方面大公望の先輩である、夫人シゲヨ、長男春雄、次男靜美、長女リシコ、次女澄子、三男秀三、四男孝次、三女マリ子等家族が多い。

伊津野忠三氏

出生　明治十一年五月十八日
原籍地　熊本縣下益城郡守富村
現住所　ホノルル市ククイ街三二二
職業　會社支配人



氏は明治三十二年七月自由渡航、來布以來ホノルルに在住して最初は時計貴金屬類の行商として各島各地を巡回したが三年後オアフ鐵道會社の機械部に働き十二年間勤續した、其後スタンダードオイル會社に二ケ年勤務したが大正二年日本人火葬會社の設立せらるるや支配人に擧げられ同會社の經營に任じて今日に至る、家族に夫人マキのみにて子なし。

伊積光行氏

出生　明治二十九年一月十日
原籍地　熊本縣宇土郡綠川村
現住所　馬哇島ハナ
職業　商會支配人

氏は馬哇島キバフルに生る、嚴父馬太郎氏は明治二十八年頃來布し多年ハナ地方に在住した、幼時をナヒクに送りホノルルに移住すること三年、此間公立學校にて普通教育を受く、日本人系米國市民なるを以て馬哇島ワイルクにて巡査を奉職し二年後即ち大正九年歐洲大戰突發に當り選拔徵兵に應じて米國軍隊に入り約一ケ年勤務して伍長となる、除隊後ハナに歸りハナ商會カエレク支店の支配人たること三年、大正四年ハナ商會本店の支配人となりて今日に至る、地方有數の新進實業家である、家族は嚴父馬太母堂ヤス共に健在にして健行、勝行の兩弟、外に二人の妹がある。

飯島由太郎氏

出生　明治十七年九月十日
原籍地　山梨縣東山梨郡平等村
現住所　オアフ島ヘイア
職業　商業

氏は明治四十年十月を以て布哇の人となつた、オアフ島ワイマナロ耕地に就働して間もなく請負仕事に移り十年間耕地有數の事業家として活動した、大正六七年の交、氏は卒先して勞働者待遇改善運動を起し寢食を廢して奔走の結果漸く其の目的を達したるもそれがため注意人物として耕地支配人に睨まれ遂に耕地退去の已むなきに至つた、爾來ヘイアに移り日米雜貨食料品飯島商店を經營して今日に至る、ヘイア日本語學校學務委員であり地方公共事業に奉仕すること熱心である、家族は夫人タク、長男義晴長女滿江、次女千代子、次男幸雄、三男巖、三女保子、四男清則あり。

池野正男氏

出生　明治二十四年五月一日
原籍地　東京市深川區龜住町
現住所　オアフ島カイルア
職業　學校長

大正二年九月布哇の人となつた氏はホノルルにありて畫筆に親み肖像畫等を揮毫してゐたが大正五年學校教員となりオアフ島ハウラ日本語學校を主宰すること七年に及んだ、大正十二年カイルア日本語學院長として就任して今日に至る、カイルア青年會を創立して現に其幹部たり、學校を中心して地方邦人の指導に貢献してをる、家族は夫人リツ子、長男筆男、長女佐紀子、次女泰子等がある。

生長榮助氏

出生　明治十九年六月二十二日
原籍地　山口縣熊毛郡室積町
現住所　オアフ島ワイパフ
職業　工場支配人

明治四十年七月一日布哇の人となつた氏はホノルル上陸後直ちに馬哇島プウネネ耕地に赴き就働二年にして布哇島ハマクアのデッチ工事に轉じ十四ヶ月を其處に過してオアフ島に轉じ眞珠灣ドライドッグ工事に就働した、大正二年獨力を以てワイパフに自動車修繕所を開業したが業務擴張に伴ひ大正六年組織を改めて株式會社ワイパフ、オート、リペア、ショップとなし氏はその大株主として又た重役支配人としてグラーヂの經營に敏腕を揮つてをる、氏の創設せるワイパフ、グラーヂは實にオアフ島地に於ける邦人自動車修繕所の嚆矢である、家族は夫人クニ子長女政子、長男岩夫、次男保、三男勇、次女梅代等あり、ワイパフ曹洞宗教團の會計、ワイパフ日本語學校の會計として公共事業にも盡力してをる。

泉原寛海氏

出生　明治九年八月二十七日
原籍地　廣島縣廣島市松川町一番地
現住所　ホノルル市キング街九七五
職業　宗教家

氏は廣島市松川町の古刹法正寺の住職で大谷派本山の命を受けて大正七年十一月二十五日、布哇布教狀態視察のために來布した、布哇の人となつた氏は視察傍ら布教に從事し大正八年五月十九日本山より東本願寺ホノルル布教場を公認さるる迄に漕つけた斯くて倍す教勢發展に努力せる結果大正十一年十一月十一日、大谷派本願寺布哇別院に昇格さるると同時に氏は輪番として開教主任に任ぜらる、氏は別院を中心に教團、婦人會、青年會、日曜學校、處女音樂會の各所屬團體を通じて教化に勗めてゐたが、公私兩樣の要務を帶びて大正十四年七月日本に歸省した、今は夫人芳野、長女隅江、長男寛、二男浩、二女輝子等の家族と共に鄉里にある。

磯村高助氏

出生　明治十五年七月十日
原籍地　山口縣玖珂郡玖珂町
現住所　ホノルル市クキン街
職業　鷄肉商

氏は西洋料理研究のため明治三十五年九月に來布した、故石村市五郎翁に就て西洋料理法を學ぶ傍らレストラント、ホテル等に勤めて實地に研究する處あつた、石村翁逝くや氏はレストラント、ホテルに働く者、料理を營業とする者のため磯村コック學校を創立し十年間に亘つて多數の子弟を養成した、大正八年アアラ市場の開設さるるや場内に鷄肉販賣店を開始し盛んに營業してをるが宴會其他の西洋料理、日本料理の仕出請負にも應じてゐる、夫人ハルの間に長男榮、長女房子、澄子の一男二女がある。

糸賀淺吉氏

出生　明治六年二月十五日
原籍地　廣島縣廣島市西大工町
現住所　ホノルル市ホテル街一六七
職業　料理店並に理髮店營業

明治二十七年一月四日來布せる氏はホノルル上陸後直ちにマイマナロ耕地に四ヶ月就働し馬哇島キバフル耕地に轉じて四五年を過した、其後ホノルルに出で白人家庭に勤むること二年にしてヌアヌ街に理髮店を買收し十九年間營業を繼續して今日に至り同業者間の成功者を以て目せらる、大正八年十二月十四日ホテル街にチエリー、レストラントを開業し理髮店とレストラントの兩者を經營してをる、大正四年日本に歸省したことあり、家族は夫人トヤの間にマツエ、準一、一二、成三の一女三男がある、廣島市人會の幹部に擧げらる。

茨木小彌太氏

出生　明治二十年九月一日
原籍地　長野縣上田市
現住所　ホノルル市ワイキキ
職業　商業

氏は明治三十八年七月布哇に來る、多年商店員として商業の知識と經驗を得、ワイキキに日米雜貨食料商茨木商店を開業して今日に至る、地方の有志で家族は夫人俊子、長男毅、次男浩と外に一人の令弟がある。

橋本松治郎氏

出生　明治六年四月二十日
原籍地　富山縣上新川郡新保村
現住所　ホノルル市ベレタニア街
職業　電氣治療所主

氏は明治三十二年十二月布哇に來る、オアフ島カフク耕地に就働すること一年にして同三十三年ホノルルに出でマッセージ業に就く、爾來ベレタニア街に電氣按摩、精神治療所を經營して今日に至るが明治四十二年精神治療法研究のため日本に歸り一年を經て再び布哇の人となる、氏は昌庵と號し富山縣人會顧問、本派本願寺護持會參事、日本人協會地方委員、東本願寺護持會理事として公共事業に盡力してをる、家族は夫人サト、長男强佐あり、夫人は産婆として知られ長男强佐氏はイオラニ、ハイスクールを卒業し米大陸の大學に電氣工科を修學中である。

橋本敬三氏

出生　明治二十八年九月二十一日
原籍地　廣島縣安藝郡戸坂村
現住所　ホノルル市カイムキ五番街
職業　商會員

氏は布哇島コハラ、ハヴイ耕地に生る、日英兩語の小學教育を了りてハヴイ耕地商店に勤めたが支配人の信任を博して重用せらる、大正七年ホノルルに出でルーアス、クック商會に入り日本人部主任として今日に至る、日本人系市民中有爲の青年事務家である、氏の嚴父早吉氏は明治二十四年三月第十五回船の移民として來布し永年コハラに在住し明治四十一年同地にて病死した、老母タマエは日本の鄕里にあり、氏は早吉氏の次男にして兄弟四人あり令兄喜代市氏は布哇銀行コハラ支店員、令弟誠一氏はハヴイ耕地會社簿記係りを次弟德一氏はハヴイ、サーヴイス、ステーションを經營し末弟薫氏は日本にて勉學中である、敬三氏は夫人忍、長男一郎と共にホノルルにあつて溫い家庭を營んでをる。

橋本秋代氏

出生　明治三十四年二月十八日
原籍地　山口縣熊毛郡周防村
現住所　布哇島ハカラウ
職業　公立學校教師

氏は布哇に於ける第二代日本人の一人である、父竹二郎（大正十三年十月十日死亡享年五十五歳）、母はカメ、その長女として生れ土地の公立小學校を經てホノルル、ノーマル、スクールに學び大正十一年卒業、ハカラウに歸り公立小學校教師として就職し今日に至る、氏は父歿後の一家を引受け女戸主として家族數人扶養の義務を果すのみならず妹春代をノーマルスクールに、次妹シモをヒロハイスクールに入れて勉學させてをる、陷り易き虚榮の弊風にも染まず質素に身を持し母に孝養を怠らず殊勝なる若き女性として地方に知られてをる、氏は相當日本語教育の素養ありハカラウ日本語學校よりヒロ明照院高等女學校第一回卒業生で時の總領事諸井六郎氏より優等褒狀を受けた程である、亡父竹二郎氏の原籍地は山口縣熊毛郡周防村字虹川で現に數人の兄弟が鄕里にをる。

橋本伊三吉氏

出生　明治三十一年一月十二日
原籍地　山口縣大島郡和田村
現住所　布哇ホノム
職業　製糖場機械技師

氏は布哇に生れ米國市民權を有する第二代日本人の一人である、ホノムに出生、公立小學校卒業後ホノム耕地製糖場に勤務する傍ら獨學を以て機械學を研究し一般機械に關する知識と技能を會得し設計と製圖に長じてをり製糖場有爲有能の人物として耕地支配人や外人の信用が厚い、資性温順で明晰なる頭腦の持主である、現に同地青年會長、日本語學校學務委員として社會公共の爲めに寄與する處多く、夫人素子の間に長男望、次男忍の二男子を擧げて圓滿な家庭を作つてをる。

橋本清市氏

出生　明治十一年二月二十三日
原籍地　廣島縣佐伯郡地御前村
現住所　馬哇島カフルイ
職業　商會員

氏は明治二十七年布哇に渡來した、二年を經て日本に歸つたが間もなく再渡航し布哇島ヒロ、ワイアケア耕地の耕地商店に入りて十三年間勤續した、それより日本に歸り一年間を送り三度び布哇の人となるや馬哇島カフルイに到りカフルイ商會に勤めて今日に及ぶ、カフルイ商會倉庫部主任である、カフルイ日本語學校學務委員ワイルク本願寺法務委員、馬哇神社の世話係りとして公共事業に熱心であるが野球を愛好しカフルイ日出倶樂部幹部としてカフルイ日本人チームに盡力し彌次隊長として知らる、家族は夫人マツ、長女綾子（中本氏に嫁す）、長男信三、次女房枝、三女政枝、次男順一、三男勳一等がある長男信三氏は大正十五年マッキンレーハイスクールを卒業した。

橋本萬槌氏

出生　明治十八年二月一日
原籍地　山口縣大島郡屋代村
現住所　ホノルル、フエネ街二四五五
職業　商業

氏は明治四十一年一月五日來布し、ホノルル西村旅館の事務員たること二年、其後富田政之助氏等の經營する精精堂商店に入り支配人として今日に至る、新進の實業家にして商機を見ること敏に能く商界の趨勢を洞察して謬らず精精堂商店の今日ある氏の努力與つて大に力がある、多年ホノルル日本人商業會議所の役員であり、パラマ學園の學務委員として社會的方面にも盡力してをる、夫人ナカの間に政江、政雄、正人、三郎、芳雄、ミチコ、章の二女五男を有する子福者である。

橋口盛左衛門氏

出生　明治十八年五月一日
原籍地　鹿兒島縣川邊郡枕崎町
現住所　ホノルル市ヌアヌ街
職業　商業

氏は明治四十一年十二月二十七日ホノルルに着した、布哇島カウ耕地に勞働すること三年にしてホノルルに出で靴商を開業した、大正四年リヴァ街に店舗を設けて後ちベレタニア街に移轉し更にアアラ街に支店を置きて業務の擴張に努め貸家業をも兼ねたが不幸失敗に終りて事業一切を債權者に讓渡して無一文となりて一時非常な窮境に陷つたが不撓の精神を以て再起を計り大正十四年ヌアヌ街にヌアヌ靴店を開業して今日に至る、妻ありたるも故ありて離婚し一女子を有す。

原　直之氏

出生　明治六年七月
原籍地　廣島縣吳市寺本町
現住所　ホノルル市ヌアヌ街
職業　鐵管請負業

氏は明治二十七年七月來布した、馬哇島キバフル耕地に勞働すること三年、明治三十年布哇島ヒロに移り鐵管請負業に從事して五年を過したが事業を他人に讓りて同島オーラー耕地に轉じ夫人に洋服裁縫業を營ませ自分は酒店に六ケ年間勤務した、明治四十三年頃ホノルルに出でヌアヌ街の現在場所に鐵管請負業を營み數軒の貸家を所有して今日に至る、各種の公共團體に關係し豊田人會會長として同郷人のために盡力してをる、家族は夫人マキ、長男秀雄、次男信雄、長女ミサヲ（松蔭氏に嫁す）、次女キクヨ（山崎氏に嫁す）がある。

原田常太郎氏

出生　明治十二年八月十二日
原籍地　佐賀縣小城郡晴田村
現住所　ホノルル市カリヒウカ
職業　土木建築請負業

氏は明治三十二年十一月に來布した、布哇島ヒロ附近の耕地にて勞働し間もなくオアフ島エワ耕地に移り其處にて多年耕地の請負仕事に從ふた、明治四十三年ホノルルに移り土木建築請負業を開始し原田三交社の名儀を以て盛んに營業して今日に至る、日本人技工組合以來日本人請負業組合の役員で日本人請負業者中故參の一人である、家族は夫人キヌ、長女千代子、次女トシ子、長男耕作、次男憲二、三女百合子がある。

原田　助氏

出生　文久三年十一月十日
原籍地　京都府上京區裏築地町
現住所　ホノルル市ロッケー、ヒル街
職業　教育家

氏は舊熊本藩士鎌田收氏の二男、出て原田家を繼ぐ幼時熊本洋學校に學び京都同志社に入り卒業後米國エール大學に留學し神學士となる、歸朝後東京、京都、神戸に於て基督教會を牧する傍ら六合雜誌、基督教世界の編輯に從事した、其後日本組合基督教會理事又は會長、日本聯合基督教共勵會長同志社理事等の職にあること多年、明治四十年より大正八年迄同志社總長として育英事業に從ふ、大正九年布哇大學が東洋科を開設するや教授として招聘されて來布し日本歴史及び文學講座を擔任して今日に至る、明治二十四年以來歐米を巡遊すること四回、支那、印度を視察すること數回、明治四十三年米國エヂンボロ大學より法學博士、同年アムホルスト大學より神學博士の名譽學位を贈らる、日本基督教界の宿老にして教育界にも貢献少なからず、今上陛下御即位に際し功勞を以て勳五等に叙せられた、大正八年日米關係委員として渡米同九年も同樣、排日問題の研究、善後策に就て活動した、布哇にあつては日米人親善融和のため盡力し內外人間に信望がある、家族は夫人咲子の間に長男健、次男泰、長女芳子（片桐氏に嫁す）、次女美佐尾（毛利氏に嫁す）、三男淳、三女文子、四女美也子、四男精の四男四女あり、長男健氏は外務事務官として奉職しセネヴァの國際聯盟事務局に在勤中である。

原田　剛氏

出生　明治二十年八月八日
原籍地　熊本縣鹿本郡中留村
現住所　馬哇島カフルイ
職業　商業

氏は明治三十五年六月二十日ホノルルに上陸した、加哇島マカウエリ耕地に勞働すること一ケ月半にしてオアフ島エワ耕地に轉じ一ケ年を經てホノルルに出でワイキキなるエルクス倶樂部に勤むること十五六年の長日月に及んだ、大正七年馬哇島カフルイに移り自動車營業を開始、大正十二年五月兼業として同地に金物類、自動車附屬品の原田商店を開業以て今日に至る。大正九年日本を訪問數ヶ月にして歸布した。カフルイ日本語學校學務委員である、家族は夫人ミドリあるも未だ子がない。

原田春市氏

出生　明治十七年四月十五日
原籍地　廣島縣芦品郡岩谷村
現住所　馬哇島ワイルク
職業　興行師

明治三十二年十一月二十七日ホノルルに上陸した氏は布哇島ホノカア耕地に勞働したが同三十三年六月十五日契約勞働廢止となるや同島クカイアウ、ラウバホエホエ兩地に一年間就働した、それよりヒロに三四年を過し明治三十七年ホノルルに出で十六ケ年を此地に暮した、大正九年馬哇島ワイルクに移り原田興行部を起し各種の興行に關係して今日に至る、仁俠にして公共事業に熱心で馬哇改正會の創立者にして現に會長、ワイルク學園學務委員、ワヘルク本願寺護持會、ワイルク日本人會評議員、廣島縣海外協會ワイルク支部評議員に擧げらる、家族は夫人リキ、一女春子がある。

原田義海氏

出生　明治十九年六月一日
原籍地　福岡縣糸島郡怡土村井原
現住所　オアフ島ワイパフ
職業　宗教家

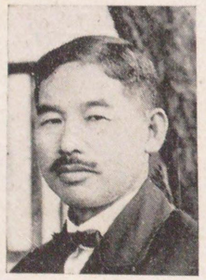
寺坊に生れた氏は鄕里の中學校を經て京都の佛教大學に入り大正七年卒業した、此の間一年志願兵として入營し豫備工兵少尉の肩書を得た、大正七年九月本派本願寺開教使として布哇駐在を命ぜられてホノルルに上陸した、ホノルルの別院詰となり布哇中學校、同高等女學校教諭を兼ぬること二年、大正九年八月ワイパフ本願寺に轉任、所屬のワイパフ學園をも經營し開教使、學園長として教學兩方面に活動し、エワ布教場をも受持ちワイパフ佛教青年會、同婦人會、同處女會、日曜學校等の事業を總攬してをる、夫人友子、長女道枝（死亡）、次女光子、三女芳子等の家族あり、家庭生活は極めて温かである。

原田耕藏氏

出生　明治二十四年六月二十四日
原籍地　山口縣熊毛郡上關村大字八島
現住所　ホノルル市バウオア街スターックト
職業　會社支配人

氏は明治二十四年布哇島コハラに出生せる第二代日本人の先驅者である、同二十七年兩親に伴はれて日本に赴き父母の鄕里にて小學校を出で明治四十二年縣立德山中學校を卒業し、横濱航路標識管理所屋島出張所會計課に奉職した、同年十二月米國遊學を志し出生地の布哇を訪問したが家事の關係上、米大陸遊學を中止し令兄がコハラに經營せる商店に入つて帳簿係となつた、明治四十五年ホノルルに出でベレタニヤ街アアラ街角に日米雜貨食料店を開業したが大正七年他へ讓渡し大正九年十二月布哇物產株式會社に入つて支配人となり邦人唯一の製氷事業を主宰してをる、家族は夫人藤廼に長女文子の二人あり文子孃は大正十五年小作氏に嫁した。

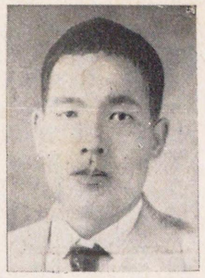
林吉松氏



出生　明治十二年四月十五日
原籍地　京都府乙訓郡向日町
現住所　ホノルル市マカレーロード
職業　學校長

氏は日本にて多年教職にあり、大正二年十一月四日ホノルル、布哇女學校教諭として來布した、後ちオアフ島カワワ學院長に轉じ二年後バラマ日本語學校長となり同校の經營に努力した、大正十四年病を獲て歸國し同十五年二月再び布哇の人となりホノルル市パワーに建設せられたマカレー日本語學校長として就職した、家族は夫人ウノ、長男吉丸、長女文子、次男吉男あるも皆な日本の鄕里にある。

林　繁次郎氏



出生　明治十五年六月一日
原籍地　廣島縣廣島市天神町
現住所　加哇島ナウエリウエリ
職業　商業、旅館業

氏は明治四十年二月十一日ホノルルに上陸した、同年五月十八日加哇島リフエ耕地に勞働し三ケ年を過した、大正二年四月一日ナウエリウエリ港に商店を開業し日本雜貨食料品を販賣する傍ら旅館とレストラントを兼營して今日に至る、大正八年三月二十三日家族を伴ひホノルルを出發して日本を訪問し滯在三ケ月にして同年八月十日妻子と共に歸布した、地方の有力家で夫人チセ、長女峯子、三女マツエ、四女トモエ、五女スミ子、次男繁雄、三男博之の家族がある。

林　龜之助氏

出生　明治七年三月十二日
原籍地　山口縣玖珂郡和木村
現住所　馬哇島ハイク
職業　鳳梨會社機關師

氏は明治二十九年十一月一日來布した、加哇島マカウエリ耕地に就働二ケ年半、ハナペペに移りて商業、農業を營みたるも久しからずして同島マクブライド耕地に於て一年半を働き更に馬哇島プウネネ耕地に轉じ製糖場の機關助手として七年間勤務した、明治四十四年バウエラに日本人經營の馬哇鳳梨罐詰會社生るるや聘せられて機關師となりて大正七年會社がハイク果物罐詰會社に併合せらるるや新會社に轉勤し依然機關師として今日に及ぶ、地方の重鎮にしてプウネネ在住中は本願寺建築委員、プウネネ日本語學校キャンプ總代であり、バウエラに於ては本願寺、同學園の建立に盡力し現にハイク日本語學校副學務委員長に推されハイク佛教青年會にも關係して公共に盡してをる、家族は夫人アサヨの間に長男正男、次男勇、三男尙、四男秀雄、長女モトヨ（山岡氏に嫁す）の四男一女がある。

林　辨藏氏

出生　明治十六年一月三日
原籍地　山口縣玖珂郡岩國町
現住所　ホノルル市シエラ通り三八八四
職業　代理業

氏は商業の目的を以て明治三十五年十二月二十七日來布し翌年ホノルル市ベレタニア街に日米雜貨卸商を開業し十數年營業せるも大正三年廢業、同年ニユーヨルク生命保險會社代理人となつて活動今日に至る、大正十四年布哇榮光社を設け保險部、化學工業研究所製品販賣部等を置き代理業として活躍を期してをる、夫人春子の間に初惠、和美、愛一、幸二の二女二男あり平和な家庭生活に怡樂してをる。

林　茂喜氏

出生　明治二十九年三月三十一日
原籍地　熊本縣飽記郡御幸村
現住所　ホノルル市カイムキ七番街
職業　寫眞館主

氏は明治四十五年三月來布、イオラニスクールに入り英語を學ぶこと三年、太平洋寫眞館に入り寫眞術を專心研究し獨立して寫眞館を開業する二年、大正五年日本を訪問し翌年再び布哇の人となりアアラ公園隣りのキング街通りに林寫眞館を起し七年間これを經營したが更に業務發展を圖り同所を友人に讓渡しホノルル寫眞業界の老舗なるホテル街山本寫眞館を買收し盛んに營業してをる、大正八年良緣あつて夫人靜江を娶り長女を首め、長男慈、次女眞子を擧げカイムキ七番街に樂しい家庭を營んでをる。

伴　敬　三氏

出　生　明治九年二月八日
原籍地　山口縣玖珂郡鳴門村遠崎
現住所　馬哇島キヘイ
職　業　商店支配人

明治三十九年五月二十日來布せる氏はホノルルに半年留まりたる後ち馬哇島プウネネ耕地ストアに入りて一年を過しカフルイ本店に勤むること四ヶ月にして明治四十三年プウネネ耕地栽培地キヘイ、ストアに轉勤し同店支配人として精勵今日に至る地方の有力家でキヘイ郵便局長として郵便事務を執掌してをる、曾てキヘイ日本語學校學務委員長たりしことあり、家族は母ヤス、弟敏雄のみにて妻子なし。

埴田昌平氏

出　生　明治十八年四月十七日
原籍地　新潟縣北蒲原郡菅谷村大字荒澤
現住所　馬哇島クラ
職　業　農　業

氏は明治三十九年三月一日ホノルルに上陸した、先づオアフ島ワイアルア耕地に勞働すること三年にしてホノルルに出で二年を暮し更に同島カネオへに於て米田耕作に從事したが明治四十四年馬哇島に移りプウネネ耕地に二三年を過し大正三年同島クラに於て農業に從ひ今日に至る、現に二十英町の農園を經營し種々の蔬菜を栽培してをる、地方の有力家にして聲望ありクラ農業組合書記、クラ青年同志會賛助員クラ日本語學校學務委員長等に擧げらる、家族に夫人俊明、長女朝惠、長男保、次男三千里がある。

半澤徹治氏

出　生　明治二十六年十一月七日
原籍地　福島縣信夫郡鳥川村
現住所　馬哇島カウバカルア
職　業　商　業

氏は大正二年八月下旬布哇の人となる、馬哇島カウバカルアに於て令兄太一郎氏と共同して鳳梨栽培業に從事したるも成績面白からず、ワイアコア商店に入りて二年を過し大正八年カウバカルアに歸り太一郎氏を祐けて商業を營む、大正十一年カウバカルアに日米雜貨食料品商半澤商店を太一郎氏と協力創立し氏は支配人として專ら經營に當りて今日に至る地方の新進事業家でカウバカルア日本語學校の役員たりしことあり、家族は夫人ウタ、長女初枝、次女靜枝、三女澄子がある、令兄太一郎氏は株式會社バイア商會社長兼支配人としてバイア有數の實業家である。

馬塲己作氏

出　生　明治十四年七月二十三日
原籍地　山梨縣甲府市朝氣町
現住所　ホノルル市カイムキ十番街
職　業　商　業

氏は甲斐の名門馬塲氏の一族で由緒ある士族の家に生れた、大正二年一月九日商業視察のために布哇に來り三枝家と親戚たる關係上、三枝商會（現在の米倉商會）に入り三年後バラマ、デシヤレー入口のキング街通りに雜貨商店を開業してゐたが大正十年一月他に讓渡して日本に歸省、同年再び布哇の人となり出雲大社入口の鐵冷鑛泉を經營した、大正十三年四月カイムキ十番街の所有土地に家屋を建築して日米雜貨食料店を開いて今日に至る、家族は夫人テルの間に二男五女あり長男信壽は日本にありて中學校を卒業し次男信雄、長女千代を首め八千代、靜江滿江、加茂惠等の子女は父母の膝下に養育されてをる、バラマに在住せる緣故上氏はバラマ日本語學校の常務委員として盡力しつつある。

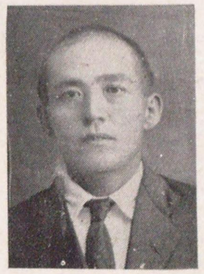
長谷川三郎氏

出生　明治二十三年一月七日
原籍地　廣島縣佐伯郡玖波町
現住所　馬哇島ハナ
職業　商業

明治四十年九月ホノルルに上陸せる氏は馬哇島ハナに赴き伯父經營の商店に三年間勤務した、大正元年令兄正一氏と協力して同地に兄弟商會を開業し更に甘蔗小作業に手を出せしもこれは失敗に歸した、甘蔗小作に從事する二年にして球突場を開き大正六七年の交、令兄正一氏の經營せる日米雜貨食料品商長谷川商店を讓受け今日まで盛んに營業してをる、地方屈指の商業家として知られハナ本願寺法務委員、ハナ學園會計に擧げらる、家族は夫人シマヨ、長男建吾、次男高雄、三男寛がある。

長谷川圓藏氏

出生　明治八年五月一日
原籍地　熊本縣玉名郡小天村
現住所　ホノルル市ベレタニア街
職業　旅館主



氏は明治三十四年十二月二十日來布し、布哇島ヒロハマクアに七年、馬哇ハイクに八年在住し此間甘蔗耕地の勞働を皮切りに事業家となり商人となり種々の職業に從事したが九年前ホノル市に出で商業を營み、數年前西海屋旅館を讓受けこれを經營して今日に至る、新聞布哇日報社に關係して其重役たりしことありバラマ日本語學校副學務委員長として盡力し外國語學校取締法問題當時は强硬な試訴論を持して大に活動したものである、夫人サジュ、長男速水の家族がある。

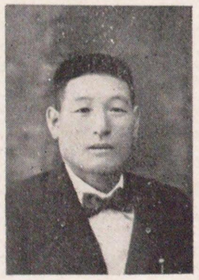
濱崎甚助氏

出生　明治二十三年一月十七日
原籍地　山口縣熊毛郡上ノ關村字八島
現住所　馬哇島下バイア
職業　商業

氏は明治四十一年一月十五日來布した、馬哇島ハマクアポコ耕地に於て勞働に從事すること六ケ月にして上バイアに移り同耕地に一年間就働したが獨立事業を志して同地の高月商店に入り一ケ年の店員生活を經驗した、明治四十四年下バイアに小規模の藥店を開業し傍ら行商などして業務發展を圖り遂に今日の如く地方有數の川口商店を經營するに至つた、氏は堅實第一主義を標榜して無謀な取引をやらない濱崎は養子先の姓にして本姓は川口氏、家族は夫人キク、長女美代子、長男一雄、次男次雄、次女艶子等あり、大正四年九月觀光團にて歸國し、現夫人を娶りて大正五年一月歸布した、曾て下バイア同志會役員、青年會役員たりしことあり現にバイア本願寺法務委員、下バイア滿德寺教團理事に推されてをる。

濱崎好松氏

出生　明治十四年七月二十六日
原籍地　山口縣熊毛郡佐賀村
現住所　布哇島ククイハエレ、カプレナ
職業　商業



明治三十五年十一月十日汽船香港丸で夫婦共に來布した氏は布哇ペペケオ耕地に居ること一ケ月にしてククイハエレ、カプレナに移り耕地勞働者として四ケ年を甘蔗畑に送つた、しかも一介の勞働者にては物質的成功のほど覺束なきを看取し同地に商店を開き雜貨食料吳服反物等を販賣して今日に至る、多年の苦心經營その効空しからず家宅を新築する等成功見るべきものがある、氏は公共心厚く一時青年會を發企創立しその會長として盡力した、青年の數減少して青年會は解散されたが日本語學校の經營に力を致し、多年學務委員、會計、書記等の役員を勤め此數年間は學務委員長に推されてをる、夫人シゲの間に長女ヒサノ、長男義雄、二女シズコ、三女チエノ、四女コトエ、次男伊勢雄の四女二男あり頗るの子福者である。

濱元貞助氏

出生　明治十一年十二月八日
原籍地　山口縣大島郡小松町
現住所　ホノルル市ヤング街
職業　自動車倶樂部會長

氏は明治二十七年六月二十九日ホノルルに上陸した、馬哇島マカラヤ耕地に於て叔父の經營せる商店に働きながら公立小學校に通つて英語を學ぶこと四年、明治三十二年ホノルルに出で太平洋倶樂部の司厨長となり二年間勤務した、明治三十五年より加哇島マキー製糖會社所屬商店員となり同四十一年布哇島コナ開拓會社の副簿記係りとして傍ら商店を經營したが久しからずしてホノルルに歸り合衆國收稅局の收稅吏たること四年、大正二年これを辭してマクファレン商會に入り二年後ビー、エフ、デイリング、ハム會社に勤め大正九年まで勤續した、大正九年赤十字社員日本觀光團を發企組織して日本に旅行し爾來三年連續して同樣の觀光團を主催した、大正十二年スタンダードオイル會社員となり同十四年まで勤務、同十五年七月アロハ自動車倶樂部を組織して會長となり今日に至る、以前マキキ日本語學校學務委員長、小松町人會長たりしことあり現に大島郡人會副理事長である、家族は夫人イセ、長女濱代（濱野氏に嫁す）、長男正夫、次男涉、三男武夫、次女貞子がある。

濱野國松氏

出生　明治二年九月七日
原籍地　廣島縣安藝郡仁保村字大河
現住所　加哇島リフエ、フライア
職業　商業

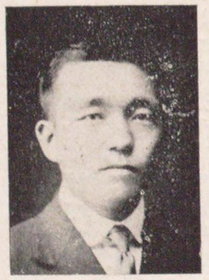
氏は明治二十二年十月二十五日、官約移民第十回船にて來布した初期渡來者の一人である、加哇島マキー耕地に就働すること三年、明治二十五年ホノルルに出で令兄久吉氏を佐けて濱野商店の經營に力を濺いだ、明治三十三年八月加哇島ナウエリウエリなる大竹商店を買收して濱野商店となし獨立營業をなし業務發展大に見るべきものあり明治四十二年十月ライス家の甘蔗耕地フライアの開拓せらるるやライス氏の勸告に從ひフライアに支店を設けた、大正八年九年の交ナウエリウエリを引揚げフライアに本店を移し盛んに營業して今日に至る、加哇屈指の成功者として知らるるも近年家業を嗣子壯平氏に一任し新築住宅に隱棲して老後を養つてをる、家族は夫人カヨ、長男壯平、次男勝一、並に二女あり、壯平氏は布哇中學校を卒業し妻帶して家業に勵み次男勝一氏は布哇大學に在學中、二女は定岡氏の兄弟に嫁してホノルルにある、氏は加哇島に於ける元老の一人で內外大小の公益事業に盡す處少なくない。

濱名初槌氏

出生　明治二十三年二月四日
原籍地　山口縣玖珂郡灘村藤生
現住所　オアフ島ヘイア
職業　漁業

氏は明治四十一年十月布哇に渡航す、加哇島コロア耕地なる嚴父百次郎氏の許に至り耕地の仕事に從ふこと一年、明治四十二年オアフ島ヘイアに轉じ漁業を營みて今日に至る、大型發動機漁船を所有し數名の漁夫を使用してをる、百太郎氏は五年前に病歿して在らず、氏は地方有力家の一人としてヘイア日本語學校學務委員に推され公共事業に盡瘁してをる、家族は夫人カナ、長女ミチ子、次女ウラ子、三女ミツエ、長男數間、四女チエ子がある。

濱田台五郎氏



出生　明治二十八年七月十九日
原籍地　廣島縣佐伯郡草津町
現住所　加哇島ケカハ
職業　耕地事務所員

氏は明治三十五年四月嚴父熊治郎氏に伴はれてホノルルに上陸した、布哇島オーカラ耕地にをること一年四ケ月、熊治郎氏が加哇島ケカハ耕地に就働するや氏は同地にて公立小學校に通學した、卒業後ケカハ耕地製糖場に勞働しながら英語夜學校に通ひ二年後砂糖分析技手に拔擢され事務所に勤務して今日に至る、大正十二年宅地を購入し數軒の住宅を建築し、夫人タケヨ、長女シヅエ、次女ユキエ、三女ミツ子、四女フユ子、五女エミコの家族を擁して平和な家庭を作つてをる。

濱田勘吾氏

出生　明治二十三年十月十日
原籍地　廣島縣佐伯郡五日市町
現住所　ホノルル市ヌアヌ街
職業　旅館主

明治四十年一月來布した氏は布哇島ヒロのボーディング、スクールに入り同四十五年卒業してヒロに通辯事務を開始した、米大陸に遊學すべくホノルルに出府したが大陸遊學を中止せざるべからざる事故に會してホノルル住田商會に入つて不本意な店員生活を數年送つた、大正三年加哇島に轉じホフガード商會支店たるマナ商店の支配人となり十餘年を同地に過した、大正十四年ホノルルに出でヌアヌ街の旅館共樂館を引受けて經營今日に至る、マナ在住中はマナ教育會長、副會長、書記に推されマナ青年會を創立して會長に擧げられ、大正十三年皇太子殿下御成婚奉祝記念堂建立發企者となるなど公共事業のため大に盡力した、夫人ヨシ、長女君枝、長男正雄の家族がある。

濱田初太郎氏

出生　明治十六年二月十六日
原籍地　廣島縣安藝郡仁保村字本浦
現住所　ホノルル市ヒユーステース街
職業　ジャンク商

明治三十一年十月六日父の呼寄にて來布、ホノルルに一ヶ年を過して布哇島に渡り間もなく加哇島カバアに轉じ白人經營の酒店に勤むること六ヶ年、明治四十年ホノルル市に出で現在の場所に貸馬車業を營むこと六年にしてジャンク商を創め精勵奮鬪の結果好成績を擧げて相當の資產を作るに至つた、性温厚、公共心に富み多年カカアコ日本語學校の役員として經營維持に盡力し大正十二年學校取締法問題にて學校分立するや非試訴派同盟會副理事長として大に活動し非試訴派校のために努力する處大なるものがあつた、氏は又た廣島縣海外協會ホノルル支部參事員に推されてをる、家族は夫人ツナ、長女光代、二女初代、三女アヤ子、長男睦雄、二男博、三男良雄がある。

濱田九一氏

出生　明治五年十二月二十二日
原籍地　山口縣大島郡油田村伊保田
現住所　オアフ島ワイパフ
職業　商店員

明治三十一年十月十一日ホノルルに上陸した氏は直ちにワイパフ耕地に赴き甘蔗畑に勞働すること暫時、耕地商店に轉じて二十有餘年一日の如く精勵勤續今日に至る、現在に於ては耕地商店日本人部主任として又た耕地在住同胞間の故老として重きをなす、本願寺の信徒にして役員に推されてをる、明治三十七年十一月日本に歸省、同三十八年十月歸布、家族は夫人アサの間に長女藤枝、長男豊、次女三千江、次男弘、三男利郎、三女愛子、四男七生の四男三女あつて家庭は頗る賑やかである、長女と次男は日本にあり、長男豊氏は妻を迎へてワイパフ耕地グラーヂに勤めてをる。

芳我日下氏

出生　明治十三年十一月二十三日
原籍地　愛媛縣南宇和郡内海村
現住所　ホノルル市セレノ街
職業　新聞記者

氏は明治三十四年香港丸に搭じて布哇の人となる、オアフ島ワイアルア耕地に於て甘蔗計量係を勤むること一年半にしてワイアルア郵便局事務員となり三ヶ月を經て旭商會の簿記係りとなつた、明治三十七年ホノルルに出で獨力ミメオグラフ刷で朝刊『勞働新聞』といふ日刊新聞を發刊したが一年餘にして廢刊し明治三十九年スミス街に漢城旅館を開業し更に移民取扱鑑札を得て移民の大陸輸送を開始しグレートノーザン鐵道會社と契約しチャーター汽船を以て大擧移民をシャトルに輸送すること四航海に及んだ、明治四十一年邦字新聞『新日本』を買收して夕刊『自由新聞』を日刊し間もなく志保澤氏經營の朝刊『布哇新報』をも手に入れ芝染太郎氏と共同經營し軈て自由新聞を布哇新報に併合した、明治四十四年全權を芝氏に讓つて布哇新報社と關係を絶ちて一旦歸朝し一年後再び布哇に來り日布時事社編輯局同人となり間もなく布哇報知社に轉じて今日に至る、邦字言論界の故老である、家族數人あり。

芳賀七郎氏

出生　明治二十三年四月十五日
原籍地　福島縣伊達郡長岡村
現住所　ホノルル市クアキニ街
職業　商會員

明治四十年一月十一日來布せる氏はホノルルにありて學僕生活を送ること兩三年にして紙類輸入商パーテン商會に勤續すること六年間に及んだ、偶ま同商會支配人テーラー氏が別にホノルル、ペパー商會を創立するや氏も亦たテーラー氏と去就を共にしてホノルル、ペパー商會の事業に參與し日本人部主任として今日に至る、東北人會理事たりしことあり現にホノルル日本人商業會議所會員である、家族は夫人ムメノあるも未だ子寶を得ず。

畑貞之助氏

出生　慶應三年十月二十六日
原籍地　廣島縣廣島市堺町二丁目
現住所　同上
職業　商業

氏は明治二十七年布哇に來る、布哇島に於て耕地勞働に從事せるも獨立事業を志して商店員となり、行商人となり、馬車屋となり具さに辛酸を嘗む、明治三十四年の春、素志を果して布哇島ヒロに一商店を起し畑商店と稱す、當初は微々たる一小雜貨店なりしも拮据經營の結果、營業繁榮、商運燗んとなり遂に布哇屈指の輸入商となりヒロの目貫通りフロント街に宏壯なる畑ビルディングを建築して卸、小賣部を置き更にホノルルに驥足を延ばし食料雜貨卸部と呉服反物小賣部を開設しヒロ本店は女婿香川勝次郎氏、ホノルル支店は女婿中村精一氏をして支配經營の任に當らしめ、氏自身は日本にありて大阪、廣島兩地の仕入部を總括し内外相應じて商會に活躍してをる、氏は邦人商業家中最も覇氣ある進取的人物で曾て東洋汽船會社をして南米定期船をヒロに定時寄港せしめし際の如き主なる運動の一人であつた、家族は夫人マサ、長女キヨノ（中村精一氏に嫁す）、長男保、三女貞子（香川勝次郎氏に嫁す）、四女綾子、五女富美子あり、マサ夫人は良人を祐けて今日あらしむる内助の功大なるものがある。

畠中善吉氏

出生　明治二十一年十一月十三日
原籍地　山口縣大島郡小松町志佐
現住所　ホノルル市ナマウー街二五三五
職業　商業

明治三十九年五月七日汽船マンチユリヤ號で來布した氏はホノルルに二ヶ年の學僕生活を送つて英語を勉強した後キング街ワー、イン、チョン商會に入つて日本人部主任たること八年、獨立營業を志し其準備のため大正六年七月日本を訪問し同年九月歸布するやホテル街一六六に教育玩具を主とする玩具類輸入販賣店『コドモヤ』を開いた、蓋し邦人の玩具專賣店は『コドモヤ』を以て嚆矢とする、氏の商策は美事圖に當り業務繁榮、今日では日米歐洲各國の玩具店として一方に雄視するに至つた、リリハ山手に住宅を新築し附近に貸家を所有してをる、家族は夫人貞代、長男正、次男定、長女美江子の四人ある。

早木森太郎氏

出生　明治十六年五月四日
原籍地　佐賀縣小城郡戸川村上戸川
現住所　加哇島カバア
職業　會社員

氏は明治四十一年十月三十日南米秘露に渡航して勞働に一ヶ年を過したが明治四十二年十二月三十日布哇に轉航ホノルルに上陸した、オアフ島エフ耕地やサイザル製造場に數ヶ月間勞働して加哇島キラウエア耕地に移り勞働七ヶ年にしてカバアの酒店員となり二年後禁酒法實施に伴ひて酒店が閉鎖するや自動車業に轉職して約二年を過した、大正九年一月カバア曹達水製造會社員となりて今日に至る、布哇に家族なく日本には令兄喜三郎、母堂タネがある。

早川治郎氏

出生　明治十三年二月十七日
原籍地　廣島縣雙三郡和田村
現住所　ホノルル市クナ、レン
職業　新聞記者

氏は明治四十一年八月一日布哇の人となつた、一年をホノルルに暮し明治四十二年布哇島ヒロに移り新聞記者生活に入り殖民新聞、布哇毎日の主筆、又は經營者となり雜誌新世界を起せしこともある、大正七年頃ホノルルに歸り布哇朝報社に筆を執れるも久しからずして日本に旅行、大正九年十二月歸布後は日本人の布哇勞働聯盟書記となり、大正十二年布哇新報に入り、翌年主筆となり更に社長となり大正十五年同新聞の廢刊するまで關係した、家族は夫人タカあるのみ。

春永萬喜氏

出生　明治二十五年七月三十日
原籍地　熊本縣八代郡鏡町
現住所　布哇島ホノカア
職業　自動車業

氏は明治三十五年八月汽船ゲーリック號にてホノルルに上陸した、來布當初は布哇島ヒロにをり、パウアウに移つて二年後ホノカアに轉じて今日に及んだ、氏はホノカアに於て馬車業を營んでゐたが前途を察して早くも自動車を購入して馬車に代へた、五年前藤野氏と共同してホノカア劇場を建ててその方面にも活動してをる、地方の世話役で學務委員として日本語學校の爲めには寢食を忘れて奔走し町内委員の一人としてホノカア町の公共事業に盡力してをる、夫人シズ子、子供は長男義明のみ、大正十一年二月來布以來初めて日本の郷里を訪問した。

羽野島吉氏

出生　明治十一年十二月十九日
原籍地　福岡縣朝倉郡雛代村字藤島
現住所　オアフ島ワイアナエ
職業　耕地勞働者監督

氏は明治三十二年八月ホノルルに上陸した、最初オアフ島アイエア耕地に働いたが間もなく馬哇島に轉じ種々の職業に從事して十八九年を同島に過した、大正八年頃オアフ島ワイアナエ耕地に移り耕地ルナとして就働今日に至る、家族は夫人ミナの外に一女喜久代に女婿吉川與右衛門氏を迎へ恒雄、行雄の二人の孫息子を得て睦しい家庭を營んでをる、吉川氏も耕地從業者で請負仕事に從事しつつある。

西村要氏

出生　明治二十九年二月八日
原籍地　廣島縣賀茂郡原村
現住所　ホノルル市リリハ街一五二九
職業　會社支配人

氏は明治三十三年、四歳の幼時兩親に伴はれて來布し、馬哇島ラハイナに成長した、大正四年ラハイナ、ルナハイスクールを卒業するや直ちにホノルルに出でホノルルジャンク商會に勤務すること一年にして大正六年共榮商會に入社して今日に至る、現に共榮商會の重役にして支配人である、前途有爲の青年實業家であつて共榮商會が邦人の株式會社中營業狀態佳良にして堅實の發展を遂げつつある氏の力に負ふ處が多い運動競技に趣味を有し青年團體に關係して體育奬勵に盡力してをる、夫人セツヨ、長女ハツエ、次女トシエ、長男學の家族で温い家庭を作つてをる。